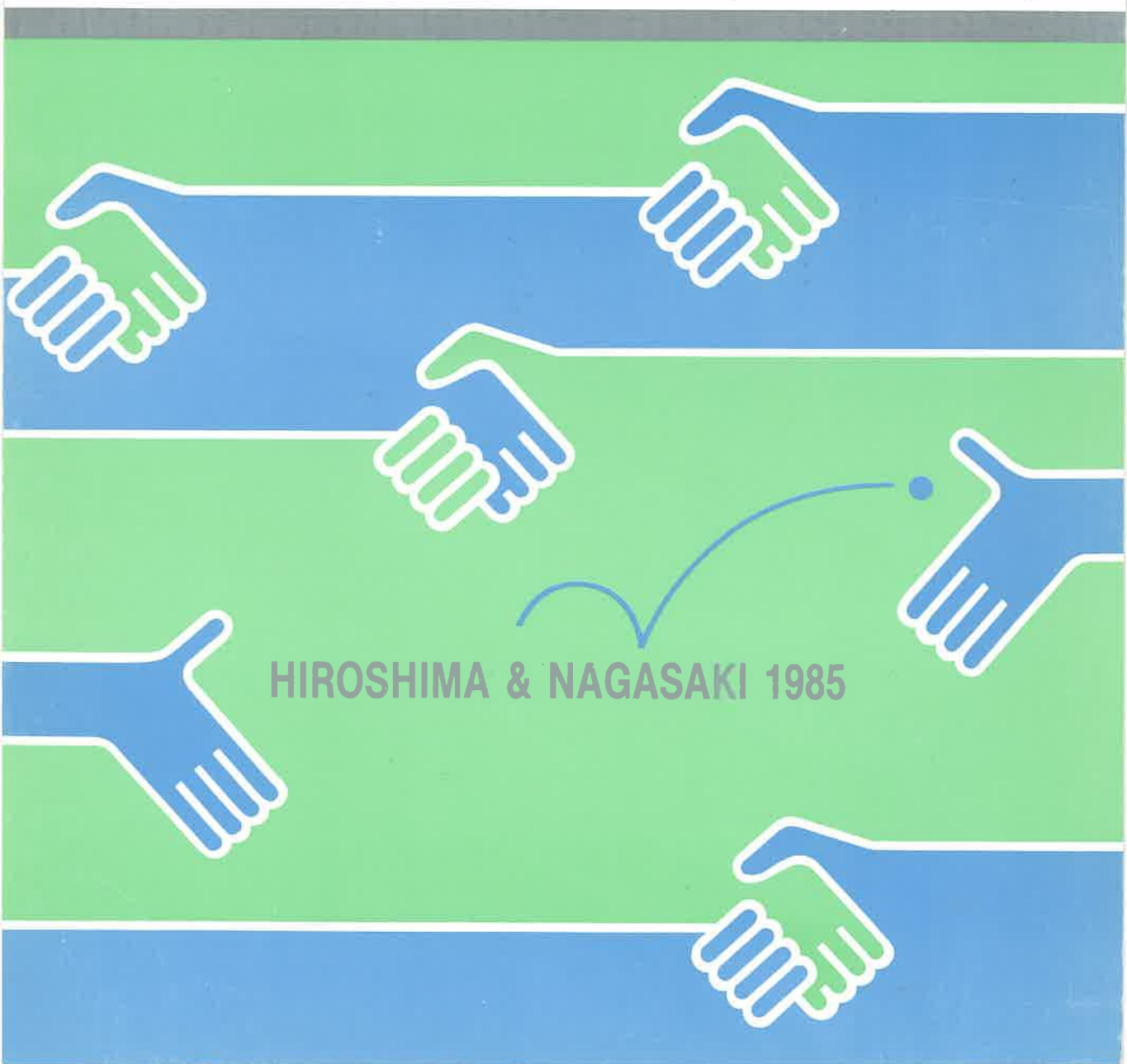


# 1st WORLD CONFERENCE OF MAYORS FOR PEACE THROUGH INTER-CITY SOLIDARITY

第 1 回世界平和連帯都市市長会議報告書











# 1st WORLD CONFERENCE OF MAYORS FOR PEACE THROUGH INTER-CITY SOLIDARITY

第 1 回世界平和と連帯都市市長会議報告書



HIROSHIMA & NAGASAKI 1985



## 会議報告書の発刊にあたって

広島市長 荒 木 武  
長崎市長 本 島 等

第1回世界平和連帯都市市長会議を昭和60年8月5日から9日までの間、海外22カ国67都市、国内33自治体、合計23カ国100都市の参加を得て、広島・長崎両市で開催しました。核兵器の廃絶に向けて都市連帯を推進している広島・長崎両市にとって大変実り多い会議でした。会議を終始盛り上げていただいた関係各位に心からお礼申し上げます。

広島・長崎両市が長年にわたって訴え続けている核兵器の廃絶は、今や世界の多くの都市で提唱され、国際世論の高まりをみっていますが、一方では、こうした都市の努力にもかかわらず、核実験が強行されるなど、決して安閑としておられる状況ではありません。

今回の会議は、こうした状況のもと、「核兵器廃絶を目指して」一核時代における都市の役割—を基調テーマとして開催し、広島では平和への取り組みについて、10都市からの報告とパネルディスカッションを行い、長崎では19都市から報告がありました。また、都市相互の意見交換も行われ、世界恒久平和の確立に向けて真剣な議論が繰り広げられました。

これらの討議の結果、核兵器廃絶の緊急性を訴えた広島アピールと長崎アピールが採択され、さらに国連事務総長へ世界平和の努力を訴えた要請文として第3回国連軍縮特別総会への対応方針も採択されました。

この5日間の会議を通して、都市と都市との連帯の輪がさらに大きく広がり、世界平和に果たす都市の役割の重大性について、共通の認識が得られたことは大きな成果だったと思います。

今後、世界各地において、核兵器廃絶に向けての都市連帯推進の動きがますます活発になることと思われませんが、本書がそのための一助となれば幸いです。



荒 木 武



本 島 等



# 目 次

5

|                    |     |
|--------------------|-----|
| 会議報告書の発刊にあたって..... | 3   |
| 会議プログラム.....       | 7   |
| 出席者リスト.....        | 11  |
| 写真で見る会議プロフィール..... | 17  |
| 開会式.....           | 25  |
| 基調講演.....          | 33  |
| 全体会議Ⅰ              |     |
| 基調報告.....          | 45  |
| 被爆者との懇談.....       | 62  |
| 全体会議Ⅱ              |     |
| 都市報告.....          | 67  |
| パネルディスカッション.....   | 85  |
| 広島アピール発表.....      | 101 |
| 全体会議Ⅲ              |     |
| 開会.....            | 105 |
| 都市報告.....          | 111 |
| 被爆体験の報告.....       | 142 |
| 長崎アピール発表.....      | 143 |
| 閉会式.....           | 151 |
| 資料編.....           | 157 |



# 会議プログラム

7

| 8月4日(日)     |                                                                                                                                                                                                           |
|-------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 11:00-21:00 | 登録                                                                                                                                                                                                        |
| 18:00-20:00 | 夕食                                                                                                                                                                                                        |
| 20:15-21:00 | ブリーフィング                                                                                                                                                                                                   |
| 8月5日(月)     |                                                                                                                                                                                                           |
| 8:00        | 平和記念公園視察<br>平和都市記念碑(原爆慰霊碑)参拝<br>平和記念資料館(原爆資料館)見学                                                                                                                                                          |
| 10:00       | 開会式 (広島市公会堂)<br>開会宣言 ヒロシマ・ナガサキ平和アピール<br>推進委員会委員長 松井 齊<br>開会あいさつ 広島市長 荒木 武<br>来賓祝辞 国連事務局次長 ヤン・モーテンソン<br>広島県知事 竹下虎之助<br>広島市議会議長 明星 正明<br>祝電・メッセージ紹介                                                         |
| 10:35       | 基調講演 軍縮会議メキシコ政府 特命全権大使・<br>ノーベル平和賞受賞者<br>アルフォンソ・ガルシア-ロブレス<br>国連大学学長 スジャトモコ                                                                                                                                |
| 11:50       | 記念演奏 ブランデン作詞・テホン作曲・「ヒロシマ」ほか<br>エリザベト音楽大学                                                                                                                                                                  |
| 12:55       | 昼食 (広島グランドホテル)                                                                                                                                                                                            |
| 14:30       | 全体会議Ⅰ (広島グランドホテル、2階孔雀)<br>―ヒロシマ・ナガサキ、核戦争は何をもたらしたか―<br>コーディネーター 国連大学学長特別顧問 永井 道雄<br>(広島会議は以下同様)<br>基調報告 広島女子大学学長 今堀 誠二<br>(財)放射線影響研究所理事長 重松 逸造<br>(財)長崎平和推進協会理事長 秋月 辰一郎<br>(財)広島平和文化センター事業部長 高橋 昭博<br>質疑応答 |
| 16:45       | 被爆者との懇談 (広島グランドホテル、2階菊)                                                                                                                                                                                   |
| 18:45       | 歓迎レセプション (広島グランドホテル、2階孔雀)<br>(広島市長主催)                                                                                                                                                                     |

## 8 会議プログラム

| 8月6日(火) |                                 |
|---------|---------------------------------|
| 7:45    | 平和記念式典参列 (平和記念公園)               |
| 9:10    | 市内視察                            |
| 11:30   | 昼食 (広島グランドホテル、14階山陽・瀬戸)         |
| 13:00   | 全体会議Ⅱ (広島グランドホテル、2階孔雀)          |
|         | ー核軍縮へ都市は何をなし得るかー                |
|         | 各都市の平和への取り組みについての報告 10都市        |
|         | 質疑応答                            |
|         | ーコーヒー・ブレイクー                     |
| 14:40   | パネルディスカッション                     |
|         | パネラー：明治学院大学教授 豊田 利幸             |
|         | 京都大学教授 矢野 暢                     |
|         | シドニー市長 ダグラス・W. サザーランド           |
|         | ハノーバー市長 ヘルベルト・シュマルスティーク         |
| 16:30   | 広島アピール                          |
|         | 広島市長 荒木 武                       |
| 17:00   | 記者会見 (広島グランドホテル、2階孔雀)           |
| 18:30   | 夕食(海上遊覧)「銀河」                    |
| 8月7日(水) |                                 |
|         | 〈広島から長崎へ移動〉                     |
| 9:00    | 広島グランドホテル出発(第1グループ)             |
| 9:00    | 広島全日空ホテル出発(広島グランドホテル経由)(第2グループ) |
|         | 列車利用(新幹線及び在来線特急)                |
| 14:06   | 長崎着(第1グループ)                     |
| 15:04   | 長崎着(第2グループ)                     |
| 19:00   | 歓迎レセプション (長崎グランドホテル、地下1階宴会場)    |
|         | (長崎市長主催)                        |



| 8月8日(木) |                      |                 |       |                     |
|---------|----------------------|-----------------|-------|---------------------|
| 9:00    | 歓迎あいさつ               | 長崎市長            | 本島 等  | (長崎市平和会館)           |
|         | 来賓祝辞                 | 長崎県知事           | 高田 勇  |                     |
|         |                      | 長崎市議会議長         | 中島 公彦 |                     |
| 9:20    | 全体会議Ⅲ                |                 |       | (長崎市平和会館)           |
|         | —平和構築への都市の役割—        |                 |       |                     |
|         | コーディネーター：名古屋大学学長     | 飯島 宗一           |       |                     |
|         | 各都市の平和への取り組みについての報告  | 9都市             |       |                     |
|         | —コーヒー・ブレイク—          |                 |       |                     |
|         | 各都市の平和への取り組みについての報告  | 10都市            |       |                     |
|         | 意見交換                 |                 |       |                     |
| 12:00   | 昼食                   |                 |       | (パークサイドホテル、2階天宝殿)   |
| 13:30   | 映画鑑賞“原爆の長崎”          |                 |       | (長崎市平和会館)           |
| 13:45   | 被爆体験の報告              |                 |       | (長崎市平和会館)           |
|         | 質疑応答                 |                 |       |                     |
| 14:45   | 長崎国際文化会館(原爆資料センター)見学 |                 |       |                     |
| 19:00   | 夕食                   |                 |       | (長崎グランドホテル、地下1階宴会場) |
| 8月9日(金) |                      |                 |       |                     |
| 10:30   | 平和祈念式典参列             |                 |       | (平和公園)              |
| 12:30   | 昼食                   |                 |       | (ハーバーイン長崎、2階椿・あじさい) |
| 15:00   | 長崎アピール               |                 |       | (長崎市平和会館)           |
|         | 長崎市長                 | 本島 等            |       |                     |
| 15:10   | 第3回国連軍縮特別総会への対応方針の確認 |                 |       | (長崎市平和会館)           |
|         | 広島市長                 | 荒木 武            |       |                     |
|         | 長崎市長                 | 本島 等            |       |                     |
| 15:20   | 閉会式                  |                 |       | (長崎市平和会館)           |
|         | 閉会あいさつ               | 広島市長            | 荒木 武  |                     |
|         |                      | 長崎市長            | 本島 等  |                     |
|         | 謝 辞                  | 参加都市代表          |       |                     |
|         | 閉会宣言                 | ヒロシマ・ナガサキ平和アピール |       |                     |
|         |                      | 推進委員会副委員長       | 宮川 雅一 |                     |
| 16:00   | 記者会見                 |                 |       | (長崎市平和会館)           |
| 19:00   | さよならパーティー            |                 |       | (レストラン・チサン)         |

## 同伴者プログラム

10

### 8月5日(月)

- 15:00 上田宗箇流和風堂  
講話  
献茶  
庭園散策  
16:00 みやび  
着物観賞  
着付実演

### 8月6日(火)

- 7:45 平和記念式典参列  
9:10 市内視察  
13:15 宮島  
厳島神社参拝  
ショッピング

### 8月8日(木)

- 9:30 愛野展望台  
10:40 雲仙国立公園、仁田峠  
11:30 地獄巡り  
12:00 昼食(ホテル東洋館)  
13:00 島原城、武家屋敷見学

### 8月9日(金)

- 9:05 長崎国際文化会館見学  
10:30 平和祈念式典参列  
13:30 昼食(料亭「花月」)  
日本舞踊観賞  
15:15 崇福寺(唐寺)見学  
15:45 グラバー庭園、大浦天主堂見学

## 参加者リスト（国外）

## オーストラリア

## アッシュフィールド

ルイス・ハーマン, 市長

セシル・G・ハーマン

## カンタベリー

ケビン・J・モス, 市長

## リスモア

ロバート・W・スキューリン, 市長

マーガレット・スキューリン

クレイグ・スキューリン

バイロン・C・ステューブンス, 行政長官

ヤスコ・ステューブンス

## プレストン

アラン・L・P・ホーガン, 市長

## サンシャイン

イアン・M・ミル, 市長

マリー・L・ミル

## シドニー

ダグラス・W・サザーランド, 市長

## ウォーロンゴン

ビル・モーブレイ, 助役

ロバート・グレイ, 行政長官

## オーストリア

## ザンクト・ウルリヒ

タドオイス・シュタインマイヤー, 村長

インゲボルグ・シュタインマイヤー

## ベルギー

## アントワープ

G・デコルテ, 市議会議員

## カナダ

## オタワ

マリオン・デュアー, 市長

ベラ・パンタローン, 秘書

## テラス

ジョージ・クラーク, 区議会議員

フレッド・マクドナルド, 区議会議員

## バンクーバー

マイケル・F・ハーコート, 市長

## 中 国

## 北 京

スン・フーリン, 副市長

ガン・ユー

シー・チュアン

## 成 都

フー・マオジョウ, 市長

カイ・ビン

リュ・ジャンゴウ

## 重 慶

シャオ・ヤン, 市長

ジャン・ドンファイ

ウエイ・シフェン

## 福 州

ホン・ヨンシ, 市長

ゴウ・バイイン, 国際友好協会副会長

ファン・ショウデイン

## 杭 州

ジョン・ボウシ, 市長

ワン・ジンシ

## 大 連

ウエイ・フーハイ, 市長

トン・キンリャン

シャオ・ヨンユー

## フランス

## オバーニュ

ダニエル・フォンテーヌ, 市長第1補佐

ジョゼット・フォンテーヌ

ミホ・シボ・シンマ

## ヴェルダン

ジャック・バラードュボン, 市長

ジャクリヌ・アントワヌ, 産業担当官

## ドイツ民主共和国

## ドレスデン

ゲルハルト・シル, 市長

## ベルリン

エアハルト・クラック, 市長

ゲオルク・ゾマー, アドバイザー

ベルンハルト・ケーヒャー, アドバイザー

## マグデブルク

ヴェルナー・ヘルツィッヒ, 市長

## 12 参加者リスト

### ドイツ連邦共和国

#### フランクフルト

ハンス・ユルゲン・モーク, 副市長

モーク夫人

#### ハノーバー

ヘルベルト・シュマルステーク, 市長

ウタ・シュマルステーク

カール・エルンスト・ブンゲンシュタープ,

文化体育担当

#### レムゴー

ラインハルト・ヴィルムブーセ, 市長

ウォルフガング・ファビアン, 副市長

ヘルムート・ホレンダー, 地方連盟長官

### イタリア

#### カンペジネ

ビエランジェロ・オルランディーニ, 市長

ネルソン・マルミローリ, 市議会議員

#### カッシーノ

ヴィンジェンゾ・マッティ, 市長

アントニオ・フェラーロ

ジュゼッペ・カレーロ

#### チエルノビオ

エンリコ・リローニ, 市長

ブルーノ・ゲッティ, 市議会議員

#### コモ

クラウディオ・ピアンキ, 市議会議員

ミノ・ノセダ, 市議会議員

ジナステファノー・ブッツィ, 市議会議員

#### マルザボット

ダンテ・クルイチ, 町長

#### ピストイア

ルチアーノ・パリーニ, 市長代理

#### レッジョ・エミール

ジョルダノ・ガスパリーニ, 市議会議員

#### セストサンジョバンニ

リアggi・リベラート, 市長

ロカーティ・アンブロジー

#### トリノ

ジュゼッペ・ロディ, 助役

### ヨルダン

#### アンマン

I・アーマウティ, 助役

アル・ハディード

### メキシコ

#### アカプルコ

アルフォンソ・アルグディン・アルカラス,

市長

### オランダ

#### アムステルダム

ティネケ・ヴァン・デン・クリンケンベルク,  
助役

マルティン・ディメール, 市長室副室長

#### アルンヘム

G・J・ポルデルマン, 市議会議員

#### ミデルブルフ

M・ピンケ, 助役

ファンデル・スロート

#### ロッテルダム

ヘンク・ファンデルボルス, 助役

### スペイン

#### ゲルニカ

ファン・L・Z・アロナテギ, 市長

イグナシオ・M・E・モンテペリア

### スリランカ

#### ヌワラエリア

エドムンド・S・ラジャパクセ, 市長

ブシュバ・P・ラジャパクセ

ディヴィッド・パラスリヤ, 市議会議員

### スイス

#### ジュネーブ

ロジャー・ダフロン, 助役

### シリア

#### ダマスカス

ヒシャム・シャムート, 副市長

サメール・アルダウィーディ

## クネイトラ

ハッサン・アルサッカ, 市長  
ムハマッド・ケイールファイエスエイド

## ソ 連

## キエフ

エフゲーニイ・ヤシンスキー, 副市長  
アナトーリ・グリツェンコ  
アレクセイ・ペイシ  
タカシ・ヤスイ  
カズヨシ・フジタ

## ビリニュス

カジス・V・カシオナス, 第1副議長

## ボルゴグラード

ウラジミール・イワノビッチ・アトポフ, 市長  
ニコライ・グリゴリエビッチ・シドロフ  
ニコライ・イワノビッチ・ロクティオノフ

## イギリス

## コベントリー

W・マッケナナン, 市長  
ジョン・F・ワッツ

## エジンバラ

ジョン・H・マッケイ, 市長  
ウィリアム・レイ, 報道官

## グラスゴー

ロバート・グレイ, 市長  
メアリー・グレイ

## ランベス

ロイド・レオン, 区長  
アン・レオン

## マンチェスター

ローナ・A・グラハム, 市議会議員  
アンナ・ウィルキンス

## ニューポート

シリル・サマーズ, 市長

## アメリカ

## カーメル・バイ・ザ・シー

シャーロット・タウンゼント, 市長

## ヒ ロ

ダンテ・K・カーペンター, 市長  
オラン・カーペンター

## アーバイン

ラリー・A・アグラン, 市議会議員  
フィリス・F・アグラン  
ケネス・D・アグラン  
レナ・フリードマン

## マリーナ

ロバート・T・オウエ, 市議会議員

## パロアルト

マイケル・H・シューマン, 市長代理  
ジュリアス・マーゴリス  
ドリス・マーゴリス

## フィラデルフィア

ウィリアム・M・エヴァン

## サクラメント

アン・ルーディン, 市長  
エドワード・ルーディン  
バーバラ・ウェイドナー

## サラトガ

バージニア・L・ファネリー, 市長  
ドミニク・ファネリー

## タコマパーク

サム・アボット, 市長

## ベトナム

## ホーチミン

グエン・ボー・ヤン, 副主席  
グエン・チョン・チュン  
チャン・ヴァン・タオ

## イエメン・アラブ共和国

## サヌア

エヒヤ・アリ・アルエリヤーニ, 副市長  
ファウド・アルユウタイ  
アブド・エルカリーム・アルゴビー  
ハッサン・H・アルゴバニ

## ザンビア

## ルサカ

M・C・サタ, 市長  
N・J・マバラ, 行政長官  
H・ダカ, 市議会議員

## 参加者リスト (国内)

## 日 本

## 府中市

浦 上 秀 男, 市長  
田 口 忠 司, 市長公室主事

## 府中町

山 田 機 平, 町長  
慶 徳 慶 秋, 総務部長

## 藤沢市

葉 山 峻, 市長  
三 橋 鞠 夫, 渉外担当主幹

## 八王子市

波多野 重 雄, 市長  
関 根 章 治, 秘書課長

## 枚方市

北 牧 一 雄, 市長  
畑 中 光 昭, 秘書課長補佐

## 広島県

竹 下 虎之助, 知事  
稲 田 聖 三, 秘書係長

## 板橋区

栗 原 敬 三, 区長  
木 下 茂, 総務課長

## 川崎市

伊 藤 三 郎, 市長  
秋 山 正 一, 市民局長  
長 村 秀 一, 広報部長

## 北九州市

谷 伍 平, 市長  
宮 本 清 志, 秘書課長

## 神戸市

安 好 匠, 収入役  
小 林 憲 司, 会計室主幹

## 高知市

横 山 龍 雄, 市長  
森 田 昌 雄, 市長公室長

## 甲府市

原 忠 三, 市長  
林 正 孝, 秘書係長

## 呉 市

佐々木 有, 市長

## 京都市

東 和 男, 総務局長

## 町田市

高 山 譲 二, 企画部長

## 松山市

中 村 時 雄, 市長  
井 伊 澄 夫, 秘書係長

## 三原市

土 居 山 義, 市長

## 三鷹市

坂 本 貞 雄, 市長  
井 口 三 男, 市長室長

## 長崎県

高 田 勇, 知事

## 名古屋市

河 野 昂, 総務局長  
豊 島 行 宏, 国際課主事

## 那覇市

親 泊 康 晴, 市長  
並 里 利 彦, 秘書課長

## 中野区

青 山 良 道, 区長  
熊 崎 俊 孝, 企画部長

## 練馬区

田 畑 健 介, 区長  
村 山 敏 樹, 区長秘書

## 西宮市

八 木 米 次, 市長  
田 村 光 弘, 市長室長

## 大野町

谷 口 恒 人, 町長

## 大田区

犬 野 幸 一, 区長  
鳥 羽 義 博, 総務課長

## 沖縄市

桑 江 朝 幸, 市長  
高 良 武, 総務部長

## 大阪市

土 崎 敏 夫, 行政部長  
中 村 俊 之, 総務課主査

## 高松市

脇 信 男, 市長  
高 重 一, 秘書課長  
井 竿 辰 夫, 市長公室次長

## 津島市

井 桁 克, 市長  
加 藤 一 郎, 企画管理室長

横浜市

斎田 倉 作, 総務局長

渡辺 昭 男, 庶務係長

広島市

荒 木 武, 市長

松 井 齊, 助役

池 田 正 彦, 市長室長

河 村 盛 明, (財) 広島平和文化センター理事長

長崎市

本 島 等, 市長

宮 川 雅 一, 助役

松 永 照 正, 長崎国際文化会館館長







開会式であいさつする荒木武広島市長



基調講演を行うガルシア-ロブレス氏（軍縮会議メキシコ政府特命全権大使、ノーベル平和賞受賞者）



エリザベト音楽大学のみなさんによる記念演奏（指揮は同大学学長 J・I・テホン氏）



全体会議Ⅰで原爆の社会的影響について基調報告  
を行う今堀誠二広島女子大学学長



熱心に討議する会議参加者（国外22カ国67都市、  
国内33自治体から約200人が参加）



全体会議Ⅱで平和への取り組みについて  
都市報告するボルゴグラード市長（上）、  
バンクーバー市長（右）





被爆者と懇談する会議参加者



「核軍縮へ都市は何をなし得るか、について討議するパネラー（左からシュマルスティーク・ハノーバー市長、サザランド・シドニー市長、矢野暢京大教授、豊田利幸明治学院大教授）」



広島アピールを発表する荒木武広島市長（後列は左からハノーバー市長、川崎市代表、長崎市長、永井道雄国連大学学長特別顧問、ヌワエリヤ市長、サクラメント市長）」





8月6日の平和記念式典で献花する参加者代表  
(左からハノーバー市長、永井道雄国連大学学  
長特別顧問、ボルゴグラード市長)



原爆被災の状況を聞く参加者（平和記念資料館）



日本の情緒を満喫する国外市長夫人ら参加者  
(上田宗箇流和風堂にて、左からリスモア・  
オーストラリア、一人おいてヌワラエリヤ・  
スリランカ、ランベス・イギリス、ヴェルダ  
ン・フランス)



歓迎レセプションであいさつする  
荒木武広島市長



歓迎レセプションで国外参加者から  
記念品を贈られる荒木広島市長夫妻



開会のあいさつを行う本島等長崎市長



少年少女による歓迎合唱



全体会議Ⅲ…19都市が平和への取り組みについて報告





被爆体験と平和の願いを訴える被爆者（左から被爆者の谷口氏、下平氏、下谷氏、学識経験者の秋月氏、西森氏）



NAGASAKI

全体会議Ⅳで平和構築への都市の役割について意見を発表するアムステルダム市助役ティネケ・ヴァン・デン・クリンケンベルグ氏



8月9日の平和祈念式典で献花する参加者代表（左から飯島名古屋大学学長、福州市長、ミデルブルフ市助役）



長崎アピールを発表するマリオン・デュワー・オタワ市長





記者会見



原爆被災資料を見学する参加者（長崎国際文化会館）



日本庭園を散策する国外市長夫人一行（花月庭園にて）



# 開 会 式

25

8月5日（午前10時～10時20分）  
広島市公会堂

1. 司会..... 27  
広島市市長室長      池田 正彦
2. 開会宣言..... 27  
ヒロシマ・ナガサキ平和アピール推進委員会委員長  
広島市助役          松井 齊
3. 開会のあいさつ..... 27  
広島市長              荒木 武
4. 来賓祝辞  
国連事務次長      ヤン・モーテンソン..... 29  
広島県知事          竹下虎之助..... 30  
広島市議会議長      明星 正明..... 31
5. メッセージ・祝電紹介..... 32  
広島市市長室長      池田 正彦



司会（池田広島市市長室長）

私は、開会式の進行を務めさせていただく  
広島市市長室長の池田でございます。

それでは第1回世界平和連帯都市市長会議  
の開会にあたり、開会宣言をヒロシマ・ナガ  
サキ平和アピール推進委員会委員長でもあり  
ます広島市助役松井齊が行います。

## 開会宣言

ヒロシマ・ナガサキ平和アピール  
推進委員会委員長  
広島市助役 松 井 齊

ここに第1回世界平和連帯都市市長会議の  
開会を宣言いたします。

## 開会あいさつ

広島市長 荒 木 武

本日は、第1回世界平和連帯都市市長会議  
の開催にあたりまして、ヤン・モーテンソン  
国連事務次長、アルフォンソ・ガルシア-ロ  
ブレス メキシコ軍縮大使、スジャトモコ国  
連大学学長をお迎えし、国の内外から多数の  
都市の参加を得て、かくも盛大に開催できま  
したことを誠に光榮に存じますとともに、心  
から歓迎申し上げる次第であります。

「安らかに眠って下さい過ちは繰返しませ  
ぬから」という碑文が先ほど参拝・献花され  
た平和都市記念碑に刻まれております。

この言葉は、この碑の前に立つ一人ひとりが  
原爆犠牲者の冥福を祈るとともに、過去の  
憎しみを乗り越え、悲しみや苦しみに耐えて、  
全人類の共存と繁栄を願う真の人道主義に立  
脚した“ヒロシマの心”そのものであります。

広島市は、今から40年前、1945年8月6日  
午前8時15分、世界最初の原子爆弾の投下に  
よって一瞬にして壊滅しました。35万人に及  
ぶ市民が被爆し、即死者およびその後4カ月  
間に死亡した者は、実に14万人以上に達しま  
した。私も爆心から4キロメートルの工場で  
被爆いたしました。当時の被爆の惨状は、  
今も私の脳裏に深く焼きつき、痛恨の情を禁  
じ得ないのであります。

今日、かろうじて生き残った被爆者は、ケ  
ロイドや白血病、悪性腫瘍などの後障害に  
よって、身体的に、精神的に、また社会的に  
も、今も悩まされ続けているのであります。  
たった一発の原子爆弾がもたらした被害の全  
体像の実態解明は、今もなお続けられており  
ます。

核兵器がもたらす被害の特質は、熱線、爆  
風、放射線の複合作用によって通常の兵器で  
は想像できない大規模な破壊を、瞬間的に、  
しかも広範囲に引き起し、戦闘員と非戦闘員  
の区別なく、無差別に殺りくするものであり  
ます。なканずく、放射線は、死の灰や残留  
放射能として後のちまで残り、かろうじて生  
き残った者をやがて死に至らしめるという恐  
るべき殺傷力をもっております。

1981年12月、現スウェーデン首相オロフ・  
パルメ閣下が主宰された、「軍縮と安全保障  
問題に関する独立委員会」のワークショップ  
が広島において開催されました。その時、オ  
ロフ・パルメ閣下は、平和記念資料館を訪れ、  
そこに展示されている被爆した石段を見て、  
「石段に焼きついた人影を見た。石段に誰か  
が腰をかけていたはずであるが、摂氏5千度  
の熱線によって、その人物は自らの灰をも残  
すことなく消え去ったのである。気違いじみ  
た軍拡競争が続くならば、全人類の運命はこ  
の石段に焼きついた人影と同じように消滅し  
てしまうであろう」と述べておられます。

現在開発されている核兵器と比較すれば、  
広島に投下された原子爆弾の威力は極めて小  
さなものでした。しかし、被害はじん大で、

その恐るべき破壊力と残虐性は何ら変わるものではありません。

今日、ひとたび核戦争が起きたならば、全人類が破滅することは明らかであります。

今こそ、われわれは、世界恒久平和の理想を高く掲げ、英知を結集して対決から対話へ、不信から友好へ、歴史の流れを変えなければなりません。われわれ広島市民は、ヒロシマの過去の被爆体験からどのような理由があろうとも、この非人道的な核兵器を使用させてはならないと固く決意しており、今日まで一貫して核兵器の廃絶を全世界に訴え続けております。

また、広島市は、恒久の平和を誠実に実現しようとする理想の象徴として“国際平和文化都市”の建設をめざし、市と市民が一体となって努力を続けております。核兵器の残虐さを全世界に伝え、次の世代に被爆の実相を正しく継承するとともに、平和都市として広島を再建し、世界恒久平和に貢献することこそ、ヒロシマに課せられた使命であると考えております。

そのため、私は、市長に就任して以来、これまで4回国連本部を訪問し、原爆写真展の開催、国連事務総長との会談、国連軍縮特別総会への出席などを通して、被爆の実相と核兵器廃絶を訴えてきました。

とくに1982年6月24日の第2回国連軍縮特別総会では、国連NGOの一員として発言する機会を与えられ、被爆体験を述べながら、核実験の即時全面停止、核兵器の凍結と廃棄を訴え、さらに核兵器保有国の首脳や世界各国の指導的立場にある人、次代を担う青少年らの広島訪問を求め、広島での首脳会議の開催、国際的な平和研究機関の設置を提唱するとともに、世界の都市が国境を越えて連帯し共に核兵器廃絶への道を切り開くよう呼び掛けました。

今日、世界中に蓄積されている核弾頭は、広島型原爆の100万発分に相当する5万発にのぼるといわれており、地球上のありとあらゆるものを幾度となく殺りくし、破壊しつく

すに足りるものであります。私は、力の均衡に支えられた世界の平和は決して永続するものではないと思います。また、長い間中断されていた米ソ両国の核軍縮交渉がさる3月ようやく再開されたものの、われわれが期待する成果はあげられておりません。こうした状況の中で来る11月にジュネーブで開催される米ソ首脳会談では、ヒロシマの悲願である核兵器廃絶に向けて光明が見出されることを期待するものであります。

しかしながら、軍備の縮小、とりわけ核兵器の廃絶、世界恒久平和を確立するための努力は、国家だけに任せ、期待するものではないと思います。戦争によって、とりわけ核戦争によって、より多くの被害を被り、犠牲を強いられるのは、都市であり、そこに住む市民であることを思いますとき、都市行政の中においてはもちろんのこと、市民の一人ひとりにいたるまで、それぞれが平和への役割を分担し、努力を重ねることは当然のことと考えるものであります。

このような考えのもとに、都市と都市が国境を越え、人種の区別なく連帯し、共に人類共存への道を切り開くため、私は、昭和58年1月以来、長崎市長との連名によって、世界の各都市に“核兵器廃絶に向けての都市連帯推進”の呼び掛けを行っております。世界平和都市連帯の呼び掛けは、現在、58カ国237都市にまで広がり、すでに33カ国111都市から賛同の返書を得ております。このたびの“第1回世界平和連帯都市市長会議”もこの事業の一環として開催したものであります。

私は、被爆体験をふまえた、“ヒロシマの心”をより広く世界の都市に普及させるために、さらに多くの都市と連帯の輪を広げるよう、今後一層努力する所存であります。生き残った被爆者の一人として核兵器の廃絶と恒久平和の実現のために、粘り強く努力していかねばならないと決意しております。

1981年2月、広島を訪問されたローマ法王ヨハネ・パウロⅡ世は、ここ平和記念公園で「戦争は人間のしわざです。戦争は人間の生

命を奪います。戦争は死そのものです。過去を振り返ることは、将来に対する責任を担うことです。広島を考えることは、核戦争を拒否することです」とアピールを寄せられました。

ヒロシマは、単なる歴史の証人ではありません。

ヒロシマは、人類の未来への限りない継承であります。

「燈々無尽」

ヒロシマの灯火は、一人から二人、三人へと絶やすことなく受け継がれなければなりません。

被爆40周年を迎えた被爆地広島を訪れていたいただいた各市長さんをはじめ皆さんに、改めて心から感謝を申し上げるとともに、核兵器による被害の実情に深いご理解をいただき、それぞれお国の市民の方々に広く伝えていただくようお願い申し上げまして、開会のごあいさつといたします。

最後になりましたが、本年は被爆40周年であると同時に第二次世界大戦の終戦40周年でもあります。私たちはかつて不幸にも敵味方に分かれて戦い、相互に尊い生命を失っております。大戦の犠牲となった多くの方々のご冥福を祈り、再び戦争の過ちを繰り返すことなく、恒久平和確立の誓いを新たにすため、皆さんとともに黙祷を捧げたいと思います。

— 黙 祷 —

## 来賓祝辞

国連事務次長

ヤン・モートンソン

ご参会の皆さん、このたび広島・長崎両市の原爆被爆40周年を記念して開催される第1回世界平和連帯都市市長会議の開会式にお招きいただきまして、誠に光栄に存じますとともに、喜びといたすところであります。

広島・長崎両市民の、受難と、あの惨劇が再び起ることを許さないという被爆者の厳粛な誓いは、核時代における至上の目的である平和に向けての新たな決意の原点でなければなりません。

核時代が始まって以来、核戦争防止に関する問題は、一貫して国連と国際社会の最優先課題となっております。国連事務総長も最近述べられたように、核戦争を防止するためには、われわれの努力が不可欠であります。

事実、国連憲章の前文には、国連の主要な存在理由として、後世代を戦災から救うということがあげられています。また、憲章そのものの中にも、世界平和と安全の確立を維持し、人的、経済的な資源を極力、軍備に投じさせないと記されております。この国連憲章に記されている二つの考え方は、兵器の蓄積、とりわけ核兵器の蓄積は人類の将来にとって、安全保障というよりはますます脅威として察知されている今日、ますます重要性をおびてきています。

国連が創設されて以来40年たった今日、世界の軍事費は、年間8,000億ドル以上と推定されておりますが、このことは毎分およそ200万ドルの軍事費が使われていることになり、一方では約4万人の子供が、毎日、飢餓と病気で死んでいるのです。

今日、核蓄積量は第二次世界大戦全期間中に使用された破壊能力の何倍もの破壊力を持っており、事実、人類史上における全通常戦争の破壊力をしのぐ程までに増加しているのです。私たち全員は、原爆資料館において今日では小型とされている核爆弾の投下により、都市に与えられ得る荒廃を目の当たりにしました。今、地球上には広島型原爆の100万個に相当する5万個の核爆弾があります。しかし、近代戦争の規模がこんなに驚くべき大きなものにもかかわらず、第二次世界大戦の終結後、150以上の紛争が起こり、約2,000万人が殺されたということを忘れてはなりません。

このような背景において、軍縮分野におけ

る国連の役割は、より重要になっております。国連憲章の規定を十分に守ることにより、全ての国の安全保障を高めることにつながるのです。いかにしても、軍備競争を停止させて方向を変えなくてはなりません。軍備の水準を徐々に、相互に均衡を保ちながら、公正で検証可能な方法で徐々に削減してゆかねばならないのです。

国連といたしましては、軍縮に関する全ての根本的な問題を討論するための場を提供しており、それぞれの問題の複雑な相互関係において討論を進めることができるように考えているわけではありますが、それは、数年来、国際安全保障、開発、軍縮が相互に関連し合っているという認識が高まっているからであります。一つの分野で何かを達成しようとしても、他の分野での前進がなければ、長期的には達成できないのです。この安全、軍備、開発という三つの関係、これこそが創立40周年を迎える国連が対処してゆかねばならない一番大きな課題となっております。

今日の世界情勢について語る時、私たちは前途が暗い見通しであるからといって絶望すべきではありません。最低限、三つの希望を持たせる要因があります。

一つは、人類には理性があるということです。世界中の政治家、政策決定者は、勝者ではなく敗者のみ残されるという核戦争勃発に際しての結果を十分に認識しています。

さらに、経済的要因であります。私は、いかなる国家も国家集団も長期にわたって同時に、インフレ、失業、不況、社会改革、経済開発、開発援助などを全部満たすような対処はできないし、しかも同時に、軍備競争に注がれる費用負担には耐えられないと確信しています。

そして、このことから私は、さらに第三の要因を考えます。それは、世界中の全ての国家において、建設的・現実的事情によく通じている世論がその役割を増しているということです。1982年に開催された第2回国連軍縮特別総会において、全会一致で採択された世

界軍縮キャンペーンの目的は、軍縮部門における国連の目的を周知させ、教育し、一般大衆の理解と支持を引き起こすということでありました。これには、ガルシア・ロブレス大使が大きな役割を果たされました。世界軍縮キャンペーンは、全ての大衆に対する運動ですが、それを主要に構成するものは、世界中の議員、非政府組織（NGO）、マスコミ、研究所、学術機関であります。このキャンペーンは、周知させるのみならず、学ぶ手段として、またあらゆる思想的、政治的、国家的に違いを乗り越えた構成でもって实际的、客観的に均衡のとれた方法で世界的に展開されることが原則でありました。

皆さん、今日のこの第1回世界平和連帯都市市長会議は、これこそわれわれにとって軍縮の問題がいかに重要であるかということを皆さんが認識しておられることの証左であり、またこの問題がいかに緊急であるか、そしてこのような継続的な努力の中における第1歩、小さな第1歩がいかに重要であるかということの証左でもあります。

私は、この場をお借りして、皆さん方の努力が全て成功するよう願っていることをお伝えするとともに、とりわけ、第1回世界平和連帯都市市長会議の開催を提案された広島・長崎両市長に対して感謝するとともに、高く評価していることを表明したいと存じます。

## 来賓祝辞

広島県知事 竹下虎之助

第1回世界平和連帯都市市長会議の開会に当たり、一言お祝いを申し上げます。

この度は、皆様方、世界の諸都市から遠路はるばるこの広島の地に、ようこそご参集くださいました。

地元広島県の知事として心から歓迎申し上げ

げますとともに、皆様方が日夜世界の恒久平和の実現を目指して真しに御努力されておられますことに深く敬意を表するものでございます。

ここ広島市は、40年前の8月6日、当時人口33万人余を擁する国内の主要都市として繁栄いたしておりましたが、原子爆弾の投下により、一瞬のうちに廃虚と化し、十数万人の方々が死亡するという人類史上に類例をみない誠に不幸な体験をいたしました。

被爆後、草木も育たぬ不毛の地といわれた広島は、御覧いただきますように、市民の不屈の意志とたゆまぬ努力により不死鳥のように近代都市としてよみがえり、今や、わが国における中枢都市の一つとして発展を遂げ、更に、世界に開かれた国際平和文化都市として新たな飛躍を目指しております。

こうした今日の繁栄は、40年前の数多くの貴い犠牲のうえに築かれているものであることを私たち広島県民は、片時も忘れることができません。

また、広島市のみならず、人類の今後の繁栄のためには、世界の恒久平和の実現が不可欠のものであります。

しかしながら、今日の世界情勢は、宇宙空間までを含む、し烈な核軍備拡大競争が展開されるなど極めて厳しい状況にあります。

ひとたび、核戦争が勃発した場合、そこには勝者も敗者もない悲惨な人類滅亡の道以外にないことは、疑いの余地のないところであります。

このようなとき、広島・長崎両市長の呼び掛けにより世界23カ国約100都市の市長が一堂に会して世界平和実現のため真剣な討議を重ね、強い連帯へのきずなで結ばれますことは、まことに、意義深いものであり、その成果に大きな期待を抱くものでございます。

この会議の開催に一方ならぬ力を尽くされました広島・長崎両市長に対しまして、ここにあらためて敬意を表しますとともに、この会議が実り多いものとなりますようお祈りいたしまして、私のお祝いの言葉といたします。

## 来賓祝辞

広島市議会議長 明星正明

第1回世界平和連帯都市市長会議が開かれるにあたり、広島市議会を代表して、一言お祝いを申し上げます。

本日、ここにご出席の日本をはじめ世界各国の自治体の代表者の皆様方におかれましては、ようこそ広島市へお越しいただきました、心から歓迎申し上げる次第であります。

さて、世界の情勢に目を転じますと、ご承知のとおり、核保有国による軍備拡大が急速なテンポで進められ、真の恒久平和を希求する世界人類にとって極めて憂慮に耐えないものがあります。こうした状況のもとで、広島市民は、今日まで全世界に向けて、核兵器廃絶と全面軍縮を強く訴え続けてまいりました。

また、被爆40周年を迎えるにあたり、広島市議会におきましても、市民の意をうけて、「核兵器廃絶広島平和都市宣言」を全会一致で決議し、改めて核兵器廃絶の緊急性を世界に強く訴えるとともに、さらに一層、平和都市建設に向けて努力する所存でございます。

かかるとき、世界最初の原爆被災地である広島・長崎両市において、核廃絶を目指す世界各国の都市の代表の方が参集され、国際世論を喚起するため、この会議を開催されることは、世界平和都市連帯の輪を広げるうえで、誠に意義深いものであり、実り多い成果をご期待申し上げます。

どうか、皆様方におかれましては、当会議を一つの契機として、原爆被爆都市広島・長崎の実相を把握されますとともに、世界人類の平和のために多大な貢献をされますようお願いいたします次第であります。

終わりに、ご参会の皆様方の今後一層のご活躍とご健勝を心から祈念申し上げまして、私のお祝いのことばといたします。



## メッセージ・祝電紹介

司会（池田広島市市長室長）

この会議に多くのメッセージ、祝電が寄せられておりますが、時間の都合でそれぞれ1つずつ紹介させていただきます。

メッセージは、インドのニューデリーで行われたデリー宣言調印6カ国の首相から寄せられたもので、後ほど基調講演をいただくアルフォンソ・ガルシアーロプレス閣下に託されたものです。

### デリー宣言調印6カ国の 首相からのメッセージ

1985年8月5日

40年前のヒロシマの死と苦しみは、核兵器競争が最後まで走ってしまった場合、われわれに起こることを予測させるものです。

今日、われわれ全ての者は、ある意味では、広島市民であり、被爆の惨禍の犠牲になるという恐怖を分かちあっているのです。全ての人々、全ての国家には、核の脅威に終止符を打つ権利と義務があります。

1985年1月のデリー宣言の中で、核実験および核兵器の生産、展開、配備の全面的停止、ひいては、より強力な国連のもとでの軍縮、核兵器廃絶を求めました。

これらの目的を達成すべく二重、三重に努力を積みかさねることがヒロシマの犠牲者に報いる最もよい方法です。

|        |               |
|--------|---------------|
| アルゼンチン | ラウル・アルフォンシン   |
| インド    | ラジブ・ガンジー      |
| メキシコ   | ミゲル・デラマドリ     |
| タンザニア  | ジュリアス・ニエレレ    |
| スウェーデン | オロフ・パルメ       |
| ギリシャ   | アンドレアス・パパンドレウ |

このほか、ドイツ民主共和国のホーネッカー議長、ロサンゼルス市のトム・ブラッドレー市長、ワシントン市のマリオン・バリー

市長、ドイツ連邦共和国ハンブルク市のクラウス・フォン・ドラニッシャー市長、イタリアのカララ市アレクサンドロ・コスタ市長等々からメッセージを頂いております。

次に祝電を1つ紹介いたします。

“この会議が核兵器廃絶と真の世界平和確立のための第1歩となることをお祈りします”

国際軍縮促進議員連盟会長 三木 武夫

このほか各方面から多くの祝電を頂いておりますことをご報告申し上げます。

8 月 5 日 (午前10時35分～11時35分)

広島市公会堂

司会 広島市市長室長

池 田 正 彦

1. 生存か、核兵器か、この避けられない選択…………… 35

軍縮会議メキシコ政府特命全権大使

アルフォンソ・ガルシア-ロブレス

2. 核時代の都市の在り方…………… 39

国連大学学長

スジャトモコ



## 基調講演・講演者紹介

司会（池田広島市市長室長）

アルフォンソ・ガルシアーロブレス軍縮会議メキシコ政府特命全権大使のご経歴について簡単にご紹介申し上げます。

同氏は、昭和14年（1939年）、メキシコ外務省にお入りになり、スウェーデン、ブラジル、国連の各大使などを経て、1975年から1976年まで外務大臣を歴任されました。

平和外交に徹し、世界最初の非核地域化をめざしたラテン・アメリカ核兵器禁止条約（トラテロコ条約）の成立に多大の貢献をされたことはご承知のことと思います。

現在も、軍縮会議メキシコ政府特命全権大使としてご活躍中であり、昭和57年（1982年）には、長年にわたる国連での軍縮推進活動の功績により、ノーベル平和賞を受賞しております。

## 基調講演

### 生存か、核兵器か、 この避けられない選択

軍縮会議メキシコ政府特命全権大使  
アルフォンソ・ガルシアーロブレス

「40年前、原子爆弾が広島および長崎に投下された時、人類は、自分たちの手で滅ぼされてしまう可能性があることに気付き、恐怖が人々につきまとい始めました。過去40年間、ほとんど気のつかぬ間に、あらゆる国家、民族は生存と死に対する究極的なコントロールを失ってしまいました。われわれにとって、われわれの運命を決定できるのは遠く離れた都市のそれも、ほんのひとにぎりの人と機械なのです……。」

以上は1985年1月28日ニューデリーにおいて、アルゼンチン、ギリシャ、インド、スウェーデン、タンザニア、メキシコの政府首脳が署名した合同宣言の冒頭部分です。これは広島市長、荒木武氏が1982年の平和宣言で次のように述べたその理由を説明しています：「広島は単に歴史の証人というだけではありません。広島は人類の将来に対する終わることのない警告そのもののなのです。広島が忘れ去られてしまえば、悪が再び繰り返され人類の歴史が終結してしまうであろうことは明らかです。」6年前に出版され、「身体、医学及び社会に与える原爆の影響」について徹底的に分析し権威ある情報書として一般に広く知られている書物「広島・長崎の原爆災害」の共同序文の中で、広島・長崎両市長は次のことを強調しています。「広島および長崎市民は、人類の不可欠の団結を信じて、“ノーモア広島、ノーモア長崎”の一言を携えて、悲しみと憎しみの中から立ち上がりました。そして人類が二度とこの惨禍を繰り返さぬために、地球上から核兵器の廃絶を要求し続けているのです。」

大量破壊をもたらすこの恐ろしい道具の廃絶を求めるアピールは、二人の市長によって両市の原爆記念日に出される平和宣言の中で毎年繰り返えされてきました。そのアピールは、核軍縮に関する国連方針が述べている事柄を忠実に反映しており、その最も重要な要素は1978年開催の軍縮総会の最初の特別セッションの最終文書の中に見ることが出来ます。その際、世界的共同体の最高の代表機関である総会では以下の展開を見ました：

—「核兵器の存在と終わることなき軍備競争が引き起こす人類の生存そのものに対する脅威」であるとの警告の表明。

—「かつて製造されたことのない最も破壊力の高い兵器の大量かつ競争的な蓄積によって起こる前例のない自滅の危機に今日人類は直面しており、現存の核兵器の集積だけでも地球上の全生命を破壊してなお余りある」という事実に対する注意の喚起。

—「兵器、とりわけ核兵器の増強は国際安全の強化に貢献し得ず、脅威を与えるのみである」ことの強調。

—「恒久的国際平和および安全は軍事同盟国の兵器の蓄積の上に確立されるものでもなければ、不安定な抑止力のバランス、または戦略的優位性によって維持され得るものでもない。」ことの強調。

—「全世界の民族が軍縮交渉の成功に最大の関心を払っている。」ことの宣言。

—「全ての国の努力の最終目的は依然として効力のある国際的管理下における全般的かつ完全な軍縮であるが、当面の目標は核戦争の危険の排除である。」ことの強調。

—「核兵器は人類および文明の存続に対し最悪の危機を引き起こし、そのため、核兵器を含む戦争の危険を回避するためにあらゆる局面において核軍備競争を終結させることが不可欠である。そして究極の目標は核兵器の完全排除である。」ことの強調。

このように定義した核軍縮に関する国連方針は、この分野における総会の30年におよぶ実践の一体体系の、といってさしつかえないでしょう—最高点と理解すべきでしょう。国連憲章は「核時代以前の憲章」であり、この点でそれは実際に効力を発する以前にすでに時代遅れとなってしまいました。しかしながらサンフランシスコ会議の数日後に投下され、広島、長崎を破壊してしまった原子爆弾は、新兵器の持つ恐ろしい脅威に対して世界の全民族の目を開かせることになりました。その瞬間から、また1952年に核融合、および水爆実験が成功して以来、軍縮問題は人類の最も深刻な関心事となりました。それ故、核兵器に関する国連の立場が、広島へ原爆が投下された5ヵ月半後の1946年1月24日に採択された総会の最初の決議に明確に定義されているのも当然と言えます。満場一致で承認されたこの決議により、「この問題に関して最も迅速な措置を講じ、全側面について調査すること」および「国の武装から原子兵器を排除するための具体案」を遂行することを目的

とした国際委員会が設立されました。

それ以来、国連の会議では核軍縮を中心とした数百にもおよぶ決議を採択して参りました。その口調は徐々に強さを増し、先に述べた通り第1回特別会議における確定宣言において、最高潮に達しました。1945年の原子爆弾の威力がダイナマイトのキロトンの単位で表されるに比して、1952年以降の水爆、原爆についてはその破壊力を表すためにメガトン、すなわち100万トンの単位が必要になりました。

核兵器製造に対して大きな責任をになうことになった悲劇的名誉を持つアルバート・アインシュタインがバートランド・ラッセルと共に1955年7月9日ロンドンにおいて歴史的な宣言を行ったのは上記の理由によるにちがいありません：

「ここでわれわれはある特定の国、大陸、民族の一員としてではなく、その存続が危ぶまれている人類の一員としてお話しするものです。われわれは新たな方法で思考することを学ばねばなりません。多くの水爆が使用された場合、即死は少数でもその他の大多数も徐々に病氣や死の苦しみに襲われてゆきます。」

2～3年後に著名な哲学者アーノルド・トインビーが先に述べた宣言を正当化する次の声明を行っています：

「過去新兵器が発明される度に、人々はあまりに恐ろしいものであり、使用されるはずがない、と言ってきました。それにもかかわらず、新兵器は使用され、それでも人類の滅亡には至りませんでした。しかし今や人間は地球上から生命を本当に消し去ってしまうことのできるものを保有しているのです。実際、人類の生存に対する脅威は歴史の最初の100万年の間においてより、1945以来の方がはるかに大きくなっています。」

数字で説明しますと、広島型原爆の破壊力は13キロトンで、これはダイナマイト13,000トンに相当します。現在2つの「核超大国」の武器庫には20メガトン級の原爆が多数含ま

れ、ざっとダイナマイト2,000万トンに相当するのです。

現存の核弾頭の合計は、信頼できる数字によれば約50,000個で、広島型原爆100万個分よりさらに大きな破壊力を持っています。つまり、地球上の住民一人ひとりの頭上に4トン分のダイナマイトがあるわけです。

昔から知られている核兵器の効果には2種類あり、ひとつは、非常に強力な爆風、強烈な熱線、そして初期放射能により生ずる即時的影響であり、もうひとつは、数十年にもおよぶ放射性物質の降下により後日現れる影響です。広島に原爆が投下された結果、20万人もの死者が出たことを考えれば、現存の核兵器は2,400億もの人々を死滅させるに充分であると結論を出してさしつかえないでしょう。言いかえれば、地球上の全人口の60倍の数字の人々を抹殺してしまうのです。

それに加えて、過去3年間にわたり数ヵ国で行われた数多くの科学研究では、核戦争は、限定された規模で行われたとしても、いわゆる「核の冬」を到来させる多量の煙、スス、ほこりを生ずる、ということを示す十分な事実を提供しています。これは核爆発から遠く離れた国をも含め、多くの国々に前例のない危険を引き起こし、かつて知られている核戦争の危険を測り知れない位増長することでしょう。

この分野における権威ある年刊誌「世界の軍備と社会支出」の1981年版に、核戦争とはいかなるものであるか記載されていました。私は今この部分を読み返してみたい気がします。というのも、すでに5年前のことではありますが入手できる科学情報、および世界中が目撃した2個の原爆から得た結論に、一致しているからなのです。それは次の言葉に表されていました。：

「今日、非常に多くの兵器が存在するので、隔離された都市攻撃を見るだけでは核戦争の影響を把握することはできません。兵器の数は世界の全都市数より多いのです。ひとたび爆発すると爆弾の影響は倍増します。何千も

の爆発が地球とその住民を破壊してしまうでしょう。」

核爆発の身体への即時的影響はすさまじい爆風と炎です。都市および軍事施設が攻撃されれば、ハリケーンの威力を持つ風が生じ、大陸全体を大火の嵐が吹き荒れるでしょう。核爆発は自身の放射能を放散するのみならず、原子炉内の放射能、および攻撃を受けている核兵器の放射能をも放散させることになります。即時に焼け死ななかった人々にしても、吹きとばされたり、シェルターの中で窒息して、死にかけている人、死んでしまった人、気が狂ってしまった人ばかりという悪夢のような世界に自分たちがいることに気づくでしょう。食料も穀物も土地も放射能に汚染されてしまい、水も飲めません。医療施設、通信線、輸送網は破壊しつくされます。

ひん死の地球の静寂の中で放射能は海洋上を通過し、大気圏へ入り、オゾン層を枯渇させ、有害な紫外線を放射します。これらの放射線は生存している動物を死滅させてしまうため、生態系が破壊され、あとには地球規模の不毛の土地が残るだけとなります。

ただ今述べました内容のことが、核戦争が始まった場合に起こるであろうことを正確に反映していると保証することはできない、とお思いの方もいるかも知れません。このような種類の予想というものは、その出典がいかに権威があるにしろ、ある程度の推量は必然的に含まれているものなのです。それにしても、カーター前大統領が1981年1月14日告別の辞の中で彼の同胞に語った言葉を常に銘記しておくべきだと思います。それは：

「しばらくして目が暗闇になれるようにわれわれの心もそれになれてしまいました。それでも核戦争の突発の危険性が小さくなったわけではありません。まだ起こってはいませんが、かといって安心感を与えてはくれません—なぜならば、それは1回起こりさえすればそれで十分なのですから。」

ジョナサン・シュルが1982年に出版した傑出した著書「地球の運命」の中で、彼は次の

言葉で本質的に同様のことを述べています。:

「換言すれば、大破壊が全滅につながるということがわかれば、われわれは賭を行う権利はありません。なぜならば負ければそれでゲームは終わり、われわれも、他の何人も次のチャンスを得ることはないのですから。」

今回が広島への初めての訪問ではありません。3年半前の1981年12月、私は軍縮および安全問題独立委員会の会員といっしょに1日当地で過ごすことができました。その機会に私が得た多くの思い出の中から3つのことを述べましょう: 1つ目は広島平和記念公園、とりわけ原爆ドーム、記念碑、そして館長が展示物について最も重要な事柄を取り上げ、そのいくつかに関連する情報を与えてくれた平和記念館・資料館、2つ目は、「1945年の原爆による運命の地獄を生まれ変わらせる」ために多くの生存者の描いた「忘れ得ぬ大火」と題され出版された絵画集、3つ目は、当日午後開催された非公式セミナー、そこで私は核兵器を有する国の指導者は広島を訪れ、広島が伝えようとしているメッセージを理解しようとするのが必須であると提案いたしました。

委員会委員長であり、皆様よくご存じのオロフ・パルメ氏が私の提案に支持を表明して下さった後、同じ会議の席上で次の言葉を述べられました。

「私はメッセージをもっと広めたいと思います。これらの恐ろしい事柄に取り組んでいる研究所の全ての職員を当地へ連れて来たいと思います。「シンクタンク」の、戦略司令部の、あたかもあらゆる状況が予言可能なチェス盤の上で行われるような、初期攻撃、迎撃、反撃といったいわゆるシナリオでゲームを行っている研究所の全ての男性・女性をここへ連れてくることができれば、と思います。彼らがひとたび当地に来ればそのようなバカげたゲームは止めてしまうに違いありません。そして核戦争において「勝利があり得る」と言う全ての人々にここを訪れ、自分の目で確かめてもらいたいのです。きっと再び

そのような言葉を発することはできないはずです。」

同様の考え方に沿う評価を国連総長、ジャビエール・ペレ・デ・クエアル氏も行っています。彼は1984年12月12日の総会における演説の中で、この機会に思い起こすに極めて妥当と思われる以下の声明を行っています。:

「核戦争は限定戦争のままで終わることなく、誰かが勝利を収めることもありません。その影響は敵に限られず、地球上の全ての民族の存在を脅かすものであり、人類の滅亡へとつながるのです。至高の仲裁者の如く、現在のわれわれの闘争により、われわれは将来を絶ち未だ生まれていない何百万という罪のない生命を消し去るという脅威を与えているのです。これ以上の傲慢はありません。」

本日ここで私の論じる全てのことおよび演説時間を守らなくてよい状況ならば、容易に付け加えることが出来たその他の事実、数字、および権威ある見解は、都市連帯を通して広島・長崎の後援の下に両地で開催された第1回世界平和連帯都市市長会議がいかに機を得たものか、また参加された市長の方々が「地球上から核兵器の廃絶を求める」ように強く促されたかを証明しております。大量破壊をもたらす恐ろしい道具の排除を通してのみ、人類自滅の危険を排除することが可能なのです。もし予言不可能な結果を伴う、核兵器の増強が、ほとんどの場合技術的プロセスの単なる勢いの盲目的結果であるならば、それは必然的に人間と技術の失敗によるものですが、世界的不安定を増長することによって、国家の安全を獲得することができるかと主張することはバカげています。これまで蓄積されてきた核兵器が、一回にとどまらず何回にもわたり地球上における瞬時の、または徐々の死や破壊、そして苦痛な崩壊をもたらしてなお余りあるものならば、また核兵器がいかなる軍事目的も持たず、たったひとりの狂人がそれを使用し、世界規模の自殺を行おうと考えるならば、核軍縮の第一ステップとして核軍備競争を中止させるために、最優



先の対策を直ちに実施するに必要な措置を講ずることが非常に重大であるという結論に到達しなければなりません。

1978年の軍縮を話し合う総会の第1回特別会議において満場一致で承認され、また「軍縮の目標達成の任を有する」1982年開催の同様の第2回特別会議で「満場一致かつ無条件に再確認された」最終文書の第48節の中で合意されましたように、「核保有国は特別な責任を負っている」のですから、現在ジュネーブで2ヵ国間交渉を行っている核兵器を保有する二大超大国に対し、1985年8月、米国防務長官およびソビエト外務大臣の間の最高レベルで承認された共同声明に厳に従うことを本会議が要求するのは極めて妥当です。その共同声明の中では次のことを明確に述べています：

「交渉の主題は戦略、中距離の宇宙および核軍備に関する一連の問題についてであり、これら全ての問題は相互関係を念頭に考慮、解決されることに両国は同意する。交渉の目的は、宇宙における軍備競争を防止し、地球上での軍備競争を終結させるための、核軍備の限定かつ削減、戦略的安定の増強による効果的同意項目を作成する。両国は軍備を限定かつ削減するための一般的努力としての将来の交渉が究極的にあらゆる場所からの核軍備の完全廃絶に結びつくことを信ずる。」

交渉中の二大大国はまたこれはよく知られている格言、「最後に述べるが決して軽んずべきではない。」を思い起こさせるまさにその典型ではありますが、両国の国益のみならず世界中の全ての民族の極めて重要な利益がこの問題にかかっていることを常に心しておくよう、国連総会により、繰り返し要請されるべきであります。

## 講演者紹介

司会（池田広島市長室長）

スジャトモコ国連大学学長のご経歴を簡単にご紹介申し上げます。

同氏は、若くしてインドネシアのジャーナリズム界各紙の編集長に就任され、ご活躍になりました。

政界においては、昭和31年から34年まで（1956年～1959年）インドネシア国会議員、昭和43年から46年まで（1968年～1971年）駐米大使、さらに外務大臣のアドバイザーとして国政に寄与されております。

昭和55年（1980年）に国連大学学長に就任され、全世界にわたる協力、研究機関あるいは学者のネットワークを通して、研究・研修知識の普及などの活動を推進しておられます。

## 基調講演

### — 核時代の都市の在り方 —

国連大学学長 スジャトモコ

第二次世界大戦の終了、国連創設を始めとする1985年を迎えた多くの40周年記念の中で、8月6日と8月9日ほど重要なものではありません。広島と長崎の市民は、核時代の門番です。彼らは、かつて二度開かれたその門が今後永遠に固く閉ざされたままであるように、身を捧げて来ました。

この両都市の市民が、過去の苦い記憶を葬り去り、辛苦の末に獲得した豊かさと、例えば素晴らしい野球チーム広島カープの勝利のような市民生活の素朴な喜びに酔いしれたいと願ったとしても、誰も非難する者はありません。

すまい。広島と長崎の市民にとって、1945年8月の記憶を鮮やかな記憶として留めておくことは、大変な重荷です。しかし、今日ここに、100近くに及ぶ都市が広島と長崎だけにこの重荷を背負わせないぞと代表を送って来ています。広島と長崎の姉妹都市や、またボルゴグラーデやドレスデンのようにやはり戦争で全壊に近い破壊を受けた都市もその中に含まれています。

この世界平和連帯都市市長会議は、次の三要素の一つにまとめたということで大変意義深いものです。その要素とは一原爆を体験したただ二つの都市が開催地というユニークな舞台設定、世界各地からの地方自治体や都市が参加しているということ、核時代の恐るべき開幕から40年後の核の脅威の新たな局面を迎えようとしているまさにその年という時宜を得た開催時期—の三つです。

まず、舞台設定について述べましょう。40年前の明日の朝8時15分、一瞬の閃光の中でこの市を廃虚と化した原子爆弾の投下は、広島を単なる一都市ではなく、永遠かつ普遍的意義を持つ象徴へと高めました。人間が人間に対して放った最初の原子爆弾は、悲しいことに最後の原子爆弾とはならなかったのです。三日後、長崎も同じ運命をたどりしました。この二つの都市は、大変な苦勞をし、そして被爆後数年間は外部からの援助を受けることなく地域社会と生活を立て直しました。政府もまた、戦争に疲れ果て、打ちのめされていたので、援助しようにも何も出来なかったのです。

現在、繁榮するこの二つの都市を見ますと、40年前の荒廃を想像するのは困難です。広島と長崎が都市として聞おうとしているのは、まさにこの困難—忘れないことの困難—なのです。今日、この両都市は、核戦争が人類にもたらす身の毛もよだつような結果を世に知らしめるべく立ち上がっています。そして、両都市以外の人類の地域社会が1945年8月6日と9日にここで起こったことを決して忘れないように、現代の戦争が起こったら人類が

代価として支払う血と肉—人類の業績と精神—の生々しい焼けただれた姿の印象がそれぞれに地に持ち帰られるようにする仕事を自らに課したのです。被爆者は、そして被爆後に生まれた広島と長崎の市民もまた、人類全体の記憶の極めて重要な部分を自らの体験として持つ貴重な証人なのです。

現在の核兵器に関する論争は、弾頭の数、投射重量、三元戦略核戦力の構成、相互確実破壊の前提による恐ろしい相互抑止幾可学といった抽象論に終止しています。

地球上のあらゆる地域の中でこの広島と長崎こそが、相互確実破壊とは実はどういうことを意味するのかを如実に語ってくれます。それは、この地を訪れた人以外にとって人間の理解力を超えた果てしのない恐怖に他ならないのです。核戦略ドクトリンは、1945年8月6日の広島、8月9日の長崎が体験した現実の前では愚かしいたわごとになり下がってしまいます。核戦略家たちや政治家は、平和を愛する人々に対して核軍備の必要性について「現実的」に考えるように、あるいは「殺人の解毒剤は自殺である」というゲームの理論を容認するようにと攻めたてます。それとは対照的に、広島と長崎両市はすべての人々に対し、核戦争が人類にもたらした現実を直視し、両市の体験の実相が戦争ゲームのまよつばの理屈を排除するという信念を断固として持ち続けるようにと訴えます。

広島と長崎の人々は、戦略家としてではなく、理論家としてでもなく、はたまた普通の意味での政治家としてでもなく、核攻撃の恐怖を実際に体験した地球上でただ二つの地域社会の代表として、核兵器廃絶を訴えます。彼らは、核戦争によってひどい傷を負った人間の顔を示します。そして、多数の国々の都市に、自らの悲劇が他の都市に住む人々の上に振りかかることがないように核兵器の完全禁止のために共に働こうと呼び掛けたのです。

呼び掛けに応じた都市の中には、日本のように非核武装地帯宣言をしたところもありま

す。この宣言は、核軍備という愚かしい行為には加わらないぞ、という市民の直接の拒否に他なりません。この拒否は、軍拡競争を止めさせ、ひいては削減の方向へと逆転させる闘いの重要なシンボルであり、かつ重要な手段となる可能性を秘めています。核時代における最大の不安材料は、人々がこれらの恐ろしい武器に対して現実免疫が出来てしまったかに見える地球規模の軍産複合体に対峙した時に感じるどうしようもない無力感です。自らの地域社会を非核武装地帯と宣言するということは、恐怖から自由になりたいという根深い基本的な人類の願い、自らを被害者の立場にも加害者の立場にも置きたくないという願いの現われです。しかし、どの都市も、あるいはどの国も、一方的に核の危険から抜け出ることが出来る考えるのは幻想に他なりません。われわれは皆、地球上の恐怖の均衡という名の核の傘または核の影—大ていは両方の—の下に生活しているのです。われわれは皆、全人類の文明という人質を取っている核のにらみ合いを支持する—あるいは少くとも黙認する—社会の、経済の、そして政治の体制にがんじがらめにされています。

しかし、時には注目に値する抵抗や拒否の姿勢も見られます。私たちがここにこうして集まっているのもその一つです。しかしここで忘れてならないのは、核の影を追放する闘いは長く辛苦を伴うものだということです。「闘う」という意思を宣言し示威するだけでは十分ではありません。これは、その闘いの始まりに過ぎないのです。平和のために闘う同志は、核戦略の大家に優るとも劣らない政治の、科学のそして技術の専門知識を養わなければなりません。と同時に平和のために闘う同志は、核の脅威の人道的意味にあくまで固執し続け、生命と自由が何よりも大切であることを主張し続けなければなりません。

4年半前、広島市と国連大学は、協力してローマ法王ヨハネ・パウロ二世をお招きし、この同じ演壇でお話しして頂きました。その時の法王のお言葉のいくつかを皆様にもう一

度思い出して頂きたいと思います。「過去には、一つの村、町、地域、あるいは国を全滅させることが可能でした。しかし、現在では、この地球全体が破壊される危機にさらされています。この事実は最後には、万人をして基本的な道德の問題に直面させることになるでしょう。これからは、人類の存続は意識的な選択、意図的な政策の結果初めて可能となるのです。私たちが決断を迫られている道德的、政治的選択とは、精神、科学そして文化のあらゆる資源を、平和のためそして新しい社会を築くため—すなわち個々人のそして全人類の全体的進歩を広い心で追求することによって、同胞を殺し合う戦争の原因をなくすことの出来る社会を築くため—に捧げるか否かという選択です。私たちは現在の人々にこう言わなければなりません。『信じることを忘れるな。あなた方の未来は、あなた方の手中にあるのだ。公正な人類社会あるいは国と国とがさらに強く団結する社会を築くことは、ただの夢やむなしい理想ではない。これは、人間の知性と精神力をもってすれば、そして万人の才能とエネルギーを新たに動員し、人類のもてるすべての技術的、文化的資源を働かせれば十分に立ち向かうことの出来る道德的使命、聖なる義務なのだ』と。』

選挙区民とのつながりの深い地方自治体当局は、平和と国際理解を推進する直接的行動を誘発する上で最大の可能性を秘めています。また、それぞれの地域社会の核軍縮のために働きたいという願いに応え、かつまたその願いを沸き起こさせる上で最良の機会も与えられています。この与えられた機会には責任も伴っています。私の考えでは、これらの責任のうち最も重要なのは、教育の責任です。すなわち、市民に対し「核戦争が起きたら人類はどうなるか」ということを現実的な資料によって知る機会を提供すること、人類の科学および技術的能力を平和的にかつ建設的に利用するために政治の分野と民間の分野で活動する選挙区民層を形成すること、国際的協力の精神と自分と自分の周りの隣人たちが

けではなく、人類全体という家族の存続を求める本能をはぐくむことを目的として教育するのです。

広島と長崎は、この教育に取り掛かるには考える最良の地です。と申しますのも、これらの地を訪れた人は誰も、両市民が受けた試練を目の当たりにして、心を揺さぶられることなく平静を保って去ることは出来ないからです。広島と長崎は、他の都市には決して起こらないであろうこと一両都市が決して起こらないことを願いつつ確信するために働いていること、すなわち、地域社会の完全崩壊（この場合、一時的な崩壊であるが）、都市のあらゆる施設、公益事業の破壊、長期にわたりつきまとう病苦と恐怖—をじかに体験しました。この会議で両都市は、その体験を日本の31自治体、22ヵ国67都市の代表の方々と分かち合うのです。

私は、この会議に第三世界からの代表の方々がいく人か出席されていることに特に希望を与えられました。核兵器の脅威は、東と西の対立の問題として取り組むだけでは不十分です。にもかかわらず、北側先進諸国と南側発展途上国のいずれにおいてもその傾向が見られて来ました。ここで、核問題を東と西の次元に限定することがいかに不合理かをさらに詳しく考えてみましょう。そのためには、三つの顕著な問題—第三世界の不安定な情勢、核の拡散そして「核の冬」説で述べられている大規模な核戦争が環境に与える影響—toに触れる必要があります。

原子爆弾が広島と長崎に投下されて以来、世界で150以上の戦争が起きました。その大部分は、第三世界に集中しています。社会変革の急激な速度と規模、景気後退の圧倒的な影響、心にわだかまる過去の不平や怒り、そして急激に高まる新たな要求、これらの要因が第三世界の社会的、政治的弾性をこう着させ、もはや限界に達しています。その上、核戦力が全く互角となった今、超大国同士が直接戦うことは危険が大きすぎ、そのために第三世界が東側と西側の競争が繰り広げられ

る舞台とされています。第三世界での対立の成り行きは、世界全体の戦略上のバランスに大きな影響力を持つようになりました。1945年8月以降、核兵器の使用が真剣に考えられたほとんどの場合に、第三世界諸国が関与していることがその証拠です。

第三世界における武装対立の展開は全く予測がつかず、多くの発展途上国や地域に長期にわたる政治情勢の安定が訪れるとは考えにくくなっています。このような不安定な情勢の中で核がさらに拡散するということは、まさに恐怖という他はありません。それでもなお、既存のあるいは新たな緊張の出現によって、核兵器を取得するために全力を挙げる国が出てくる可能性は非常に高いのです。ある国が核を備えようとする最大の誘因は、その敵対国が核を備えようと計画している、あるいは実際にそのための行動を開始した、という事実です。この悪循環は、インドとパキスタン、ブラジルとアルゼンチン、南アフリカと前線諸国、イスラエルとイラクの間で既に進行中です。また、比較的短期間に核兵器を開発する技術的能力を持った国もその他多数あるのです。

しかし不安定な要因を抱えていたり無責任な行動を取る恐れのある国に核兵器が広がっていくことよりもさらに恐ろしいのは、核兵器が非政府団体、特にすでにテロ戦術を使ったり、政治的目標を達成するためには罪のない民間人の生命を犠牲にすることもいとわないう姿勢を示す団体の手に渡った時です。数年前、アメリカのプリンストン大学の大学院生が原子爆弾の製造方法を記した青写真を出版し、それが実に信頼性の高いものであったのをご記憶のことと思います。ますます高度化、小型化、強力化される核兵器、ある程度の知識があれば容易に知ることの出来るその基本設計、ますます入手しやすくなった核分裂材料、これらの事実を考え合わせれば、核の独占がいつまでも続くなどとは考えられません。大学院生に教科書どおりの爆弾を設計出来るのなら、核スーツケース爆弾な



どというものの出現も、そう遠いことではないでしょう。政府の兵器庫には、泥棒でさえも食指を動かしそうな「バックパック」(背負って使用する)爆弾が収められています。

原子力産業の成長も核の拡散の危険を高めるのに一役買っていますが、これには二通りあります。第一に、非軍事目的の原子炉から兵器品位のウラニウム製造への転用は、大きくは供給元と製造元の保障措置によって監視されてきました。しかし原子力産業は現在経済危機のさ中にあり、原子炉ビジネスが買手市場に変わってしまいました。その結果、原子炉を購入する側の国々がその保障措置を何とか緩和しようとする危険が生まれています。第二に、増殖型原子炉の開発により、例えばこれが先進国でしか運転されないにしても、ますます多くのプルトニウムが流通経路に乗るようになり、少量のプルトニウムを小型兵器に転用するのを防止することは大変な仕事になり始めているのです。

北側先進諸国が発展途上国は核爆弾を作る方法を計算する能力も必要条件も持たないと決めてかかるのは愚かなことですが、第三世界が核の脅威を、差し迫った飢えと貧困の問題とは無関係の核保有諸国やその隣国、あるいは密接な関係にある同盟国だけの問題だとみなすことも同じように愚かなことです。この自己満足は、「核の冬」説一核の冬の厳しさがどの程度か、どの位続くかという点についてはまだ議論の余地がありますが、その正しさは現在ではほとんど全世界で認められている一によって打ち砕かれました。北半球でかなりの量の兵器が使用された後に来ると言われる地球規模の核の冬が、核兵器を保有していようといまいと、また核兵器の入手を計画していようといまいと、地球上のあらゆる国を危険にさらすことは明らかです。前にも申しましたように、危険から抜け出すことは絶対に出来ないのです。第三世界は、核軍備管理の進展とその進展の鍵となる超大国間の緊張緩和を再度呼び戻すことが出来るかどうか

かということに、直接かつ差し迫った利害関係を持っています。

核の脅威がかくも地球上の隅々におおいかぶさっているということは、平和運動もやはり同じように地球上の隅々にまで至らせなければならぬということです。これは核保有国になり始めの国々で特に急を要すると感じられます。核拡散、軍拡競争、一触即発の感のある核戦争、これらはもはや、各国政府だけの手に委ねるにはあまりに重大すぎます。その上、過去20年間に見られた大きな意識改革は、そのほとんどが政府の政策ではなく、民衆のたゆまぬ運動の所産であることも忘れてはなりません。ここで私が申しますのは、環境保護運動、女性解放運動、各種公民権運動などのことです。平和活動家は、他の運動と別個に行動するのではなく、共通の目標を目指して共に手を取り合って運動を推進する必要があります。国民が声を大にして要求を繰り返し、問題の所在を明らかにして、その解決方法を実行に移すよう主張すれば、政府は時宜を得て対応するものです。民主政治の形態を取らない政府とて、これは同じです。

しかし、国民にとって平和を要求するだけでは十分ではありません。平和の障害となっている勢力が何かを理解するためには、さらに突っ込んだ分析が必要です。国連大学は、平和と安全をテーマにした研究を通じて、絶対的な平和、すなわち軍事力に頼ることのない対立の真の解決方法をより正確に把握するための努力を重ねている一機関です。

ローマ法王ヨハネ・パウロ二世は、ここ広島で、全人類の進歩を追求することによって、戦争の原因となるものが全くない社会を築く必要があると述べられました。不正が解決されないままの平和は、不毛でもろい平和です。ですから、核の影とそしてそれよりは小さいがそれでもなお恐ろしい従来の戦争の影もすべて払いのけたいと願う世界中の都市や地域社会のわれわれは、ただ平和を求めて叫ぶだけではなく、平和のために働かなければならないのです。そしてこれは、正義のために、

われわれの社会を一步一步変革するために、そして他の社会の人々との関係を変革するために働くことに他ならないのです。

私は冒頭で、この会議の舞台設定の意義、そして他の都市の代表の方々がここに集まっていることの重要性について述べました。ここで、私たちが集まっているこの歴史的瞬間について簡単に述べさせて頂きたいと思います。核時代の幕開きから40年、私たちは差し迫ったそしてますます大きくなる危機感を抱いて生活しています。しかし私は、この40年間に核が戦争で使われていないという事実から一抹の希望を持つことが出来るのではないかと思います。核兵器の高度技術は、徐々に手の届く範囲に近付いて来ています。原子力産業が成長し、その結果、核燃料サイクルの弧は長くなりました。政治的緊張は未だ緩和されていないのも事実です。それでもなお、現在までのところ核拡散がむしろ驚くべきとあっていいほど抑制されています。これは大した慰めにはならないかもしれませんが、一方では人類には、恐竜がたどった運命を避けるための何がしかの集団本能があるということの証拠とは考えられないでしょうか。

私はこのことを、確信というよりも希望として皆様に申し上げます。核戦争で最初に犠牲になるのは私たちが生活し、働き、愛し、遊ぶ都市です。ですから、都市こそが、核戦争が起こるのを防ぐ運動の最前線に立たなければならないのです。市民のニーズに対応したサービスの提供を責務とする地方自治体は、市民の福祉と安全に影響を与える問題ならば、その地方だけに留まらず国際的あるいは国家的問題にも取り組む責任を負っています。そしてこれらの問題の中で最も急を要するものが核軍縮の問題です。

## —ヒロシマ・ナガサキ、核戦争は何をもたらしたか—

### 基調報告

8月5日(午後2時30分～4時15分)

広島グランドホテル(孔雀の間)

1. 司会あいさつ…………… 47  
広島市市長室次長                      山田 康
2. 議長指名受諾および会議の運営方法についての説明…… 47  
広島市長                                  荒木 武
3. コーディネーターあいさつ…………… 47  
国連大学学長特別顧問              永井 道雄
4. 基調報告  
    原爆の社会的影響…………… 48  
        広島女子大学学長                  今堀 誠二  
    広島・長崎における原爆の健康影響…………… 51  
        (財)放射線影響研究所理事長      重松 逸造  
    長崎の被爆実態…………… 53  
        (財)長崎平和推進協会理事長      秋月辰一郎  
    広島の被爆実態…………… 56  
        (財)広島平和文化センター事業部長    高橋 昭博
5. 基調報告に対する質疑応答  
    ザンクト・ウルリヒ(オーストリア)村長  
        タドオイス・シュタインマイヤー …… 59  
    アッシュフィールド(オーストラリア)市長  
        ルイス・ハーマン…………… 59  
    バンクーバー(カナダ)市長  
        マイケル・F. ハーコート…………… 61  
    長崎市長 本 島 等…………… 61
6. 被爆者との懇談…………… 62





## 全体会議Ⅰ

司会（山田広島市市長室次長）

ただ今より、全体会議Ⅰを開会いたします。  
テーマは「ヒロシマ・ナガサキ核戦争は何をもたらしたか」です。司会は私、この会議の事務局長を務めております広島市市長室次長の山田でございます。

この会議の議長は地元の広島市長荒木武が務めさせていただきますのでよろしくお願いいたします。

広島市長 荒木 武

ご指名により、広島での会議を通して、議長を務めさせていただきます。

まず、会議の運営方法についてご説明します。本日の会議は、これより、原爆による被害の実態について広島・長崎の関係者から説明していただき、その後、質疑応答に入ります。

明日、午後から開催いたします第2日目の会議は10都市から平和への取り組みについて報告していただき、その後、これを受けて、パネルディスカッションを行います。この2日間にわたる会議の総まとめといたしまして、広島アピールを採択し広島での会議を終わりたいと思います。なお、広島アピールおよび第3回国連軍縮特別総会への対応方針に関する起草委員には、広島・長崎市のほか、次の12市の市長をご指名させていただきたいと思っておりますのでよろしくお願い申し上げます。

まず、

ドイツ民主共和国 ベルリン市

エアハルト・クラック市長

イタリア カッシーノ市

ヴィンジェンゾ・マッティ市長

イギリス グラスゴー市

ロバート・グレイ市長

中国 杭州市

ジョン・ボウシ（鍾伯熙）市長

日本 川崎市

伊藤三郎市長

スリランカ スワラエリア市

エドモンド・ラジャパクセ市長

アメリカ サクラメント市

アン・ルーディン市長

カナダ バンクーバー市

マイケル・ハーコート市長

フランス ヴェルダン市

ジャック・バラ・デュボン市長

ソ連 ボルゴグラード市

ウラジミール・イワノビッチ・アトポフ市長

ドイツ連邦共和国 ハノーバー市

ヘルベルト・シュマルスティーク市長

オーストラリア シドニー市

ダグラス・W・サザーランド市長

それに

広島市長 荒木

長崎市長 本島

以上でございます。

それではこれより会議に入りたいと思いますが、2日間の会議を通して、元文部大臣で現在、国連大学学長特別顧問の永井道雄先生にコーディネーターをお願いしたいと存じます。

永井先生、よろしくお願いいたします。

コーディネーター（永井道雄）

ただ今、コーディネーターの重要な役をおおせつかりました永井でございます。どうか皆様、ご協力をお願い申し上げます。

早速会議に入ることにいたしますが、この会議はプログラムにもありますように、まず始めに4人の方々に原爆被爆の実相について基調報告をしていただき、その後で質疑応答に入りますので、質問などは4人の方の報告が終わるまでお待ちいただきたいと思います。

4人の方々をご紹介しますので、名前を申し上げました順に壇上にお上り下さい。

日本では「さん」付けでお呼びしますが、これは大変都合が良く、男女、老若、未婚・既婚を問わず、全てに通用します。外国の方についてにご紹介したわけです。

最初に広島女子大学学長の今堀誠二さん、次に広島放射線影響研究所理事長の重松逸造さん、長崎平和推進協会理事長の秋月辰一郎さん、最後に広島平和文化センター事業部長の高橋昭博さんです。

では最初に、広島女子大学学長の今堀さんから、社会的な面から被爆の実態についてご報告があります。今堀さんは広島市編集の「広島・原爆戦災史」の監修、あるいは広島・長崎両市編集の「広島・長崎原爆災害史」の編集に携わっておられます。歴史学者として原爆・平和問題に造けいが深い方であり、1981年には、現在スウェーデンの首相であるバルメ氏を委員長とする「軍縮と安全保障に関する独立委員会」に広島においていただいた際の広島招致実行委員会の委員長をお務めになりました。

## 基調報告一

### 原爆の社会的影響

広島女子大学学長

今堀 誠二

#### 1. 原爆投下

(1) 日本は1931～45年の15年戦争を通じて、空爆や包囲攻撃の際に、しばしば戦闘員と非戦闘員の区別を怠り、一般市民に対する殺りくを繰り返しました。各国の政府や識者が国際法違反であると日本の行動を非難しましたが、最も熱心に抗議を繰り返したのは、ルーズベルト大統領でした。その抗議文には民主主義と人道主義を守ろうとする気迫がこもっていました。もし日本がこの抗議を受け入れて非戦闘員に対する無差別攻撃をやめたら、大統領が後に原爆開発に踏み切ることにはなかったでしょう。けだし、原爆は戦闘員と非戦闘員の別なく、投下地点にいるすべ

ての人間を虐殺する武器であり、一般市民を攻撃目標として開発された兵器であるから非戦闘員を巻きこんではならないという、それまでの主張とは全く矛盾することになります。この時期になると、ルーズベルトの日本への憎しみは強烈でありました。原爆開発は、ドイツを考慮して始められたのは事実ですが、どこに投下するかという話になると、まだドイツ軍が強力だった時代に、日本で使用することを決めていました。

ルーズベルトが日本投下を決定したのは、1943年5月5日のことであり、1944年9月18日、ルーズベルトとチャーチルが対日使用で合意しています。(米政府文書による。7月9日共同通信ワシントン支局発表)。いずれにしても、(a) 日独の無差別攻撃の続行が、原爆開発の引き金となりました。(b) 原爆は都市を攻撃し、一般市民を殺害する目的で開発され、かつその通り使用されました。(c) 原爆はヨーロッパでは使わないというより、アジアでの使用が決まっていました。(d) 政治家と軍人は、原爆使用について全くためらうことがなかったし、反省もしていませんでした。

(2) 広島と長崎が原爆投下地点に選ばれた理由は、住宅が密集していて、原爆の効果が正確に測定出来るからであります。この実験目的は立派に達成されました。(a) 爆風・熱線・放射線の相乗効果により、その破壊は瞬間的・徹底的で、いかなる攻撃よりも効果的であったことがローレンス記者により確認されました。(b) 被爆者は全く治療を受け得ない状態のまま、被爆直後に大半が死亡しました。病院・医師・看護婦・救護班・防疫班が全滅したからです。また、軍隊や警察・放送局・交通通信機関・行政機関・警防団・国民義勇隊・消防署などもほとんど全滅したため、被爆者援護対策を講ずる責任機関も消滅してしまいました。(c) 放射能は被爆者だけでなく、彼らを看護した者や被爆直後に入市した者、放射能を帯びた黒い雨にうたれた者を含め、多くの第二次被爆者を出しまし

た。放射能禍は生涯にわたって被爆者を苦しめただけでなく、被爆二世の問題まで引き起こしました。(d) 原爆は地域社会全体を崩壊させましたが、その社会的・経済的損失とその後遺症もまた、想像を絶するほど深刻なものでありました。被爆地は一度は人のいないゴーストタウンになりました。

(3) 被爆者の中には、相当数の外国人が含まれています。長崎には連合軍の捕虜収容所があって、アメリカ、イギリス、オランダ、オーストラリア、インドネシアなどの軍人数百人がいることは分かっていたのですが、アメリカはそれを考慮して原爆投下をためらうことはありませんでした。爆心地から600メートルの場所にあったため、全滅しました。さらに広島には日系アメリカ市民が約2,000人いましたが、アメリカは爆撃にあたり、日系米人の存在を少しでも考慮したこと(例えば避難勧告を出すなど)はありませんでしたし、被爆後も全く放置して、何の援護も与えませんでした。両市には神父や牧師としてドイツ、ポーランドなどの国籍を持つ者もいましたし、中国、モンゴル、東南アジアからの留学生も白系ロシア人も住んでいました。長崎には江戸時代から華僑が多く住み、また台湾出身者が教授、学生、商人として生活していましたので、長崎医大などで犠牲になっています。日本の植民地政策により、朝鮮人が広島市内で2万8,000人～2万5,000人、長崎で1万2,000人被爆していますが、うち広島で5～8,000人、長崎で1,500～2,000人死亡しました。以上の事実は、被爆者が日本人だけでなく、全人類であることを証明していると言えます。

## 2. 原爆災害

(1) 建物の損害は、2キロメートル以内では100%が全壊全焼、3キロメートル以内でも9割の家ががれきと化し、4～5キロメートルでも3分の2は使用不能となりました。

(2) 被爆者の数は、広島で約35万人、長崎で約27万人の市民と軍人が直接被爆し、ほかに入市被爆者として広島7万7,590人、長崎

2万8,592人、救護に当たったために第2次被爆者となった者が、広島1万1,347人、長崎5,568人(いずれも被爆者手帳所持者のみ)となっています。被爆による死亡者は1945年10月末までに広島13万人、長崎7万人、1950年10月までに広島20万人、長崎14万人に達しました。

(3) 原爆は社会そのものを破壊しました。被爆者のうち、家族の中に死亡者が出た家は爆心から1キロ以内で79%、3キロ以上でも42%で、ほとんどが欠損家族となりました。またあの惨劇の下で、子は親を捨て、夫は妻を見捨てて現場を離れるほかなかったため(母は多くの場合、最後まで子を見捨てることができず、共に惨死している)、家族員相互、および本人の心を傷つけて、共同体の再構築を困難にしました。さらに親族、近隣、町内会などで作られていた相互扶助の共同体も、破壊し尽くされています。

(4) 両市が原爆で直接失った富は、少なく見積もっても広島が8億8,410万円、これを1944年当時の国民生産所得1,044円で計算しますと、85万人分の年間総所得に相当します。長崎の場合は3億8,010万円で48万人分の総所得にあたっています。これを1978年の価格に計算し直してみますと、1ドル240円として広島約65億ドル、長崎約23億ドルの損失となります。また広島・長崎はともに300年以上の伝統を持つ都市でありましたので、その歴史的な遺産、例えば城や文化財はほとんど消失しましたが、これらは再取得が不可能であり、また経済的な価値では計れないものがあります。さらに戦後において、被爆者なるが故に受けた経済的損失は多大であり、富の喪失と言う場合、以上にとどまらないのは勿論です。

(5) 被爆生存者の戦後の生活史をみますと、国民全般に比べて著しい格差が見られます。戦時災害保護法の規定により、国は被災2カ月後に、生活上および医療上の援助を全て打ち切っています。そのため、住居も職場も無くなった被爆者は、生きていくすべを失

い、病死・餓死が相次ぎました。県や市も彼らを援助する財政的ゆとりがありませんでした。国際赤十字も1.5トン、包帯にしてわずか1万人分の医療品を送ったに過ぎません。占領軍は賠償要求につながることを恐れて、どんな形の援助であろうと、一切拒否し続けたのです。被爆者が最も欲しかった時期にそれがゼロだったわけで、この間に広島で6万人、長崎で7万人の被爆者が亡くなっておりま

す。1965年に厚生省が実施した全国の被爆者実態調査でも、就業率が男性82%（全国平均88.5%）と低く、女性は38.3%（全国平均34.5%）と高くなっています。男性の場合は放射能で働けない者が少なくなかった半面、女性はそのあおりで夫に代わって家計を支えねばならなかったからです。休業率は男性2.8%（全国1.1%）、女性は0.8%（全国0.5%）で2.5倍ないし6割強となっています。男性の被爆者には普通の勤務に耐えられない者が多く、転業、休業、失業の率が高く、日雇い労働者が多く、平均収入が少なくなっているのであります。

(6) 婚姻についてであります。一般の被爆者は広島30万人、長崎27万人ですが、1950年の国勢調査では、被爆生存者が広島16万人、長崎12万5,000人となっていますから、この時点までに被爆者の54%が死亡していることが分かります。したがって、配偶者を失ったものの比率が高いことは想像に難くありません。1958年に広島県が行った人口調査では、30～39歳の男性の有配偶率が84.9%で非被爆者より5%低く、女性の場合は20～59歳で低くなっています。未婚者の比率は、被爆した女性の場合は20～29歳で49%、30～39歳で8.1%となっています。これと同じ年齢層の非被爆者は44%と5.7%だから、有意に高くなっています。男性も30～39歳で被爆者13.1%に対し、非被爆者7.7%で、被爆者の結婚には障害が高かったことを示しています。

1965年の厚生省全国調査と国勢調査の比較

においても、被爆者は男女とも有配偶率が低く、特に男性は20～29歳、女性は20～34歳および55～64歳において、全国より著しく低くなっています。これは未婚率が男女共に高いことのほか、女性では死別の割合が高い事実とも相応します。

(7) 生活苦悩については、1965年の被爆者実態調査によりますと、被爆者のうち、医療を要するものは普通の2倍（44%）、医療費支出者は2倍半、売薬購入者は3倍半、身体障害ありと答えた者も3倍半に達しています。1966年の広島市の調査では、被爆世帯の階層を上中下とし、戦前と45～49年、50～54年、55～66年の変化を見ていますが、上層は11.5%、8.2%、9.0%、10.3%と一時は低下しながらほぼ戦前に復しているのに、中層は48.7%、32.7%、34.6%、35.3%と激減したまま回復せず、下層は39.7%、59.0%、56.4%、54.5%と急増したままで、66年になっても被爆者の過半数が下層に属しています。被爆市民は全体として貧困化の傾向にありますが、中層と下層において回復力が弱いことが分かります。健康がすぐれず収入が減少しているのに医療費などが増加しているためであります。

(8) 原爆孤児についてであります。広島・長崎の小学生には、戦争末期に学童疎開の措置が講じられ、広島だけで2万3,500人が山間部に移動して、被爆を免れましたが、彼らの両親が死亡したり、一家が全滅したため、4～5,000人は孤児となりました。孤児収容施設も設けられましたが、彼らは大人になる過程であらゆる辛酸をなめ、成人となっても孤児なるが故に人間の壁、社会の壁、自分の壁に阻まれて苦難の人生航路をたどりま

した。中には犯罪に巻き込まれた者も少なくありませんでした。長崎でも事情はほぼ同じであり、多くの孤児の悲劇が伝えられております。

(9) 原爆孤老、戦争末期には老人疎開もかなり行われましたが、一家の柱が爆死を遂げたので、広島や長崎には身を寄せる所がなく、

孤老となる例が少なくありませんでした。また父母が爆死したため、祖父と孫の家庭も非常に多かったのです。孤老の生活程度は中以下が90%で、生活保護や失対人夫の賃金が主要な収入源だったし、負債や病気も重くのしかかってきました。原爆孤老の自殺がしばしば新聞で取り上げられたりしました。

## 結び

原爆投下については、日本人も加害者としてその責任を回避できません。しかし核兵器は集団虐殺（ジェノサイド）、社会抹殺（ソシオサイド）、生物抹殺（バイオサイド）、さらには地球破滅（アースサイド）を行い、人類そのものを完全に消滅させます。これは広島・長崎の経験から明らかです。原爆は人間として許される戦争手段ではありません。核廃絶は被爆者の任務であります。同時に原爆が軍隊ではなく、都市と市民を攻撃目標にして開発されたものである以上、全世界の都市が連帯して自分たちに突きつけられたこの兵器の廃絶に、思想とか政治的立場とかいうものを一切乗り越えて、尽くされることを希望いたします。

## コーディネーター（永井道雄）

それでは次に重松さんをお願いいたします。

重松さんは1973年からWHOの衛生統計専門家諮問委員会の委員、それから1982年から1983年には、WHOの核戦争の健康と保健サービスに及ぼす影響検討専門家会議の副議長を務めておられます。

## 基調報告一

### 広島・長崎における 原爆の健康影響

（財）放射線影響研究所理事長

重松 逸造

私は広島と長崎における原爆の健康影響について、スライドを見ていただきながらお話ししたいと思います。

（スライド1） 原爆は、昭和20年8月広島と長崎に投下されました。長崎はプルトニウム爆弾で、そのエネルギーは広島のウラニウム爆弾より強力であったにもかかわらず、広島被害が長崎より大きかったのは、地形と建物の分布の違いによるものであります。

（スライド2） 左側が広島、右側が長崎での原爆爆発時の写真であります。

（スライド3） 原爆の物理的影響は、爆風と熱と放射線の3者の混合によるものでありますが、爆風による被害と火災は、特に長崎の場合、4キロメートル以上に及んでおります。また、放射線のうち、ガンマ線は両市とも2ないし2.5キロメートルに達していますが、一方広島で顕著にみられた中性子は、空气中で吸収されるため到達距離が短くなっています。

（スライド4） 昭和20年12月末までの原爆による急性死亡者数は、広島が人口約33万人中およそ11万人と推定されております。長崎の場合、この数字は人口約25万人中7万人ということになります。負傷者数は、両市とも死亡者数に近い数字となっています。

（スライド5） この写真は、広島爆心の爆心地より500メートルの距離で被爆し、やけどした重症の患者であります。

（スライド6） 着物の濃い色の模様がやけどになっています。

（スライド7） 顔に皮膚出血斑のある典型的な放射線障害の患者であります。



(スライド8) 脱毛も放射線障害の特徴的な徴候の一つであります。

(スライド9) 以上は、原爆が健康に及ぼす急性の影響について述べたものでありますが、昭和22年よりは ABCC “米国の原爆傷害調査委員会”と JNIH “日本の国立予防衛生研究所”が共同して広島と長崎における被爆者の健康後影響、すなわち遅れて発現する健康影響の調査を実施してきました。昭和50年には、日米両国政府が均等に財政負担をする今の財団法人放射線影響研究所がこの調査研究事業を引き継いで現在に至っています。

(スライド10) これは広島の放影研ですが、ABCC 時代の古い建物をそのまま使っています。

(スライド11) こちらは放影研の長崎支所で、建物は最近改築されました。

(スライド12) 原爆被爆者の全国調査は昭和25年に初めて実施されましたが、これにより全国で28万5,000人の被爆者がいることが判明しました。これらの被爆者の健康後影響を追跡調査する目的で、ABCC は約11万人の固定した集団を設定いたしました。この固定集団については、昭和33年以降寿命調査が実施されており、病理学的な調査のために死亡者の解剖も行われてきました。また、同じく昭和33年からは、成人健康調査と呼ぶプログラムで2年に1回の精密な健康診断が固定集団の約5分の1に当たる2万人について実施されて参りました。一方、母親のオナカの中で被爆した2,800人については、非被爆の子供さんとともに出生後の死亡率と、り病の状況が追跡されております。

(スライド13) 昭和21年から29年の間に広島と長崎で登録された妊婦に基づいて大規模な遺伝調査が進められてきました。さらに、昭和35年からは両親のいずれかが被爆した7万7,000人の子供について固定集団が設定され、死亡状況の追跡と、後には細胞遺伝学のおよび遺伝生化学的な研究が行われて参りました。

(スライド14) これらの研究のほかに、こ

のスライドに示しますように循環器疾患やガンの調査、免疫学的研究、原爆線量の再評価などといったその他のプログラムも現在進められております。

(スライド15) これらの研究プログラムに基づいて実施されてきた原爆放射線の健康後影響につきましては、3枚のスライドに要約してみました。このスライドは、原爆被爆との関係が明確に確立されている影響を示していますが、これによると放射線の影響は、白血病と甲状腺、乳房、肺、胃などといった特定部位のガンの増加に限定されています。また、白内障の増加、染色体異常、胎内被爆者の小頭症と知恵遅れ、被爆後間もなくみられた発育と成長の遅れなども観察されています。

(スライド16) この写真は、母親のオナカの中で被爆して生まれた気の毒な小頭症の少年を示しています。

(スライド17) このスライドにみられますように、被爆との関係がボーダーラインから示唆される影響としては、その他いくつかの部位のガンと免疫の変化があげられます。

(スライド18) 一方、現在まで影響が認められないものには、ある種のガンの発生やガン以外による死亡率の増加、放射線に起因すると思われる加齢の促進、不妊症や遺伝的影響などがあります。ただし、これらの陰性所見がそのような影響の存在を否定しているわけではなく、観察した被爆者の数が不十分であったり、放射線の影響をみるのに用いた指標が敏感でなかったことを意味しているのかもしれません。

(スライド19) 昨年、WHO “世界保健機構”は“健康と保健サービスに及ぼす核戦争の影響”に関する国際専門委員会の報告書を公表いたしました。

(スライド20) この報告書は既に数ヵ国語に翻訳されています。この写真は、フランス語版と中国語版です。

(スライド21) この報告書の最終結論は、利用可能なすべてのデータを慎重に検討した

上で得られたものでありますが、それをここに引用しました。すなわち、“核爆発の健康に及ぼす影響に対処するただ一つの方法は、そうした爆発の第一義的な防止、すなわち核戦争の防止にしかない。”というものです。

私の結論も、この言葉をそのまま借りたいと思います。

コーディネーター（永井道雄）

それでは秋月さんをお願いいたします。

秋月さんは長崎平和推進協会の理事長でいらっしゃいます。やはり、長崎で被爆され、ご自身医学者でいらっしゃいますので、浦上第一病院の医長として、ご自分も苦しみながら被爆者の治療にあたられ、またカトリック教徒として洗礼をお受けになっている氏は、聖フランシスコ病院の医長としてもご活躍になりました。

被爆体験を伝えたいというお考えでご活動を続けておいでです。

## 基調報告—

### 長崎の被爆実態

（財）長崎平和推進協会理事長

秋月辰一郎

世界平和連帯都市市長会議に、世界各国22ヵ国67都市の市長の皆様、それに国内31自治体の市長の方々が、思想や、信条を超えた真の市民の代表であられる皆様に、ここ広島で長崎の被爆者であり医師である私に、講演の機会を与えられましたことは、光栄であると共に、非常な感激であります。

日本の長崎の被爆者、既に死亡した人、今生きている人々に代わりまして、まず、感謝の言葉を申し上げます。

原爆被爆以来、極めて無力な医者として、また、一被爆者として今に至るまで見てきたこと、生きてきたことの報告であります。昭和20年8月9日（1945年）、原子爆弾が私たちの頭上に落ちたとき、私は浦上にあるカトリック系の入院患者70人の小さい療養所の医師でありました。

その時には、8月6日の「広島に或る新型爆弾」が落ちたことを、私は、知りませんでした。広島はなくなった」と聞かされましたが、新型爆弾が原子爆弾であることは知りませんでした。その学長も知らなかったのです。それほど、日本は学者も人々も、いや指導者も、世界に無知で目隠しされていました。

8月9日、晴天で暑い日でありました。午前8時、「空襲警報」のサイレン、これは敵機が来ると言うことであります。当時日本の陸海空軍はほとんど壊滅、長崎市周辺の高射砲もほとんど無くなっていました。連合軍の空襲は日本の各都市に、昼となく夜となく行われていました。「今日は早いな」と私は思いました。患者が心配だ。やがて空襲警報は解除されて、警戒警報になりました。「何事もなし」と、私は患者に診察室で人工気胸を始めました。その時、突然、白い眼のくらむ閃光、直後「グワン！」と大きな衝撃が病院と私の頭上に加えられました。敵の爆弾が爆撃機が病院に直撃したと思いました。私も傍らの看護婦も倒れましたが、ショックから立ち上がりました。幸い傷はありませんでした。壊れた階段から傷ついて降りてくる入院患者は、不思議に軽い傷であり、私は、窓から病院の外に出ました。

その光景は、忘れることが出来ません。空は真っ暗く黒雲、地上には黄褐色の煙、そしてその煙の間から、遠く浦上天主堂付近、工業学校、近くの家も木も、燃えて赤い火を噴いている。病院の大屋根からも煙が出ている。私は火山の大噴火のような幻影を覚えました。「あ、これが広島に落とされた新型爆弾なのか」と思いました。長崎はほとんど全て

破壊、航空機は見えなかった。私の病院は3階建てれんがだったが燃えました。長崎の医療の中心である医科大学病院も壊滅しました。それから頭蓋の割れた人、腹から腸の出た子供、ガラスで出血多量の傷者が、病院の周りに来ました。大ぜいが裸でのろのろと歩いていました。これが全身やけどでした。この人たちの皮膚は剥げ、やがて黒くなって倒れました。病院は、5時間後に焼けてしまいました。私は薬も何もない無力な医師として、この時以来、このような重症者にとり囲まれました。次々に人々は死んでいき、傷もやけども化膿してウジがわきました。負傷者を私や修道士、看護婦の無傷のものが治療しましたが、とても治療は不可能でした。

4、5日して、これまで知らなかった不思議な病人が出てきました。傷のない人が血を吐いて、あるいは腸出血、全身出血して死亡しました。この血を吐いたり腸出血の病人が、放射線症（原爆症）でした。放射線症が、この被爆地を恐怖に陥れたのでした。その時は、原因が分かりませんでした。原爆（新型爆弾）は、爆発圧、高熱と大量の放射線を放射し、放射線物質（死の灰）を落下したのでした。

次々に放射線症で死亡する人々は、40日ほど続きました。その範囲は、爆心から半径2,000メートルに及んだのです。

長崎市内に、各地からの医療隊が救護所を作り、治療をしました。また30キロメートルほど市から離れたところに設備の整った大きな海軍病院があり、爆心地からそこに列車で運ばれるが、それらの医療を受けたものは、全負傷者の5～10パーセントにもならないし、しかも大半は死亡しました。その医療も極めて不十分でありました。

#### 敗戦終戦

新型爆弾（原子爆弾）が落とされて1週間、日本は降伏しました。8月15日、天皇の「戦争を止める」との言葉がラジオ放送されました。私たちは死者や傷者に取り囲まれて、ラ

ジオではなく小さい新聞で読みました。負けるのは当然でありました。何故、こんなになるまで戦争を続けたのかと、負傷者と共に泣きました。

初めて原子爆弾と言う名が聞こえました。「75年間は、人は住めない」と噂が流れました。私たちは焼けた病院で多くの負傷者に取り囲まれて、逃げることも出来ず、そのまま、わずかの薬品で負傷者の治療を続けました。

9月になるとアメリカ軍（連合軍）が進駐し、被爆地に新しい多くの薬や医療品を与えてくれました。長崎市の中央の学校跡を病院にしました。しかしほとんどの負傷者は、壕舎の中で放置されていました。

10月から日米合同の原爆被災の調査が組織的に行われました。勿論、それまで各大学の学術調査はありましたが、大規模の物理、生物、医学、統計学によるもので、占領軍の権威と命令とによる調査でしたから、直ちに発表されないで、6年後に学術的に報告されました。

#### 概要（長崎被災）

長崎原子爆弾はプルトニウムで、T・N・T換算23キロトン、最初は小倉が目標でありましたが、午前8時の小倉は雲と煙で視界が悪く、長崎に目的地が変更になりました。午前11時2分、投下。爆心地は松山町で市の北西部。

巨大な爆風圧、数十万度の高熱、数万ラドの放射線を一時に放出する。戸外の被災の場合、約1,500メートル～2,000メートルは致死量でした。

|         |                     |
|---------|---------------------|
| 死者      | 7万3,000人            |
| 負傷者     | 7万4,000人            |
| 全焼・全壊家屋 | 1万2,000戸<br>(2キロ四方) |

簡単に数字を記しましたが、全く正確ではないと思います。長崎の場合、爆心が中央ではなく北西部に偏り、間に300メートルの高さの山地があったため、広島災害より数値は少ないのです。私たちは爆心地から1,400メー

トルの距離で被爆しましたが、病院の建物がれんが造りで鉄筋コンクリートの壁は厚く、偶然、爆弾投下の時は全員屋内にいたために直接の死者はありませんでした。

#### 原爆による傷害（報告書による）

1. 爆風圧による内臓破裂。建物に埋もれる、あるいは崩壊物による挫傷。ガラスや木材による打撲創。それらの化膿症、倒壊物の下での焼死。

2. 熱によるやけど

夏で衣服は薄く、遮へい物がなければ、爆心から1,500メートル以内は死亡。総死亡者の20～30%はやけどです。

3. 放射線によるもの

これが原爆症の特色であり、恐るべきものであります。私たちが不思議な負傷者（血を吐いて死んだ人）と診たのは急性放射線障害でありました。造血組織（骨髓リンパ節）消化管が侵されるが、この障害が3、4日後から1カ月続く。それを急性期、亜急性期といいます。それらは感染症を合併して、亜急性期は4カ月後まで続くのです。

以上、私たちが被爆地で、無力な医師として体験したものが、学術的に総合された原爆症であります。しかしこの調査が始まったのは、原爆後40日以降であり、90%は既に死亡していました。また9月中に大雨が2回もあって、死の灰（フォールアウト）は流失あるいは地下に埋没しました。

敗戦の混乱と欠乏の中、米軍の主導で調査されたので、死者は切り捨てであり、放射線の障害は過小発表されたようであります。昭和20年12月に「原爆災害はほぼ終わった」と報告されています。実は、それから後障害が始まるのであります。

その後6年間、講和条約締結まで占領政策のプレスコード（報道管制）があり、日本の大学も復興未だしで、後障害の実数は判かりにくいのです。

#### 原爆後障害

原爆症の未知と不安は、この後障害があるからです。その実体験は、広島・長崎においてのみであり、悲しき人体実験でありました。

1. ケロイド、皮膚隆起、はんこん治癒異常、眼瞼、手指足跡顔面の器能障害、醜形
2. 男女とも性線不良性貧血などの血液疾患
3. 甲状腺、卵巣他の臓器悪性新生物（ガン）
4. 体内被爆先天異常（小頭症）
5. 遺伝子への影響

また社会的には、両親や親族が全滅した原爆孤児の問題や、子供や孫を全部失った原爆孤老、それらに原爆の加齢現症も加わりました。これらの原爆症、その後障害について、国家は放置しているのも同然でしたが、昭和30年になって原爆医療法により、後障害の治療救済を立法化し、また被爆者を決めてその疾病の診療を経済的に援助しました。さらに広島・長崎の大学に原爆後遺についての研究機関を設立して、原爆病院を設備したのであります。しかし遺族補償はまだしていないのであります。被爆者は自力で立ち上がらねばなりませんでした。

#### 原爆被災に対する反省

人類は、科学や技術の進歩、つまり兵器、軍事力に比べて、国家間民族の道徳、倫理は進歩しませんでした。特に日本人の国家観や生命観は、一億玉砕、国を焦土としても戦うという天皇中心の論理であったため、皇国史観を誤った方向に進めました。また日本は地理的にも島国で鎖国的であり、言語的にも世界のことに無知で、国民も指導者に盲目的に従いました。

被爆40周年の今、日本は経済的には成長し発展しました。また、技術は高度に進歩しましたが、本当の反省は十分なされておられません。日本人の意識は変わっていないように思えます。

#### 被爆地長崎市民として

長崎の原爆は日本の戦争の最後であり、こ

れで平和な日本となりました。日本のみでなく、世界のためにも、長崎原爆が最後の1発でなければなりません。今、米ソ超大国の核兵器戦争、世界の核兵器拡散は、長崎原爆の数十万倍であります。一度核戦争が起これば、人類は滅亡します。すべての生命は絶たれます。それを警告するために、私たちは被爆体験を語るのです。国連にも、大国の政府にも、また草の根の市民にも、核兵器と人間は共存できないこと、核兵器の充満した抑止力による平和は人類の真の平和でないことを、長崎市民は、今もこれからも主張し続けたいと思います。

長崎市は400年前から、ヨーロッパとの交流を持った日本唯一の港であります。長崎ではその300年間、キリスト教徒の迫害と殉教のあったところでもあります。現在の核兵器の巨大化、拡散の問題は、今すでに政党やその政策を越えて、人間の生命、人類の生存、人間の魂と愛の問題であります。昭和56年(1981年)ローマ法王、ヨハネ・パウロ二世が日本に來られて、広島での平和宣言、長崎での5万人の大ミサの説教がありました。ヨハネ・パウロ二世が核兵器を憎み、人間の未来を憂い、救う言葉は、長崎市民のみでなく日本人全てを核廃絶へ、平和へと奮いたたせました。長崎市民もこれまでのように沈黙と祈りのみでなく、声を大にして世界に平和への願いを呼び掛けようとしています。長崎市も(財)長崎平和推進協会を設立し、官民一体となって平和を考え、行動しようとしています。長崎は世界最後の被爆地、世界平和への門の始まりでなければなりません。

日本人は世界のことを十分知らないため、戦争を始め、戦争に負けました。すべての戦争はそれが原因です。米国は世界から人々が集まり、立派な国家社会を造りました。米語という世界語を語る米国は、最も世界を知り得る国家ですが、その過信があります。ソ連は広大で多くの人種と言語があります。それ自体一つの世界です。他の国を知らなくてもいいほど大きい。しかしそれも危ない。

お互いによく知り合うことが、平和への道であります。核兵器はいりません。抑止力もありません。今度の世界平和連帯都市市長会議で、このような市民の代表、つまり国益代表ではなく真の市民の代表会議が広島・長崎で開かれることは、平和のための門であります。狭き門でなく、広き門でなければと願っています。

コーディネーター(永井道雄)

最後に、広島平和文化センターの高橋さんをお願いします。

高橋さんは、14歳の時、爆心地から1.4キロメートルの地点で被爆されました。高橋さんは1980年にアメリカの上院議員会館で被爆体験について述べられました。また、1983年にはジュネーブのヨーロッパ国連本部で開催された「現代核の脅威展」にご出席になり、被爆体験について述べられております。広島においては、若い人たちへの被爆体験の継承のため、お体が弱いのですが、語り部として頑張っておられます。

## 基調報告一

### 広島の被爆実態

(財)広島平和文化センター事業部長

高橋 昭博

これから、私の被爆体験を中心に、一つのエピソードをご紹介しながら、被爆者としての訴えをさせていただきたいと存じます。

人間の能力の中で最も強いのが忘却力であると言われます。しかし、私は、“あの日”のできごとは、決して忘れることができません。たとえ思い出すのが苦しくても忘れてはならないと、自戒してきました。そして、“あの日”が、その後の私の人生の出発点である



と言いきかせて今日まで生きてきました。“あの日”の惨状は、まるできのこのことのように、次から次へと、脳裏によみがえってきます。

1945年8月6日午前8時15分、世界最初の原子爆弾は、広島上空でさく裂しました。あの魔の閃光と地軸をゆるがすごう音は広島を街を廃虚とし、市民を焼き尽くしました。

“あの日”、私は中学2年生、14歳でした。爆心地から半径1.4キロメートルの地点にいました。中学校の校庭で朝礼を受けるために、級友たちとともに整列しようとしていました。空襲警報、警戒警報とも解除されたあとでした。「整列！」と級長が号令をかけたその時、ものすごい音がして、あたり一面、真暗闇になりました。5分、いや10分くらいたったのでしょうか。ようやく煙が消え、校庭一帯が明るくなりました。私は10メートルくらい後方に吹き飛ばされていました。60名の級友たちも、みんなが後方あるいは左右に吹き飛ばされ、校庭のあちこちに倒れていました。校舎はぺっちゃんこ、付近の家々ありません。遠くの方の建物もわずかを残してすべてがなくなっていました。「広島がなくなった!」、一瞬、私はそう思いました。われにかえって自身の身体を見ました。制服はボロボロに焼かれていました。両手両足の皮膚がむけてボロボロのように垂れ下がり、表面は赤身がむき出しになっていました。背中が猛烈に熱く、ヒリヒリしてたまりませんでした。身体には数か所、ガラスの破片が突きささっていました。「とにかく、早く川へ逃げよう」と私は、一人で校庭から道路に出て、急ぎ足で川の方角へ向かいました。被爆した人たちが列をなし、ふらつきながらゾロゾロと足を引きずるように歩いて、こちらに向かってきていました。両手を前にだらりと下げて、衣服はボロボロ、裸同然の人もありました。その中には、上半身の皮膚がむけて赤身が出ている男性がいました。別の男性の上半身には、腹から背中にかけて無数のガラスの破片が

いっぱい突きささっていました。片方の眼球が飛び出した女性が全身血だらけになっていました。髪が逆毛になり、全身焼けただれた母親のそばで、全身の皮膚がむけている赤ん坊が泣きわめいていました。死体もいくつかころがっていましたが、その中には内臓が破裂して地面に出ているものもありました。まさに凄惨そのものでした。とても言葉では言い尽くせない生き地獄さながらの光景を目の当たりにしながら、私は、一生懸命、川の方へ逃げていきました。しかし、川岸へ通じる小路という小路がすべて、倒れた家屋の残骸によってふさがれ、通ることができません。私は、無我夢中で、その残骸の上を四つんばいにはってやっとの思いで川岸へ出ることができました。はい出たところに、運よく小さな木橋が不思議に残っていました。その橋を渡ろうとした瞬間、道路の両側にあった家屋の残骸から一斉に火の手があがりました。見る見るうちにあたり一面火の海になって行きました。4、5メートルの火柱が大きな音をたて天に向かって吹き上げて行きました。私は幸い、火災の外側に出ていました。逃げ足が一步遅かったら、火の海に巻き込まれ、焼け死んでいたに違いありません。「助かった!」その時、初めて涙が出て止まりませんでした。私は木橋を渡って向う岸へ行きました。川の中に3回つかったことを覚えております。川の冷たい水は、燃えるようにあつい私の身体にとって本当に宝のようでした。

私は川から上がって救護所へ行き、応急手当をしてもらい、しばらく休息していました。そこへ雨が降ってきました。初めて見る“黒い雨”でした。この世に“黒い雨”があるのだろうかと思議でなりません。雨が止むのを待って、自宅に向かってまた歩き始めました。途中で、法事帰りの大伯父、大伯母に偶然出会い、助けられて自宅に帰ることができました。帰宅後およそ3週間は失神状態が続きました。その後、自宅に往診にきてくれた医師によってやけどの治療を受けました。生死の境をさまよいながら、1年半の闘



病生活を続け、文字どおり九死に一生を得ました。

しかし、右手のひじと4本の指は曲がったままで固定して動かず、ケロイドも残っています。右手の人差し指には、今もなお、“黒い爪”が生え続けています。原爆資料館にその“黒い爪”が展示されているのをお気づきになった方もおありと存じます。また、被爆の後遺症と思われる肝臓障害にかかり、国の認定を受け、1971年から7度入院し、現在では慢性化して、なお通院加療中であります。肝臓障害のほかにも多くの病気をかかえており、神経科、皮膚泌尿科、耳鼻咽喉科、眼科にも通院しております。私は、1日1日が不安でなりません。病気がちな身体を引きづりながら「こんなに苦しみながら生きなくてはならないのだろうか」と絶望的になることもたびたびですが、「せっかく生き残ったのだから」と思いなおしては、今日まで生きてきました。

級友およそ60名のうち、50名が原爆の犠牲となり、無惨にも殺されました。現在まで私を含め10名の生存を確認しています。私はわずかな生き残りの一人であります。「級友たちの死を決して無駄にしてはならない。死んでいった者たちの声なき声を後世に伝えるのは、生き残った者の使命である。」—私は、このことを心に刻んで生きてきました。

今年は被爆40周年という節目の年に当たります。「この40年間、ほんとによく生きてきたなあ—」というのが、私の今の偽らざる実感であります。

広島は単なる過去の歴史的事実ではありません。人類の限りない未来への警鐘であり、戒めであります。戦争は人間が引き起こすものであり、自分自身の死につながるばかりでなく、愛する両親、兄弟姉妹、あるいは、学校の先生や友人たちの死にもつながります。なかんずく、核戦争には勝者も敗者もありません。そこに待っているのは、まぎれもなく人類の死滅であり、地球の終えんにはかなりません。

人類が核兵器を根絶しなければ、核兵器が人類を根絶してしまうに違いありません。核戦争は、人間の理性や理想に対する挑戦であります。人間の挑戦は、核兵器廃絶と平和のためにこそなされなければなりません。我々は、過去の憎しみを乗り越え、人種、国境の別なく連帯し、不信を信頼へ、憎悪を和解へ、分裂を融和へと、歴史の潮流を転換しなければなりません。

最近、長崎への原爆投下の引き金を引いた爆撃手が、広島・長崎へ謝罪に行きたいとの願いを持っているということをマスコミ報道で知りましたが、それに関連して、私は皆様に一つのエピソードをご紹介したいと思います。

ポール・W・チベッツ、彼は広島へ原爆を投下したB29エノラ・ゲイ号の機長の名前です。1980年6月、米国ワシントンD.C.の上院議員会館ラッセルビルで開かれた「ヒロシマ・ナガサキ原爆展」の説明役として私が渡米したとき、チベッツ氏と会いました。最初、彼は私と会うことにためらいを見せていたようですが、私は進んで会うことを承諾しました。原爆展会場の裏手にある公園の一角で、チベッツ氏は待っていました。初めて見るチベッツ氏は人品豊かな老紳士でした。私の方からケロイドの残る右手を差し出し、握手を求めました。彼は「これは原爆で……」と問いかけてきました。「そうです。」「私の答えに一瞬、その顔がひきつりました。私から、「いまさら、あなたに恨み、つらみを言うつもりはありません。」と切り出しました。さらに、「あなたは、命令のままに行動されたのでしょうかね。私たち被爆者は、戦争を起こした日本の指導者と、原爆投下を命令したアメリカの指導者に対し、正直言って、憎しみを抱いてきました。しかし、それは人間として乗り越えて行かなければならないと思います。憎しみで憎しみを消し去ることはできません。一切の憎しみ、苦しみ、悲しみを乗り越えてこそ真の平和が見いだせるのです。」と言いました。チベッ

ツ氏は「あなたの気持はよく分かります。」と、うなずいていました。そして、「あの日は、今日のワシントンの空のように晴れていましたね。」「そうです、澄みきった青空でした。あなたの乗ったB29を見ましたよ。」「被爆された時はいくつでしたか。」「中学2年生で14歳でした。」と、二人はこもごも語り会いました。最後に、私が「いまの核状況はボタン一つで破滅になります。だから被爆者は、核兵器の全廃を訴え続けているのです。」と言ったのに対し、チベッツ氏は、「万一、戦争が起こり命令があれば、私はまた同じことをやるでしょう。それが戦争の論理であり、軍人の論理というものです。だから、戦争は絶対に起こしてはならないのです。」と答えました。チベッツ氏の両手は、私のケロイドの残る右手を最後まで握って離しませんでした。チベッツ氏の目には、かすかに光るものがありました。そのあと、チベッツ氏に名刺の交換を求めたとき、重苦しさからようやく解放されたかのように、その顔がほころび、微笑さえたてていました。チベッツ氏もやはり人間でありました。

憎しみに憎しみを消し去ることはできません。憎しみを乗り越えてこそ、人間同士の思いやりと信頼が生まれるのであります。チベッツ氏とは、現在でも交流を続けております。

いま、「核戦争3分前」と言われております。これを、5分前、10分前に、いや、核戦争完全阻止に向かって時計の針を逆戻りさせなければなりません。一人の力は小さいものかもしれませんが、決して無力ではありません。一人が始めなければゼロであり、無であります。平和は都市に住む市民一人ひとりの努力の積み重ねによって実現するものだと思います。

平和は、人から与えられるものではありません。向うから歩いて平和がやってくるものでもありません。じっと坐って待っていたのでは平和はやってきません。平和は自らが創

造し、積極的に行動を起こして築き上げてゆくものであります。

私は、これからも生命のある限り、「被爆の体験とヒロシマの心」を国の内外に執ように訴え続けてまいります。どうか、皆様も都市の繁栄と市民の幸福のために、さらには、世界恒久平和確立のために、一層のご努力をお願いいたします。ご清聴を心から感謝申し上げます。

## 基調報告に対する質疑応答

コーディネーター（永井道雄）

これから質疑応答の時間に入りたいと思いますが、非常に沢山の参加者がおいでになります。会議の前に連絡した方が二人おいでになりますので、その方からご発言をいただきたいと思います。一人は、オーストリア、ザンクト・ウルリヒのシュタインマイヤーさん、もう一人はオーストラリア、アッシュフィールドのルイス・ハーマンさんです。シュタインマイヤーさんどうぞ。

ザンクト・ウルリヒ（オーストリア）村長  
タドオイス・シュタインマイヤー

私の印象を語りたいと思います。この恐ろしい原爆被爆の惨禍に対し、初めて得た印象は永く私の中に生き続けるでしょう。しかし、この悲劇は世界の多くの人々に全く理解されていないと思います。この会議が原爆被爆による被害の実態を広く知らす好機となることを希望します。私はこの会議参加を機会に母国において平和への取り組みにまい進することを心に誓います。

アッシュフィールド（オーストラリア）市長  
ルイス・ハーマン

私は、この場をお借りして広島市長殿のご功績を称賛すると共に、意見を述べる機会を

お与え下さったことに感謝の意を表したいと思います。私は、私の同僚—カンタベリー市長ケビン・J・モス氏とシドニー市長ダグラス・W・サザーランド氏—と共にオーストラリア労働党に所属しております。

日本に来ます前、私は新聞社から多数の質問表を受け取りました。

その質問表に答えるにあたって、私はまずオーストラリアの外務省に連絡を取りました。それに答えて外務大臣のビル・ハイデン氏は、一枚の書類を私に提示してくれたのですが、その内容は、核戦争が与える影響の重大性というこの会議とまさに同じ主題に関するものでした。それには、ハイデン氏がモスクワを訪れた時に述べたことが書いてありました。氏はこう述べています。「私はモスクワに平和を語るためにやって来ました。今や平和問題は地球上のあらゆる男性、女性そして子供の未来に深くかかわる問題となっています。」

今や、世界の指導者たちがこの問題に注目する必要があります。それほど火急の問題となっているのです。この核時代では、もはや平和と戦争のどちらかではなく、平和と絶滅のどちらかの次元の問題にまで発展しているのです。ですから、われわれは共に生存する方法を学ばなければなりません。そうしなければ、あとは共に死ぬ道しか残されていないのです。

このように考えるようになったのは、私が平和公園と資料館を訪れた時のことです。そこで見た40年前の恐ろしい原爆に見舞われた学童たちの写真は、私の中に様々な思いを呼び起こしました。40年前—そうです。私も一人の学童でした。

今年は、国際青年年であることをご存じのことと思います。

日本へ出発する前、私は地域の学校を訪れ子供たちと多くの時間を共に過ごしました。と申しますのも、多くの都市の市長たちが、今平和について話し合ったらどうという結果となるのかを知りたかったからなのです。

そして出発直前、私の手元に一通の手紙が届きました。その手紙をここで読み上げさせて頂きたいと思います。

これは、カトリック系のダイラフツァウド大学で最近開催された卒業晩餐会に出席した私に対して書かれたものです。「市長殿、この機会を利用して、晩餐会へのご出席、またその席上で学生、父兄、教師に賜りましたメッセージに心より御礼申し上げます。私は、市長殿がアッシュフィールドを代表して長崎と広島をご訪問になるということ、また両市民になりかわって私たちに伝えて下さった平和のメッセージに対して特に深い関心を抱きました。

市長殿のお言葉は、常に平和問題に関心のあったわれわれ800名の学生の間に大きな反響を呼び起こしました。

学生たちは、アッシュフィールド市長がこの会議に出席されるというメッセージを積極的に支持しています。われわれは平和運動に関与すべきであるという全員一致の決断が、自然に生まれていたというわけです。」

これはつまり、学生たちは、私が1985年にこの会議に出席するということは非常に意義深いと言っているのです。その他にも多数の方々が、私の訪日を支持してくれました。

例えば、地域のカトリック司祭から私宛に送られてきた手紙もあります。この中で彼は、「世界中の若者が平和のために祈るなら、これは平和を要求する声となるはずです。」と述べています。

最後に、われわれ全員は今から、世界に永続的な平和を確立するために共に働くべきであると申し上げて、私の演説を終えさせていただきます。

コーディネーター（永井道雄）

ただ今のメッセージは皆さんも非常に感銘されたと思います。今少し時間がありますので、もう1人あるいは2人ご発言いただきたいと思います。どなたでも発言の自由がありますから、手を上げて自己紹介して下さい。

バンクーバー（カナダ）市長  
マイケル・F・ハーコート

私はマイケル・F・ハーコートと申しまして、カナダのバンクーバー市長です。私は今日ここに出席させていただいておりますこと、そして今朝8時15分にバンクーバー市民の児童たちが折りました折り鶴を、ここ広島の子供の皆さんにプレゼント出来ましたことを非常に誇りに思います。

私は1963年、まだ学生だった頃に平和資料館を訪れた経験があります。当時も、今日の私と同じように、痛ましい過去にこの手で触れたような感慨におそわれました。そこで広島、長崎両市長にお願いがあります。私どもバンクーバー市は市政を敷いて一世紀を迎えますが、来年の100周年を画して平和祭の企画準備を進めております。その平和祭で広島と長崎の平和への願いを発表していただくと同時に、原爆の惨事の体験を語ることの出来る人をいく人か派遣することを検討していただけないでしょうか。

私どもは、平和祭が始まって以来、世界中から多数の人々をご招待しました。

当市では、自分たちの市のことを「カナダの平和首都」と呼んでおり、毎年4月には平和のために働いてきました。毎年10万人以上、延べ100万人の市民が平和のために働いたという計算になります。ですからここで、両市長に、1986年4月にバンクーバーで開催される平和祭で平和を訴えることが可能かどうかをご検討頂きたいのです。

北アメリカ、コロラドの人々は広島、長崎、ヨーロッパ各地の人々のように破壊に苦しんだ経験がありませんので、北アメリカのコロラドでもこの種の平和への訴えをすることは非常に有益だと思います。

コーディネーター（永井道雄）

ただ今のご発言は、北米では長崎や広島のような原爆の被爆体験がないので、バンクーバーの平和祭に是非、人を送ってほしいとい

うことであると思います。長崎の市長さん、このことについてご発言されますか？

本島長崎市長

今のお話しについては、広島市長と十分連絡し、相談しながら、できるだけ行けるよう努力したいと思います。

コーディネーター（永井道雄）

バンクーバーの市長さん、今の問題については、ポジティブなリスponsがあるということでご了解いただければと思います。

この会議をやっていく間に、今のような具体的な提案があると思います。この席で決められることもあります。決められないこともありますので、ご滞在の間に長崎や広島の子役所とお話しになり、決めていただきたいと思います。

ほかにご発言の方がおられますか？ それでは、朝早くから長い一日でしたが、ここで終えたいと思います。皆さんの大変な協力によって順調に進みましたことを心から感謝いたします。

どうもありがとうございました。

司会（山田広島市市長室次長）

これより、会場を替えまして引き続き被爆者との懇談会を16時45分から行いますので、16時35分までには各会場にお集り下さるようお願いいたします。

## 被爆者との懇談出席者リスト（国外）Ⅰ

日時：昭和60年8月5日 16：45～17：45

場所：広島グランドホテル8階もみじの間

### オーストラリア

アッシュフィールド

ルイス・ハーマン、市長

カンタベリー

ケビン・J. モス、市長

〔金田郁子〕

### リスマア

ロバート・W. スキューリン、市長

バイロン・C. スティーブンス、行政長官

### プレストン

アラン・L. P. ホーガン、市長

〔沼田鈴子〕

### サンシャイン

イアン・M. ミル、市長

### シドニー

ダグラス・W. サザーランド、市長

〔山崎寛治〕

### ウォーロンゴン

ビル・モーブレイ、助役

ロバート・グレイ、行政長官

〔木村千代子〕

### カナダ

#### オタワ

マリオン・デュアー、市長

ベラ・パンタローン、秘書

#### バンクーバー

マイケル・F・ハーコート、市長

〔枝松さみ子〕

### テラス

ジョージ・クラーク、区議会議員

フレッド・マクドナルド、区議会議員

### アメリカ

フィラデルフィア

ウィリアム・M. エヴァン、市長代理

〔岩本節子〕

### ヨルダン

アンマン

I. アーマウティ、助役

〔森本範雄〕

### オランダ

アムステルダム

ティネケ・ヴァン・デン・クリンケンベルク、

助役

マルティン・ディメール、市長室副室長

アルンヘム

G. J. ボルデルマン、市議会議員

〔九十歩克三〕

### ミデルブルフ

M. ビンケ、助役

ファンデル・スロート

### ロッテルダム

ヘンク・ファンデルボルス、助役

〔一ツ子庫夫〕

### スリランカ

ヌワラエリア

エドモンド・S. ラジャパクセ、市長

デイヴィッド・バラスリヤ、市議会議員

〔小倉 醇〕

### シリア

ダマスカス

ヒシャーム・シャムート、副市長

サメール・アルダウィーディ、随行者

クネイトラ

ハッサン・アルサッカ, 市長  
ムハマッド・ケイールファイエスエイド,  
随行者

[望月久良寿]

イギリス

コベントリー

ウィリアム・マッケナナン, 市長  
ジョン・F. ワッツ, 随行者

エジンバラ

ジョン・H. マッケイ, 市長  
ウィリアム・レイ, 報道官  
[豊永恵三郎]

グラスゴー

ロバート・グレイ, 市長

マンチェスター

ローナ・グラハム, 市議会議員  
アンナ・ウィルキンス, 随行者  
[豊永艶子]

ニューポート

シリル・サマーズ, 市長

ランベス

ロイド・レオン, 区長  
[朱 碩]

アメリカ

カーメル・バイ・ザ・シー

シャーロット・タウンゼント, 市長

ヒロ

ダンテ・K. カーペンター, 市長  
オラン・カーペンター  
[原 広司]

アーバイン

ラリー・A. アグラン, 市議会議員

マリーナ

ロバート・T. オウエ, 市議会議員  
[池田精子]

パロ・アルト

マイケル・H・シューマン, 市長代理  
ジュリアス・マーゴリス, 随行者  
ドリス・マーゴリス, 同夫人

サクラメント

アン・ルーディン, 市長  
バーバラ・ウェイドナー, 随行者  
[山岡ミチコ]

サラトガ

バージニア・L. ファネリー, 市長

タコマパーク

サム・アボット, 市長  
[阿部静子]

ベトナム

ホーチミン

グエン・ボー・ヤン, 副主席  
グエン・チョン・チュン, 随行者  
チャン・ヴァン・タオ, 随行者  
[横田静子]

イエメン・アラブ共和国

サヌア

エヒヤ・アリ・アルエリヤーニ, 助役  
ファウド・アルユータイ, 随行者  
アブド・エルカリーム・アルゴビーニ,  
随行者  
ハッサン・H. アルゴバニイ, 随行者  
[藤重忠子]  
[松長静子]

ザンビア

ルサカ

M. C. サタ, 市長  
N. J. マバラ, 行政長官  
H. ダカ, 市議会議員  
[植田晴枝]

都市数; 11カ国36都市

ボランティア通訳; 37人

ボランティア語り部; 22人

[ ] 内は語り部氏名



## 被爆者との懇談出席者リスト（国外）Ⅱ

日時：昭和60年8月5日 16:45～17:45

場所：広島グランドホテル1階ローズ

### ドイツ民主共和国

#### ドレスデン

ゲルハルト・シル，市長

#### マグデブルク

ヴェルナー・ヘルツィヒ，市長

〔柳川藤江〕

#### ベルリン

エアハルト・クラック，市長

ゲオルク・ゾマー，アドバイザー

ベルンハルト・ケーヒャー，アドバイザー

〔平川林木〕

### ドイツ連邦共和国

#### フランクフルト

ハンス・ユルゲン・モーク，副市長

#### ハノーバー

ヘルベルト・シュマルステーク，市長

カール・エルンスト・ブンゲンシュタープ，

文化体育担当

〔下原隆資〕

#### レムゴー

ラインハルト・ヴィルムブーセ，市長

ウォルフガング・ファビアン，副市長

ヘルムート・ホレンダー，地方連盟長官

### オーストリア

#### ザンクト・ウルリヒ

タドオイス・シュタインマイヤー，村長

〔島田四郎〕

### ベルギー

#### アントワープ

G. デコルテ，市議会議員

〔久保浦寛人〕

### フランス

#### オバーニュ

ダニエル・フォンテーヌ，市長第1補佐

ミホ・シボ・シンマ，随行者

#### ヴェルダン

ジャック・バラードュボン，市長

ジャクリーヌ・アントワヌ，産業担当官

〔吉田康江〕

### スイス

#### ジュネーブ

ロジャー・ダフロン，助役

〔増本貴美子〕

### イタリア

#### カンベジネ

ピエランジェロ・オルランディーニ，市長

#### カッシーノ

ヴィンジェンゾ・マッティ，市長

アントニオ・フェラーロ，随行者

ジュゼッペ・カレーロ，随行者

〔加藤礼子〕

### コモ

ビアンキ・クルディオ，市議会議員

ノセダ・ミノ，市議会議員

ブツツイ・ジナステファノ，市議会議員

#### レッジョ・エミーリア

ジョルダノ・ガスパリーニ，市議会議員

〔加藤英雄〕

### マルザボット

ダンテ・クルイッチ，町長

#### ピストイア

ルチアーノ・バリーニ，市長代理

〔桑原千代子〕

セストサンジョバンニ

リアggi・リベラート, 市長  
ロカーティ・アンブロジー, 随行者  
トリノ  
ジュゼッペ・ロディ, 助役  
〔川相広子〕

ソ 連

ボルゴグラード  
ウラジミール・イワノビッチ・アトポフ,  
市長  
ニコライ・グリゴリエビッチ・シドロフ,  
随行者  
ニコライ・イワノビッチ・ロクティオノフ,  
随行者  
〔土井久男〕

ビリニュス

カジス・V. カシオナス, 第1副議長  
キエフ  
エフゲーニ・ヤシンスキー, 副市長  
アナトーリ・グリツェンコ, 随行者  
アレクセイ・ペイシ, 随行者  
タカシ・ヤスイ, 随行者  
カズヨシ・フジタ, 通訳  
〔片山文枝〕

中 国

杭 州

ジョン・ボウシ (鐘 伯熙), 市長  
ワン・ジンシ, 通訳

重 慶

シャオ・ヤン (肖秧), 市長  
ジャン・ドンフィ, 随行者  
ウェイ・シフェン, 通訳  
〔米田美津子〕

福 州

ホン・ヨンシ (洪 永世), 市長  
ゴウ・バイイン, 国際友好協会副会長  
ファン・ショウデイン, 通訳

成 都

フー・マオジョン (胡 懋洲), 市長  
カイ・ビン, 随行者  
リュ・ジャンゴウ, 通訳  
〔宮田幸子〕

大 連

ウェイ・フーハイ (魏 富海), 市長  
トン・キンリャン, 随行者  
シャオ・ヨンユー, 通訳

北 京

スン・フーリン (孫 孚凌), 副市長  
ガン・ユー, 随行者  
シー・チュアン, 随行者  
〔片岡チヨ子〕

メキシコ

アカプルコ

アルフォンソ・アルグデイン・アルカラス,  
市長  
〔小松キクエ〕

スペイン

ゲルニカ

ファン・L. Z. アロナテギ, 市長  
イグナシオ・M. E. モンテベリア, 随行者  
〔上田正紀〕

都市数;

11カ国30都市

ボランティア通訳; 30人

ボランティア語り部; 18人

〔 〕内は語り部氏名

## 被爆者との懇談出席者リスト（国内）

日時：昭和60年 8 月 5 日 16：45～17：45

場所：広島グランドホテル 2 階 菊の間

|                                            |                                             |                                                    |
|--------------------------------------------|---------------------------------------------|----------------------------------------------------|
| 広島県<br>竹下 虎之助, 県知事<br>稲田 聖三, 秘書係長          | 甲府市<br>原 忠三, 市長<br>林 正孝, 秘書係長               | 藤沢市<br>葉山 峻, 市長<br>三橋 鞠夫, 渉外担当主幹                   |
| 川崎市<br>伊藤 三郎, 市長<br>秋山 正一, 市民局長            | 沖縄市<br>桑江 朝幸, 市長<br>高良 武, 総務部長              | 町田市<br>高山 譲二, 企画部長                                 |
| 横浜市<br>斎田 倉作, 総務局長<br>渡辺 昭男, 庶務係長          | 那覇市<br>親泊 康晴, 市長<br>並里 利彦, 秘書課長             | 高松市<br>脇 信男, 市長<br>井 竿辰夫, 市長公室次長                   |
| 名古屋市<br>河野 昂, 総務局長<br>豊島 行宏, 国際課主事         | 中野区<br>青山 良道, 区長<br>熊崎 俊孝, 企画部長             | 高知市<br>横山 龍雄, 市長<br>森田 昌雄, 市長公室長<br>(煙石二三枝)        |
| 京都市<br>東 和男, 総務局長<br>(山根力男)                | 大田区<br>天野 幸一, 区長<br>鳥羽 義博, 総務課長<br>(松重美人)   | 呉市<br>佐々木 有, 市長                                    |
| 大阪市<br>土崎 敏夫, 行政部長<br>中村 俊之, 総務課主査         | 練馬区<br>田畑 健介, 区長<br>村山 敏樹, 区長秘書             | 府中市<br>浦上 秀男, 市長<br>田口 忠司, 市長公室主事                  |
| 神戸市<br>安好 匠, 収入役<br>小林 意司, 会計室主幹           | 板橋区<br>栗原 敬三, 区長<br>木下 茂, 総務課長              | 三原市<br>土居 山義, 市長                                   |
| 三鷹市<br>坂本 貞雄, 市長<br>井口 三男, 市長室長            | 松山市<br>中村 時雄, 市長<br>井伊 澄夫, 秘書係長             | 府中町<br>山田 機平, 町長<br>慶徳 慶秋, 総務部長                    |
| 西宮市<br>八木 米次, 市長<br>田村 光弘, 市長室長            | 八王子市<br>波多野 重雄, 市長<br>関根 章治, 秘書課長           | 大野町<br>谷口 恒人, 町長<br>(小松清興)                         |
| 津島市<br>井桁 克, 市長<br>加藤 一郎, 企画管理室長<br>(寺前妙子) | 枚方市<br>北牧 一雄, 市長<br>畑中 光昭, 秘書課長補佐<br>(笹村弘志) | 懇談会出席者数<br>都市数：29都市<br>ボランティア語り部：6人<br>( ) 内は語り部氏名 |

## —核軍縮へ都市は何をなし得るか—

### 都市報告

8月6日(午後1時～2時30分)

広島グランドホテル(孔雀の間)

司会 広島市市長室次長

山田 康

コーディネーター 国連大学学長特別顧問 永井 道雄

#### 1. 各都市の報告

- 都市報告1 ベルリン(ドイツ民主共和国)市長  
エアハルト・クラック……………69
- 都市報告2 カッシーノ(イタリア)市長  
ヴィンジェンゾ・マッティ……………70
- 都市報告3 グラスゴー(イギリス)市長  
ロバート・グレイ……………71
- 都市報告4 杭州(中国)市長  
ジョン・ボウシ(鍾 伯熙)……………72
- 都市報告5 川崎市長  
伊藤 三郎……………74
- 都市報告6 スワラエリア(スリランカ)市長  
エドムンド・S. ラジャパクセ……………75
- 都市報告7 サクラメント(アメリカ)市長  
アン・ルーデイン……………76
- 都市報告8 バンクーバー(カナダ)市長  
マイケル・F. ハーコート……………77
- 都市報告9 ヴェルダン(フランス)市長  
ジャック・バラ-デュボン……………78
- 都市報告10 ボルゴグラード(ソ連)市長  
ウラジミール・イワノビッチ・アトポフ……………79

#### 2. 都市報告に対する質疑応答

ルサカ(ザンビア)市長

M. C. サタ……………81

|                                      |    |
|--------------------------------------|----|
| アーバイン(アメリカ)市議会議員<br>ラリー・A. アグラン..... | 82 |
| マルザボット(イタリア)町長<br>ダンテ・クルイッチ.....     | 83 |
| クネイトラ(シリア)市長<br>ハッサン・アルサッカ.....      | 84 |

司会（山田広島市長室次長）

ただ今より第2日目の全体会議Ⅱを開催いたします。

テーマは「核軍縮へ都市は何をなし得るか」でございます。昨日に引き続き永井道雄先生にコーディネーターをお願いいたします。

コーディネーター（永井道雄）

早速会議に入りますが、これから多くの都市が平和の推進について取り組んでおられる現在の状況、今後の方針についてご発言を願うわけです。

しかし、時間の関係でここに来られている全ての都市にお願いすることができませんので、発表していただくのは10都市とし、既に連絡をいたしております。まず舞台に向かって左側からドイツ民主共和国、ベルリン市のエアハルト・クラック市長、イタリア、カッシーノ市のヴィンジェンゾ・マッティ市長、イギリス、グラスゴー市のロバート・グレイ市長、中国、杭州市のジョン・ボウシ（鍾伯熙）市長、日本、川崎市の伊藤三郎市長、スリランカ、ヌワラエリア市のエドムンド・S・ラジャパクセ市長、アメリカ、カリフォルニア、サクラメント市のアン・ルーディン市長、カナダ、バンクーバー市のマイケル・F・ハーコート市長、フランス、ヴェルダン市のジャック・バラ・デュボン市長、ソ連、ボルゴグラード市のウラジミール・イワノビッチ・アトボフ市長、以上紹介しました方々には、都市のアルファベット順でお願いいたします。それぞれ3分間でお話し下さい。

ベルリン市のエアハルト・クラック市長からどうぞ。

## 都市報告 1

ベルリン(ドイツ民主共和国)市長  
エアハルト・クラック

私はドイツ民主共和国の首都ベルリンの市長として、皆様のご多幸を希望しますととも

に、ベルリン市からの親しみを込めたごあいさつをお伝えいたします。また、事務局の方々にも感謝の意を表します。

私どもは広島・長崎の原爆犠牲者の方々に対し、深く哀悼の意を表します。被爆者の方々は警告者であり、また平和な将来を創る義務をわれわれに課す人でもあります。

今世紀、ベルリンでは2回も戦争のトーチに火がつけられ、世界の国々を大きな不幸に陥れました。私は、ベルリンの人々が、破壊された家の廃虚に「戦争はもう二度といやだ」と何度となく刻んだ誓いが真実であることを皆様に断言するため、ここにやっけてまいりました。

核兵器の増強や、世界を脅かす危険な緊張の環境下であって、社会主義社会における地方官庁の仕事に携わっている私どもは、平和を最高の人権と考えており、より一層の平和を切望し要求しております。平和を維持すれば、人々は創造的潜在力を発揮できるし、私どもの都市の繁栄は確実なものになります。

私どもドイツ民主共和国の住民が選んだ政府は、軍縮への効果的な手段を一致して追求しています。私どもは、軍備競争を宇宙空間にまで広げようとする西側の試みには共同して反対しています。私どもは、軍備競争が終わり、核兵器が全て無くなる日を望んでおります。私どもは米ソ間で新しい話し合いが持たれ、好結果が得られることを期待しております。

皆さん、州・市・町あるいは村の住民を守る立場にあるわれわれは、軍拡や軍事対決に力が注がれないことを訴えるこの会議の趣旨に、共に賛同しているのです。私はこのことを認識して、4大陸および50カ国以上もの仲間に対し、議会とともに具体的な軍縮手段に賛成し、核の脅威に対し、立ち上がるようアピールしたいのです。

私どもは世界の39もの首都と団結し、地元の政治家との間で協力および連帯を促進しています。相互に情報を交換したり、写真展を開催し合うことにより、平和を推進するため



には共同の努力が必要であることを悟るばかりでなく、相互理解や相互信頼が増します。

先般、日本人の主催者によってベルリンの都心部で開催された「広島と長崎—警告と義務」と題する深く感動的な写真展には何万人もの市民が詰めかけました。私どものベルリンは東西からの人々の接触場所であり、外国から毎年350万ないし400万、つまり市の人口の大よそ3倍もの人々を歓迎しているのです。昨年、ベルリンでは、世界中から来られた議員、科学者、医者、芸術家、競技者、また地元の政治家などが474ものシンポジウムや会議で会い、国際理解を深め、国際平和に貢献しました。

ベルリン市民もまた、多様な方法で平和運動を行っています。

今年、70万人以上のベルリン市民が2つのデモンストレーションに参加し、地球上から核軍備競争をなくし、宇宙の軍事化を防止するよう要求しました。

私どもは、平和や人類愛について国際理解の精神のもとで青年層を育成することに主眼を置いており、学校のカリキュラムや広い範囲の公的活動の分野で実践されております。彼ら青年たちは青い地球を守るため広範囲な平和運動に参加し、ますます活発に活動しています。

ベルリン市議会は、このような誠実さや立派な意思をもって、世界的な軍縮や緊張緩和のために努力している人々と、信頼し合いまた積極的なパートナーであると断言します。

本日、8月6日午後4時に広島・長崎原爆被爆40周年を記念して、ベルリン市で集会が開かれることになっており、あらゆる分野のベルリン市民が参加することでしょう。

私は、ドイツ民主共和国の首都の市長として、新たな戦争がこのベルリンから起こらないよう努力を惜しまないことをここに宣言いたします。わが国政府も同様に今後世界規模で連帯し、この会議の目的を実現するために最善を尽すことでありましょう。

## 都市報告 2

カッシーノ(イタリア)市長  
ヴィンジェンゾ・マッティ

私は、今年の4月18日と19日の両日ボローニャで開かれました、戦争受難都市世界会議で採択されたアピールの原則は、現在でも有効だということを強調したいと思います。

この会議は、平和的文化と生活水準の向上をもたらすために開かれました。これらの目標は、核兵器に対して道徳と倫理の側面からの圧力をかけることによって達成することが出来ます。

このアピールは、すでにヘルシンキで合意され、国連憲章に組み入れられました。

どの国の国民も、軍備が拡張される中で、常に重い負担を強いられているに違いありません。ですから、世界中の地方自治体もやはり、世界平和推進のために共に働かなければならないのです。

同時に、各都市が参加する会議の存在をますます世界に広めて、全世界の国民同士の友情と連帯を推進出来るようにすることも必要です。

さらに、全世界市民連盟全体が持つ関心を明確に表明しなければなりません。

特に、戦争の犠牲となった都市には、全世界の都市が関与することの出来る国際的組織と軍縮キャンペーンを推進して、平和政策をバックアップする責任があります。

分かりやすく言いますと、平和という大目的のために世界の全勢力を結集する必要があるということなのです。

そして世界中の都市だけが、世界平和のためのこのような建設的な運動を推進することが出来るのです。

政党が、政策が何であれ、所属している政党の方向がどうであれ、われわれは個々の市民に世界平和を求めるさらに具体的な願いを表明させる必要があります。

人々の道徳・倫理面からの圧力と努力に

よって、世界中の政府の取る方向が変わり、核保有国が完全軍備撤廃をする日が近付くことを認識しなければなりません。

これらの目標を達成するためには、われわれの活動範囲を拡大する必要があります。また同時に、それぞれの市民が会合の場を作らなければなりません。

また、それぞれの都市の間で、一つの都市が別の都市における平和政策の推進に協力するという協定のようなものを取りかわすことにも賛成です。

私は、このような世界平和の推進の努力を着実に積み重ねていけば、遂にはそれぞれの中央政府の政策に影響を与えることが出来るようになると思っております。

私は列席者の皆様方に、イタリアの「戦争の破壊と戦争の愚かしさを象徴する町」カッシーノからのごあいさつと祈りの言葉をお届け出来ることをうれしく思います。

## 都市報告 3

グラスゴー(イギリス)市長

ロバート・グレイ

皆様、私の名前はロバート・グレイと申します。私は、スコットランド最大の80万人近い人口を持つグラスゴー市の市長を務めております。

私は、この場をお借りしてグラスゴー市民が核兵器製造とそれに伴う核戦争の脅威がますますエスカレートして、平和と進歩を脅かしていることに深い憂いを抱き、日々不安を募らせていることをお伝えしたいと思います。

核戦争の脅威が徐々に人類に忍び寄って来ている現在、全世界の人々が非核武装地帯の数を増やし、軍備に費やされる支出を削減して資源を平和目的に向けさせるために、行動を起こさねばなりません。

そのためには、各都市が意見の相違を解決する手段として核兵器を使用することに対し絶対反対を宣言すると共に、核兵器廃絶を支持しない国々に自らの過ちに気付かせるために、核兵器の存在そのものが全人類に重大な脅威を与えているという見解を表明する必要があります。

私は、今日この席上で、「核軍縮推進のために都市が出来ることは何か」という質問に対する私の意見を述べるよう求められました。

この質問に対する答えは、世界中の都市が置かれているそれぞれの実状に応じて様々に変形して適用される内容となるでしょう。

グレートブリテン島は、1980年代に非核武装地帯運動の誕生を見ました。これは、マンチェスター市から始まった運動で、現在ではイギリス150の自治体に波及しています。

グラスゴー市は、以下の決議案を採択して1981年5月21日に非核武装地帯になることを希望することを宣言しました。すなわち「本市議会は、核兵器による危機を憂慮し、政府が当市の境界内において、いかなる種類の核兵器をも製造せずかつ設置しないよう訴える。

近代核兵器の破壊力を考慮すれば、われわれの提案それ自体にいかほどの意味も認められないことを、われわれは承知している。

従ってわれわれは、スコットランド西部の近隣の当局およびグレートブリテン島全土の全自治体に対し、自らが代表する市民になりかわって同様の声明を出されるよう直接に訴える。

われわれは、核による大虐殺の先導者となること、その誘因となることのいずれも市民の利益にはならないと信じている。

またわれわれは、この断固たる声明が、われわれが代表する市民の圧倒的な願いを明快に示すであろうことを、そしてまたヨーロッパに非核武装地帯を誕生させ発展させる下地となり得るであろうことを固く信じている。

市議会は、その全職員が、将来万が一核戦

争に至った場合に民間防衛となるいかなる行為にも参画しないよう指示する」というものです。

この宣言の後、市議会は政策の調整および様々な方法による市の平和への願いの推進・広報活動（別紙「グラスゴーは何を行ったか」を参照のこと）を行う委員会を任命しました。

非核武装地帯運動にかかわる議会はすべて、先に述べたのと同様の措置を取るよう求められてきました。というのも、われわれの共通の目的を広めること、そして各市の市民を教育することにこそ、われわれの子供たち、孫たちに核戦争の恐怖とは無縁の時代を与えるという望みを託することが出来るからです。

最後に、私はこの機会をお借りして、この会議を開催し、核兵器廃絶に向けて世界各地の都市間を連帯させるという壮大な計画の推進に当たってイニシアチブを取られた広島・長崎両都市の皆様に心よりの賛辞を捧げたいと思います。

本日は、8月6日でありますが、イギリス現地時間午後7時30分に、わが市においては、大デモンストレーションが行われることになっております。

グラスゴー市の教会関係者、政党などあらゆる領域の多くの人々が広島被爆40周年を記念し、また40年前の広島における原爆投下による死者を追悼するために、このデモンストレーションに参加することでしょう。

て、大会で発言する機会にめぐまれたことを大変光栄に思っております。ここで私は北京市、重慶市、成都市、大連市、福州市、杭州市の六都市の市長と市民の名において、いろいろな便宜をはかって下さった広島市、長崎市の市長と友人の皆さんに衷心より感謝の意を表するとともに、大会を通じて原爆の被害を蒙った広島、長崎市民に心から慰問の意を表します。

友人の皆さん、われわれが美しい日本の国土に第一歩を印したときから日本人民の心のこもったご歓迎と丁寧なおもてなしをいただき、感激で胸がいっぱいです。われわれは戦争の廃きよのうえに新しく生まれ変わった広島、長崎の両市と戦後40年日本人民が都市の建設と発展の面でおさめた目を見張る成果を目の当たりにして、世界平和が都市の発展と繁栄にとっていかに重要であるかについて認識を新たにしているところであります。今日、ここに多くの都市の市長が一堂に会し、ともに核戦争に反対し、世界平和を擁護する問題を討論することは深遠なる歴史的意義と現実的な意義をもつ大きな出来事であります。この会議に参加した中国の六都市の市長は友好のため、平和のためにまいりました。われわれは誠意をもって代表の皆様と協力しあい、会議の成功のために最善を尽したいと思っております。

全世界人民は核兵器問題に非常に関心を寄せています。なぜならば、40年前の今日、この地で大きな不幸が起こり、そして40年後の今日核戦争の危険が依然として存在し、人々に不安を抱かせているからであります。二つの超大国は全世界において激しい争奪を行い、核軍備競争に拍車をかけているため、世界はいちだんと激動し、不安にさらされています。かれらは引き続き軍費を増加し、軍備競争のテンポを早やめ、陸地、海洋、大空から宇宙にまで争奪を拡大し、人類に新たな脅威をもたらしています。われわれは平和を愛するあらゆる国々と人民と同じように非常に憂慮しています。平和を主張するすべての国

## 都市報告 4

杭州（中国）市長  
ジョン・ボウシ（鍾 伯熙）

私は杭州市長としてこのたびの会議に参加し、そして中国の重慶市、成都市、大連市、福州市の市長並びに北京市の副市長を代表し

と人民が連帯を強め、国際の緊張情勢の緩和のために、二つの超大国の軍備競争による優位争奪の企みを放棄させるよう、ここにおごそかにアピールする次第です。両超大国が実際行動でもって軍縮に対する誠意を示し、確実にその特殊な責任を負い、真剣に話し合い、他国の利益を侵すことなく、世界平和に寄与する結果を引き出すよう切に望むものであります。

核脅威を取り除き、核戦争を阻止する根本的な道は核兵器の全面禁止と完全廃棄であると思います。もちろんこの目標を実現するには長い過程を経なければならず、決して一挙に成就するものではありません。したがって、この目標を実現させるための現実的な段取りとして、二つの超大国が率先して核兵器の実験、改善と生産を停止し、核軍備の保有を大幅に削減すべきであり、その後、他の核保有国も相応の措置をとるべきだと思います。

核兵器問題に関する中国政府の原則と立場は一貫してはっきりしています。中国は少量の核兵器をもっていますが、中国政府は1964年から一再ならず中国はいつ、いかなる情況のもとでも、最初に核兵器を使用しないと宣言し、非核保有国と非核保有地域に決して核兵器を使用しないと保証しています。中国は一貫して核軍縮を主張し、軍備競争に反対し、それにも参加しません。わが国政府のこのような原則と立場は10億中国人民の誠実な願いを反映しており、われわれは心からこれを擁護しております。事実、わが国の政府はこのように言い、このように実行しています。

平和問題は今度の会議の主なテーマであります。すべての発展途上国と都市と同様に、わが国、わが国の都市も平和と発展という二つの根本的問題に直面しています。平和と発展は一体に溶け合い、相互補完の関係にあります。発展は平和を必要とし、平和は発展を促進します。われわれは平和的な国際環境が都市の発展、国の繁栄、世界の進歩に有利であると考えます。今、中国人民は全力をあげて社会主義現代化の建設を進めており、長期

の平和的な国際環境を必要としています。われわれは戦争を望まず、少なくとも今世紀までに戦争がないよう望んでいるのです。もちろん永遠に戦争が起こらないのが一番望ましい。『安じて壮士を得て銀河を挽く、甲兵を洗淨して長く用いず』。われわれは全世界の人民が永遠に平和の中で暮らし、地域、人種、イデオロギー、社会制度の違いを問わず子子孫孫仲良くつきあって行くよう衷心より希望するのであります。

今日、世界戦争の危険は依然として存在しています。しかし戦争を制約する力もたえず発展しています。特に喜ぶべきことは世界人口の4分の3を占め、独立国の7割以上を占める第三世界が国際舞台でますます大きな役割を果たすようになり、世界平和を守り、歴史を推し進める強大な原動力になっているということです。中国は第三世界に属し、中国の発展と進歩は必ず世界平和と安定に大きな力となるでしょう。最近、中国政府は軍隊を100万人減員すると発表しました。これは中国が実際の行動をもって世界平和擁護に対する真心とゆるぎない確信を表しています。来年は国際平和年です。今年の春、わが国はすでに国際平和年中国組織委員会を発足させ、いろいろな行事が計画されています。今年6月、わが国の各民間団体の発起によって『中国人民平和軍縮協会』が成立しました。北京では世界平和擁護をテーマとする国際フォーラムが開かれました。これらのことは中国人民が全世界の平和勢力とともに、世界平和を擁護し、世界戦争、特に核戦争に反対するため奮闘する決意を表わしたものであります。言うまでもなく、世界戦争に反対し、世界平和を擁護することは長期にわたる任務であり、また一つの国だけにたよってできるのではなく、全世界の人民並びに平和を愛するあらゆる国が連帯をつよめ、ともに努力しなければならないと思います。

戦争に反対し、平和をまもる事業において、都市は無視できない重要な役割をもっています。都市はある地域内の政治、経済、文化の

中心であり、国際社会の力として世界の平和と安定に影響を及ぼさないはずがないと思います。

皆さんもご承知のように、百年このかた、中国人民は内憂外患、戦火連綿の苦しみをなめつくし、都市は真先に災難をこうむりました。新中国の成立によって、戦乱がやっとおさまり、わが国の都市と人民は平穏に生活できるようになりました。われわれは、この平和な環境は容易に得られたものではないことを深く肝に銘じ、自分の目を愛するように大切にしてきました。今日、世界にはまだ不安定な要素があり、それを取り除き、世界平和を擁護することがわれわれの神聖な責務と見なし、そのためにたゆまぬ努力を続けてまいりました。去年、われわれは広島市から提供された原爆の被爆実情の写真を重慶、杭州などの都市で特別展示会を行い、われわれの人民、特に青少年は核戦争の危害と平和の重要性を認識し、40年前の広島、長崎で起きた悲劇から教訓を汲みとり、永遠にこのような悲劇を二度とくり返させてはならないと誓いを新たにしました。今後、われわれはいままでどおり引き続き努力し、特に今度の会議の精神を人民に広く伝え、会議の成果が積極的な役割を果たすよう努力したいと思います。

広島、長崎および日本人民が核戦争に反対し、世界平和を守る事業の中で多大なご努力をなされていること、ご在席の世界各地からの友人の皆様方もこの面で有益な貢献をなさっていることを目の当たりにしてうれしく存じます。これらに対し、また平和事業に熱意を傾けて活躍されている新しい友人と古くからの友人に衷心より敬意を表する次第です。私の講演を終わらせていただく前に、このたびの会議の主催国の皆様方に重ねてあつくお礼を申し上げると同時に崇高なる敬意を表すものであります。

世界平和の大木がいつまでも常緑を保つよう祈念し、各国人民の子子孫孫にわたる友好を祈念し、このたびの会議の円満な成功を祈念いたします。

## 都市報告 5

川崎市長

伊藤 三郎

川崎市長の伊藤三郎でございます。

第1回世界平和連帯都市市長会議において、川崎市の平和運動の現況と展望について、報告する機会を与えられましたことを光榮に存じます。

あの広島・長崎から40年、いま人類は、核兵器の脅威がますます増大している危険な時代に生きているのであります。

核兵器の存在は、私たちに戦争を止めさせるか、戦争が私たちを絶滅するかの事態を招いているのであります。

そして、平和維持のためには、それを妨げるあらゆるものに屈伏しないことを決然と示す市民の決意が、あらためて問われていると思うのであります。

人類の平和と安全を守るには、世界中の市民相互の人間愛と社会正義の絆を強め、そして自然との調和を保つことにより、人間らしい生き方のできる豊かな社会を創造することが必要であると思います。

第2次世界大戦において、日本は世界最初の被爆国となり、また工業都市川崎もがれきと焦土の町と化し、市民は戦争の惨禍を身をもって体験したのであります。

さて、川崎市における核兵器廃絶平和運動のきっかけは、戦争が終わって30年後の1975年、市の中心地約5.7ヘクタールの米陸軍出版センター跡地の返還でありました。

この時から、市民の核兵器廃絶、不戦の誓いを明確にする核兵器廃絶平和都市宣言制定のうねりが、市内各地から遼原の炎のごとく燃えさかってまいりました。

それはまさに、草の根市民運動の広がりを象徴するものであります。

私は、このような市民の核兵器廃絶の決意と行動は、それがいかに小さい運動であって



も、その運動が存在することによって、核兵器への抵抗と核兵器の存在を克服する知性と勇気を示すものであると信じております。

1982年6月、川崎市議会は、市長提案による核兵器廃絶平和都市宣言を全会一致をもって決定いたしました。

そして、あの米陸軍出版センター跡地は、市民の平和への願いを象徴する川崎市平和公園として、着々と整備がはかられ、1983年6月、完成をみたのであります。

公園の中央には、核兵器廃絶平和都市宣言の記念碑が輝やき、そして世界7ヵ国の彫刻家による「平和」をテーマとした彫刻シンポジウムの作品が、人類の平和への祈りと連帯をこめて、さんざんと輝いております。

毎年8月15日の記念日を中心にして、反戦平和のつどいをはじめ市民の多様にして多彩、しかも厳粛な平和への行事が、繰り広げられているのであります。

市民連帯の鎖のような強さが、内外に大きく広がるとき、その運動は核政策の強力な足かせとなり、核兵器廃絶へ向けての強大な力となることを信じております。

私たち川崎市民は、1946年のユネスコ憲章の「戦争は人の心の中で生まれるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない」という言葉を市民共有の財産として、核兵器廃絶平和運動のとりでを構築し、広げ、人類共存への展望を切りひらき、力強い歩みを続けるものであります。

## 都市報告 6

ヌワラエリア(スリランカ)市長  
エドムンド・S. ラジャパクセ

われわれは今、40年前、戦場と化した地に集っています。40年前、この地において百万人以上の罪のない人が、尊い命を奪われまし

た。これは一瞬の出来事であり、世界で優位に立とうと野心に満ち、戦争に躍起となった国々の憎悪とどん欲と復讐心に燃えた策略とを満足させるためのものでした。

自由な思想を持つ男女として、そして感情を持つ人間として、われわれはこの野蛮な行為に対し心よりの憤りと哀惜の念を抱きます。またわれわれは、あの8時15分に、この大虐殺の犠牲者となられたヒロシマの皆様が愛された親しい方々の膨大な数の生命に対し、われわれの悲しみと哀悼の念を表するために、皆様方と共に黙とうを捧げたいと思います。

われわれは、犠牲者の方々の魂のために祈ります。そして、この祈りによって、われわれが唯一存在出来る場所であるこの美しい星・地球に二度とあのような惨事が繰り返されないことを願います。

第二次世界大戦直後の1951年、勝利に酔う戦勝国は世界史上有名なあのサンフランシスコ会議の席上で、敗戦国に対し制裁的措置を課し、日本から戦争により生じた損失および損害に対する賠償金を取り立てようと画策しておりました。

当時の大蔵大臣でスリランカからの派遣代表であったわが国の J. R. JAYAWARDANA 大統領閣下が世界機構に対し、感情を持つ人間として厳粛にかつ大胆に、日本に友情の手を差し伸べ、日本国民が対等な人間としてわれわれと手をつなぎ共に歩き、誇りと威厳を持って自由の恵みを謳歌出来るようにすべきであると進言したのは、まさにこの席上のことでありました。アジアの何百万もの生命を高められた偉大なる師・仏陀の教義を信じる者として、「憎しみは決して憎しみの内に終わることはなく、憎しみは慈愛と畏敬の念の内にのみ終わる」という教えは、実生活における真実であり、われわれは今、その豊かな実りを享受しているのだ、という感を深めるばかりであります。

われわれは貴国の業績に敬意を表し、先進諸国における先導者としての立場をゆるぎな



きものにされた貴国に対し心よりの賛辞を贈ります。貴国こそは第三世界の諸国にとってこの上ない手本であり、われわれは貴国がその業績をわれわれと分かち合って下さるようお願いしたいと思います。

慈悲、慈愛、非暴力—どの宗教指導者の教えを取ってみてもこの三つが、意義ある平和を確立するための主な要素となっています。この三つの要素こそが、核兵器に対抗するためにわれわれに与えられた唯一の強力な武器なのです。われわれの目的を達成するために、この理想的な武器を最大限に利用しようではありませんか。

私は、世界の運命と地球上の平和は、超大国の指導的立場にある政治家の手中にあると信じております。それ以外の国々が有する権力あるいは統率力は、個々には微々たるものです。しかし、個々の力を結集して一つの組織体となれば、われわれは超大国が持つ世界平和と繁栄に対する考え方に大きな影響を与えることが出来るはずです。

義務の遂行、献身、流した汗によって発展して来たわれわれの都市は、不幸にして第三次世界大戦が勃発した時にはまっ先に標的となることでしょう。従って、何も知らない市民に核による対決によってどんな危険がもたらされるかを伝えるのは、われわれに課せられた義務なのです。

核戦争の恐ろしさは、ヒロシマとナガサキの惨状のレポートと写真を例として示すことが出来ます。

私は、この世界平和連帯都市市長会議を、全世界の核軍縮推進をめざす草の根レベルをも含めた活動の調整、推進、評価を使命とする中心機構とすることを提案します。

私は、これらの事柄を正直な心と誠意、そして献身的な奉仕を持って追求すれば、この会議におけるわれわれの努力は有意義な結果を得ることが出来ると信じます。

私の提案を表にまとめておりますので、十分ご検討下さいますようお願いいたします。

私はこの「第1回世界平和連帯都市市長会

議」にご招待いただきましたことは、当市民、わが国国民に与えられた大変な荣誉であると考えております。このご好意に対し、心より感謝の意を表します。

皆様方が示される素晴らしい調整指導力、影響力そして威信をもってすれば、この会議における努力は必ずや世界中に意義深い平和をもたらす足掛りとなるに違いないとわれわれは信じております。

皆様方の持たれる強い力を持ってすれば、平和を核軍縮に対する誓約を求めるメッセージは、いついかなる時も世界各地の平和を愛するすべての人々に称賛をもって受け入れられることでしょう。

最後に、私の演説を暖かい心をもって熱心に辛抱強くご清聴下さいました市長閣下、ご列席の皆様方に心より感謝いたします。

## 都市報告 7

サクラメント(アメリカ)市長

アン・ルーディン

米国では、核兵器は戦争を抑止する理想的なものとは到底考えられないことを認識しているので、新たな核兵器の生産および実験に反対する世論の強い感情の波が押し寄せています。それらは、わが国の防衛を増すというよりむしろ、われわれを核による絶滅の危険性にさらすもので、またそれらはわれわれの資源をむだに消費させ、われわれの都市を破壊に導くものである。

子どもは様々な方法で平和のための活動を行っております。子どもは、公的に問題を提起し、核攻撃に伴う医学上の結果および長期間にわたる環境破壊を示す教育プログラムにより大衆の理解度を高めています。また子どもは、核貯蔵量が国防の必要度を超えているのではと指摘しています。

私は市長として、兵器の統制および連邦政府の軍事予算の削減を支持して、わが国の資源を兵器の製造から平時の産業に向け直すべきだと話してきました。

軍事予算を統制するのはわれわれの都市でなくわれわれの大統領と議会であるけれども、私どもは国の政策と優先権（priorities）を変更することができます。その例として、1) 核兵器あるいは過大評価されている SDI（戦略防衛構想）のテスト及び開発の停止、2) “先制攻撃をしない” という政策、3) 情報伝達の促進と誤解・誤算の結果、生じる過失による戦争行為の回避を目的とした国際的な危機統制制度の開発と危機統制センターの設置、4) 主義を持った交渉による紛争解決方法、5) 全国家による包括的核実験禁止条約の調印が挙げられます。

私どもは、ここでしていること—他の市の皆さんと考えを分かち合うことなどを継続し、将来がより平和になるように身を捧げるために過去のことを覚えておかなければなりません。

さらにソ連の指導者が、核実験の一方的一時停止を表明し、米国の指導者にこれに続くよう招聘しておりますので、まだ核実験の一時停止を表明していない米国大統領に、すみやかにこれに合意するよう要請しなければなりません。これらふたつの別々の行動から、包括的核実験停止条約のための確固たる基盤が生まれるでしょう。

私がこのように申し上げている今でも、サクラメント市民は、平和への誓いを立て、昼も夜も平和の祈りを捧げています。米国大統領に包括的核実験禁止条約に向けて具体的な対策を取るよう個人的に嘆願書を送っています。本会議と祈りを捧げているサクラメント市民とは地理的に離れてはいますが、この共通の目的によって結ばれております。

## 都市報告 8

バンクーバー(カナダ)市長

マイケル・F. ハーコート

1985年8月6日平和推進のための市長会議にご列席の市長殿および公式代理の皆様、私は、この崇高なる人類存続を願う平和会議に参加させていただき、また、カナダからの出席都市である首都オタワ、テラス、バンクーバーを代表して発言させていただくことを大変誇りに思っております。そして何よりもまず、過去の悲劇を転じて、平和と軍縮を願う世界的な運動とされた広島、長崎両主催都市の市長殿に敬意を表します。

広島、長崎両都市の「核兵器廃絶を願う都市間連帯の促進」をめざすこのような計画こそ、私が喜んで参加させていただきたいと思う試みです。バンクーバー市も、世界中の多くの都市と同様、心よりこの計画に賛同いたしております。私は、今日ご列席の皆様方の間に生まれる共感により、都市間の輪にこの言葉が広がり、世界平和に大きく貢献するに違いないと信じております。

国家あるいは国際レベルの問題で都市が先導的な役割を果たそうという発想に、嘲笑を投げかける人々も多くいることは確かです。こういった懐疑論者たちは、市長はビル建設や土木工事や課税のことだけ考えていればよいと思っています。しかし、今日皆様方がご列席になっているという事実、そしてその行為を促したであろうお気持ちこそ「政府が国民の望んでいる将来を与えることが出来ないのならば、人々に最も近いレベルの行政機構たるわれわれがそれをしなければならぬ」という共通の信念の証と言えましょう。

私は、われわれが世界の人口の多くが集中する都市の市長として、以下の行動を団結して行うことを提案いたします。

1. 米国とソ連に対し、ジュネーブ会談の続行、核兵器製造の凍結と現存する核兵器の

撤去、今世紀末までに完全に同等な軍縮の達成を求める。

2. 他の核保有国もそれに従うよう求める。
3. 国連に加盟している非核保有国に「非核武装地帯」宣言をするよう促して、拡大を図る。
4. 世界開発問題の解決のために資源を集中利用する。例えば、
  - (1) 飢餓救済および食糧自給問題
  - (2) 保健・医療問題
  - (3) 教育問題
  - (4) 失業率の問題など。
5. 特に平和に関する提唱といたしまして、バンクーバーは、以下のような事を、掲げます。

例えば、当市は、非核兵器地帯の宣言を行いました。この宣言において、当市における核兵器並びに核兵器関連施設や部品の製造、貯蔵、配備、輸送が禁じられています。また当市は、公式平和委員会を持っています。また当市においては、私が昨日申しましたように、国際平和年である来年1986年に、平和祭を開催する予定でございいます。また私たちは、過去3カ月において、アフリカ飢餓救済のために、130万ドルを募金したという、発展途上国に対するプログラムも持っています。

6. さらに、先進諸国の各都市は、発展途上諸国の都市が抱える都市問題の解決に援助の手を差し伸べる道義上の義務を負っています。われわれの都市のために、国家組織や国際組織を活性化させることにより、多くのことを成し遂げることができるでしょう。これらの問題を86年6月の国連総会に提出しましょう。そして今から第2回世界平和連帯都市市長会議の計画を立てましょう。

## 都市報告 9

ヴェルダン(フランス)市長  
ジャック・バラ・デュボン

あなた方市民がこうむった恐ろしい破壊の40周年記念式典にお招きいただき光栄に思います。日本の皆さん、殉教の街ヴェルダンは平和の世界首都であり、1914-18年の第一次世界大戦中その破壊でも知られていますが、皆さんにこの平和と追悼と支援および友好のメッセージを送ります。恐ろしい破壊を思い出してみてください。

4年間に60万人のドイツ人とフランス人がヴェルダンとドオーモントの丘に倒れました。

4カ月間に60万人のドイツ人とロシア人がスターリングラードを見降ろしながらママエフの丘に倒れました。

1945年8月6日、4分間に非常に多くの日本人女性や子供そして罪のない人たちが死にました。

悪の天才や科学者たちは、いつ止めるのでしょうか。この後、だれが再びこの様な罪を犯すのでしょうか。しかしながら、全ての国家は次の戦争に勝つため、秘かに最も致命的な武器を手に入れようとしています。

平和に暮らすこと、これは皆の願いですが、しかし言うだけでは不十分です。私たち一人ひとりが平和を本当に望まなければならないのです。私たちは忘れていますが、私たちは40年間ずっと火山の上に住んでいるのです。というのは、私たちはまだ停戦中であり、そして平和条約はまだサインされていないからです。信じられますか。理にかなったことでしょうか。第二次世界大戦後から二世代の人々が生まれました。今日ではパートナーとなっている、かつての敵対国間で平和条約がサインされるというのは素晴らしい時代ではありませんか。停戦というのはただ人為的なものです。今、サインされた平和は“宣戦の

口実”の源や遺恨となつてはなりません。平和は、将来、世界的なコンセンサスとなるべきです。憎しみの原因は消してしまわなければなりません。勝者は寛大になり、彼らがこうむった痛みを忘れなくてはなりません。彼らはまた、痛手をこうむった彼らの敵の痛みを考えるべきです。この痛みを今日、私たちは記念するのです。

平和の首都であるヴェルダン、われわれ殉教の街の全代表者に対し、843年シャルルマーニュ帝国の非武装が3人の孫息子たちの間で協定として結ばれたという場所であるヴェルダンで平和条約がサインされるよう要求します。前述の協定は、1,000年以上も存在しましたが、結局、敵対行為と完全な戦争となつてしまいました。このシャルルマーニュ帝国の分裂は、人民とその風習を無視したために起こったのです。

ヴェルダンは、平和条約締結の場としてビショップ宮殿を提案します。それは40年間も期待されているものです。

平和を見捨ててはなりません。平和をおしつけてはいけません。それが復しゅうの原因となつてはいけません。しかし将来の世代の人々によって尊重されるために、完全に受諾されなければなりません。過去の歴史の過ちを繰り返してはなりません。

全ての国境が永遠に平和でありますように！

## 都市報告10

ボルゴグラード(ソ連)市長  
ウラジミール・イワノビッチ・アトポフ

英雄都市ボルゴグラードの市民並びに市執行委員会を代表して、第1回世界平和連帯都市市長会議に参加された皆様に心からのごあ

いさつを申し上げると共に、広島市、並びに荒木市長に対し、当会議の開催にあたり發揮されたイニシアチブ、すばらしい組織力、そして暖かいおもてなしに対し深く感謝いたします。

今年は、歴史上もっとも多大な破壊と流血を人類にもたらした第二次世界大戦の終結の40周年目にあたります。

しかし、その悲惨な記憶は今だに人々の中に生きつづけており、戦争の後遺症は、今だ完全に取り除かれてはおりません。

邪悪と無分別に対する理性の戦いに勝利するために、人類の払った犠牲は、はかりしれないものがありました。大戦の嵐は5,000万人の命をうばい去り、ソ連だけでも2,000万人の人々が勝利のために、自からの身を捧げたのです。

私が市長を務める英雄都市ボルゴグラードは、人類まれにみる激戦、スターリングラード会戦の中心地となりました。

壊滅的な戦争の炎に焼かれたスターリングラードは完全なる焦土と化してしまいました。市の人家のうちの90%は壊滅し、100にのぼる工場が完全に破壊されてしまったのです。何万人もの市民が命を落としました。

私の生地、ボルゴグラードの住民にとって「戦争」という言葉が、強い憎しみを持つ言葉となったのも当然のことです。そして、ボルゴグラード市が平和擁護のための国際的な運動に積極的に参加しているのもこの理由によるものなのです。

親愛なる皆さん

今年、2月、「英雄都市、平和都市、戦争犠牲都市」の指導者たちが集まって、ボルゴグラードで幅広く会議が開かれました。

4月18、19日には、戦争受難都市世界会議がボローニヤで開催されました。人間は、自らが製造した兵器は例外なく利用するものであることは歴史が証明しています。戦いが発生すると、まず第一に都市がこれに巻きこまれてきたことも事実です。なぜなら、都市は、経済、文化、科学の中心であり、これらは、

国の中枢を成すものであるからです。何にもまして都市が戦争の犠牲となるのは、このためであります。都市には、特別な権利があり、都市は平和擁護のために、この権利を行使すべきであります。

連帯、統一運動は、不安な世界情勢と、現代並びに未来の世代がさらされている核戦争の現実的脅威を前にしての全人類の歴史的教訓に根ざした運動です。

統一運動は、単に市長間の集会や都市間の外交に終わらせず、核による死の脅威に対する統一の戦いの中でのすべての国民大衆の結集連帯が何よりも大切なことであります。諸民族間の友情、地球を守るために都市や諸民族が団結することこそが、運動に必要なものであります。

きびしい歴史の教訓から過ちを繰り返さないために、私たちは、行動をおこさなければなりません。

私たちは、あたかも力や兵器が現在そして将来において、すべてを解決するという考えを人々に植えつけようとする人々の見解を拒否します。

今日ほど歴史の表舞台に諸民族（人々）が登場したことは、かつてなかったことであります。何人にも抑えることのできない発言権を人々が手におさめたことなのです。

私たちの国家の創立者レーニンの唱えた原則「私たちは諸民族の戦争と平和の問題に干渉し援助をしなければなりません」というこの原則に立って私たちは出発しています。

ボルゴグラード市民は、今日ここに広島、長崎の市民に対して、アジア、ヨーロッパの諸民族、全世界の民族に対して未来の世代のために団結を強め、地球の平和のために行動をおこすよう熱烈に呼び掛けたいと思います。

測りしれない苦悩を味わったこの地、広島に、私たちを呼び寄せたのは、ある共通の心配ごとでありました。それは、世界中に平和を維持しようとの熱意であります。

40年前、恐ろしい原爆の投下により、この

都市は焦土と化してしまいました。これは、人間嫌いの業の極致以外の何者でもありません。

広島は、油断することなく過去の過ちを繰り返さぬようにとの憤りに充ちた警鐘であり、永遠の警告であります。

私たちボルゴグラードの市民には、だれにもまして身にしみてこれが理解できます。スターリングラードや広島の教訓を忘れることは人類とその文化の終えんを招くことを意味しています。

地球上には、現在、100万もの広島をつくりだすことも可能なほど莫大な量の爆発物が集積されています。

この量は、私たちを慄然とさせます。しかしこの事実は、地球上の人、一人ひとりを行動にかりたてるはずであります。

ボルゴグラード市民は、すべてのソ連国民と同様、現代の私たちの根本的な課題が核戦争の防止、あらゆる種類の核兵器の禁止と廃絶にあると確認しています。歴史的体験は、反戦の戦いは戦争が始まる前に、それをおこさないために闘うことであると私たちに教えてくれています。

現在の世界情勢の中で、ソ連は、全世界の平和を愛する勢力と共に、世界の政治情勢を改善し、核の脅威から人類を救うためにあらゆる努力を傾けています。

世界中で、広島悲劇を記憶している今日、8月6日をもって、ソ連は、あらゆる種類の核実験を一方的に、中止しました。

ソ連共産党中央委員会書記長ゴルバチョフ同志は、核実験中止の猶予期間を、1986年1月1日までとし、もしアメリカが核実験を自制する場合は、この期限を、さらに延期するであろうとの発表を行いました。

平和を守るためには、このように善意ある模範、实际的貢献が、唯一、核戦争の脅威から、世界を救うことができるのであります。

ボルゴグラード市民、並びに、ソビエト国民のもっともひたむきな願いは、平和と友好



の中で、外国の人々と協調的に生活し、建設し、創造することにあります。

人類は、もはや、兵器の山に座って生きることに疲れたのです。未来の人類から戦争をしりぞけることこそが、現代の重要な課題であります。

この会議に出席しているすべての都市の市民たちが力を結集すれば、戦争の脅威に打ち勝つことも可能で、地球の平和並びに大切な権利である生きる権利を維持し、強化することができると、私たちは心から確信するものであります。

そして、私たちは、持ちうるすべての力をその実現のために注ぐ必要があります。平和と理性の力が勝利するのは、間違いありません。

## 都市報告に対する質疑応答

コーディネーター（永井道雄）

以上で10都市の発表が終わりましたが、多数の方からは是非意見を述べたいとの連絡がありましたので、お名前を呼びますので、ご発言下さい。まずザンビア、ルサカ市の M. C. サタ市長。

ルサカ(ザンビア)市長  
M. C. サタ

この会議の開催地として、広島と長崎以上にふさわしい地は他にありません。それは、両都市が、原子爆弾投下という野蛮な行為の標的となり苦しめられたからです。第二に、私は今朝、平和公園を訪れました。いく人かの警官や機動隊員が、群衆の整理をしておりましたが、広島市当局の主義故か、銃を使う者は一人もいないのが、非常に印象的でした。しかし、発展途上国の人々は、原子爆弾の威力をほとんど理解していません。私が原爆について話しますと、人々はそれが良いものだ

と誤解する有様です。ここにおられる市長の皆様全員が何かをなし遂げようとした場合、国会議員の存在を忘れてはならないのは当然のことです。それぞれの市には、国会や議会の議員がいます。殺人兵器を製造する法律が成立するのは国会ですから、私たちはそれに対する影響力を持たねばなりません。外交政策が可決されるのも国会です。ここで、私の国ザンビアの場合について申し上げたいと思います。ザンビアは、南アフリカにあります。

南アフリカには、ミニ広島とも言える小都市がいくつかあります。これらの都市は広島や長崎のように世界中に知られているわけではありません。1964年から現在までに、超大国から輸入された兵器によって何千人もの民間人、女性、子供たちが無差別に殺害されて来ました。従って、そのような影響力は、あらゆる発展途上国で示されなければならないのです。例えば数年前、フォークランドで領有をめぐる対立がありました。その時政府は、1,800人の住民を救出するために機動部隊を送らねばならませんでした。

1964年から少したった1965年、一方的独立宣言（UDI）が出され、その時600万人もの黒人が差別を受け、殺されました。ただ黒人であるというそれだけのために、差別され殺されたのです。超大国によると、黒人は死なねばならないということになるのです。

広島と長崎にも、ただ日本人だという理由だけで原爆が投下されました。もし彼らがロシア人だったとしたら、原爆は投下されなかったでしょう。もしアメリカ人だったら、やはり投下されなかったでしょう。ベトナム人がベトナム人だから、いくつもの爆弾、ナパーム弾がベトナムに投下されたのです。現在ナパーム弾はアフガニスタンに運ばれてきて投下されています。アフガニスタン人だからナパーム弾が投下されて、無差別に殺されるのです。

ですから、私たちが戦争について語る時、兵器について語る時、原子爆弾や核兵器に限定して話し合うべきではないと思うのです。



これらの兵器は、人を殺すために造られます。そして現在をご覧のとおり、神が人類にお与えになった技術は、人類に敵対するものとなり、人類の殺害に使われるようになりました。

われわれアフリカ人は、広島、長崎の人々と共に闘うためには出来る限りのことをするつもりです。そして戦争は防衛に限定し、実験、攻撃または侵略を目的とした戦争を許してはなりません。人々は、破壊的兵器の精度がいかに高いかをすでに知っています。破壊のための兵器を使用させてはなりません。現在、超大国が日本政府に軍拡競争に参加させようと大変な圧力をかけています。日本政府があくまで中立の立場を守り抜くように、祈り、要求し、訴える必要があります。日本政府は、進んだ技術を日本国民のために使うべきです。さらに精度が高く、さらに破壊力のある兵器を開発し製造しようとする超大国の競争に日本政府を巻き込ませてはなりません。これらの兵器は、惨事をもたらします。これらの兵器は、人々から平和を奪います。

議長殿、広島市長殿、長崎市長殿、そして日本国民の皆様、私たちは皆様方がこの第1回会議に出席している各市長に示して下さった非常に友好的な歓迎と愛と平和にあふれるお心づくしに心より御礼申し上げます。

コーディネーター（永井道雄）

アフリカから唯一参加のルサカ市長のご発言は貴重であったと思います。

先ほどのボルゴグラード市のご発言に関して、アメリカのアーバイン市、ラリー・A・アグラン市議会議員がご発言になりたいということですので、どうぞ。

アーバイン(アメリカ)市議会議員  
ラリー・A. アグラン

私はまず皆様に、今日は広島被爆40周年であるばかりではなく、願わくばもう一つの歴史的一日となる可能性のある日だということにご注目頂きたいと思います。

今日は、ソ連が核実験の一時停止をする第

一日目です。これはアメリカからこちらに届いたニュースで、私はこの一時停止が歴史的な転機となることを心から願っております。また、この重要な国家的インシアチブを取られたゴルバチョフ書記長並びにソビエト連邦に対し、心よりの賛辞をお贈りしたいと思います。ここで思い出されるのは、1963年にアメリカのケネディ大統領が行ったそれぞれの大気圏内核実験を禁止するちょうど今回のようなインシアチブです。

この国家的インシアチブは、後に大気圏内核実験禁止条約となり、良識の年として人類に大きく貢献しました。

われわれは、アメリカにいる同胞が政府が出来る限り早急にこの呼び掛けに対応するよう強く求め、全世界の国家が包括的核実験禁止条約に調印するに至る道を開くことを願い、また必ずそうしてくれるに違いないと信頼しています。

今一度、ソ連とソ連が取られたインシアチブに心よりの賛辞を贈らせて頂きます。

私はここで、一つの質問をいたしたいと思っています。この質問に対する答えが、今日ご列席になっている方の中から得られるのではないかと期待しているのですが、その質問とは、今日のこの会議が最初で最後の世界平和連帯都市市長会議ではなく、今後何度も開かれる会議の第1回とすべく、議事の中にこの会議を機関化することについて盛り込んでどうかというものです。

これによって国家の指導者たちが軍拡と軍縮という問題全体に関してもっと責任ある行動を取るよう要求することが出来ます。われわれにはそうする責任がある、と私は思うのです。皆様方がこの呼び掛けに答えて下さるのをお待ちしております。この問題はスリランカ代表の方からも提起されると思いますので、是非話し合って頂きたいと思います。

コーディネーター（永井道雄）

最後に質問がありました、この会議を制度化できるかということですが、実は起草委員

会で討論が進んでおり、決議案を採決していただくために、後ほどその案をお諮りする予定です。では、イタリア・マルザボットのダンテ・クルイッチさん。

マルザボット(イタリア)町長  
ダンテ・クルイッチ

40年前、何世紀もかけて作り上げてきた汗と才能の結晶である偉大な科学の進歩を残酷な形で広島と長崎に使用したということは本当に考えられません。魂と心、大きな感情に訴えるものがなにもないのでしょうか。私は先ず第一に被害者に対し敬意を表します。そして人類の将来においてこの希望の会議にわれわれと共に出席している“被爆者”への連帯を表明いたします。欧州の殉教の町であるマルザボットと広島は数年以来、平和と文化のために一緒に行動してきました。われわれに送られてきた資料のおかげで展覧会を準備し、フィルムを上映し小学生や若人たち5万人以上のために小冊子を出版しました。

1945年8月6日と9日以後、歴史の糸を断ち切ることが可能な時代の到来だということを絶対に忘れるべきではないと思います。人類は戦争に終止符を打たねばなりません。さもないと戦争が人類を終わりにするでしょう。人々が憎むだけ憎めるこの戦争時代は目をみはるほど変化しています。きれいな兵器も汚い兵器もあります。攻撃的な兵器も防衛的なそれもあります。あるのはばかげた兵器があるのみです。というのは、それらは使用不可能なものであるかまたはもし使用すれば自殺を意味するものであります。そしてそれらはわれわれの世界が生きのこるために必要なそして地球の維持に必要な資源をふいにしてしまうからです。

地方都市の代表として何をすべきか？われわれは戦争のためにいやというほど苦しんできました。われわれは道徳のある大きな力そのものであります。そして全世界に訴えたい：1986年は国連会議によって国際平和年と宣言されたということを理解しつつ、軍備競争を

やめるためにわれわれ各自の努力を結集しなければならないということ！ 軍備競争はすでに世界からパンをとりあげ自由をくぎづけにした惨禍であります。われわれはジュネーブや他の場所で多くの出会いを強く希望します。レーガン氏とゴルバチョフ氏の出会いを、また中国指導者と日本の指導者や他の国々の指導者の出会いを支援いたします。われわれの時代の挑戦とも言うべき対話を重ねるべきです。国会、地方会議などで問題を討論すべきであります。必要なことです。がそれだけでは不足です。平和を一人ひとりが考えることが必要であり、その輪や“一般人外交”と呼ばれるその力を最大限に広げる必要があります。われわれは人間の条件を脅かすすべての形を根絶するために大きな宇宙同盟に賛同いたします。人類の自殺競争のために今日では昼も夜も、夏も冬も季節をとわず一秒ごとに2万5,000ドルも費やされているということを忘れてはいけません。そしてその裏で毎秒一人ずつ飢えのために死んでいるという事実を忘れてはいけません。

ですから皆様、地理的な国境や軍隊の厳格さ、観念的な反対派によってなされている拘束をのり越えねばなりません。市町村は常に脈をきざむ心を持ち、人類文化のため活動する心をもっています。われわれはこの美しい国を訪問してそれを日々の生活の中にみしました。都市連帯の度重なる活動が自由に生きつづけることを強く希望します。

科学、技術そして産業生産物は決して宇宙の軍事化や地球の死への競争に走ってはなりません。反対にそれは経済システムの保護、未開発や飢えなどの問題の共同管理において、また、地球上の財産の均衡な援護において活用されなければなりません。資源は新しい国際経済の目的のために使用されなければなりません。

国連やユネスコの多くの決定が進む中で平和への教育は人類間の友愛と現実の確認に若人を目覚めさせるための一つの可能性になるべきものであります。平和は作られるべきも

のであります。なぜなら平和は唯一つであるからです。平和は創り上げるものであり、発明されるものであります。

平和は常に新しく疲れを知らない意志の助けにより築かれるべきものであります。われわれが追求しているものは小さくて制限のあるものでは絶対にありません。このような理由から、われわれは皆様方全員に人類が対応すべき最大の努力をお願いします。これらの努力は新しい文化をつくり上げるために役立つことでしょう。われわれと同じ運命に結ばれればこれらの人民は幸福と英知をもつてありましょう。

これがわれわれ戦争被害都市・ボローニャの結論であります。ヤマモトケンイチ氏がご列席かどうかわかりませんが、彼はイタリアでは、1945年8月6日原爆投下後10時間後に生まれた人として知られています。

お誕生日おめでとうございます。あなたは現在世界の平和の首都であるあなたの町に誇りをもつことができます。

#### コーディネーター（永井道雄）

それでは、あとお一人で終わりたいと思います。シリアのクネイトラ市、ハッサン・アルサッカ市長。

#### クネイトラ（シリア）市長

##### ハッサン・アルサッカ

シリアアラブ共和国のクネイトラ市の市長を務めておりますハッサン・アルサッカです。戦争犠牲都市クネイトラ市の市民になりかわりまして、また私個人といたしましても、称賛と敬意の念を持ちましてこの会議にお招き下さったことに御礼申し上げます。

私は、40年前にそれぞれ1回目と2回目の原爆投下を受けられた広島、長崎両市の素晴らしい市長殿、関係者各位にお会いすることが出来てうれしく思います。

私の市クネイトラも、近代になってからもう一つの史上まれなる苦難に遭遇いたしました。市民が攻撃され、クネイトラ市が降伏し

た後イスラエル軍政権はクネイトラ市にすさまじい破壊を加えたのです。彼らはライフルを撃ちまくり、クネイトラ市のあらゆる建物、施設を略奪し占拠しました。この事件は1967年の占領直後に起こったものです。それからイスラエル軍政権は、ダイナマイト、大砲、爆弾を使う野蛮なやり方で、クネイトラを完全に破壊しました。

戦争には様々な形態、名前があります。しかし、核戦争であろうと従来の戦争であろうと、戦争はすべて人類の存続、発展、国際友好関係と相反する攻撃的な行為であると考えべきです。

一言で言うと、戦争は生命に反する行為なのです。

最後に、ご列席の市長各位に御礼申し上げます。またこの会議の功績に対し、感謝いたします。

#### コーディネーター（永井道雄）

ご協力ありがとうございました。特にコーディネーターが不慣れであり、また言語の問題で不手際もありましたが、ご協力いただき、感謝申し上げます。おかげを持ちまして、より深い国際理解に達したと思います。それでは第2のセッションを閉会いたします。ありがとうございました。

#### 司会（山田広島市市長室次長）

どうもありがとうございました。14時50分からこの会場で引き続きパネルディスカッションを行います。時間を厳守して始めたいと思いますので、ご参集のほど、よろしくお願いいたします。

## —核軍縮へ都市は何をなし得るか—

### パネルディスカッション

8月6日(午後2時40分～4時10分)

広島グランドホテル(孔雀の間)

司会 広島市市長室次長 山田 康  
コーディネーター 国連大学学長特別顧問 永井 道雄

#### 1. パネルディスカッション

- パネラー 1 明治学院大学教授  
豊田 利幸 ..... 87
- パネラー 2 京都大学東南アジア研究センター教授  
矢野 暢 ..... 88
- パネラー 3 シドニー(オーストラリア)市長  
ダグラス・W. サザーランド ..... 89
- パネラー 4 ハノーバー(ドイツ連邦共和国)市長  
ヘルベルト・シュマルステーク ..... 91

#### 2. パネルディスカッションに対する質疑応答

- ゲルニカ(スペイン)市長  
ファン・L. S. アロナテギ ..... 93
- カンタベリー(オーストラリア)市長  
ケビン・J. モス ..... 94
- ヒロ(アメリカ)市長  
ダンテ・K. カーペンター ..... 94
- テラス区(カナダ)区議会議員  
ジョージ・クラーク ..... 96
- マリーナ(アメリカ)市議会議員  
ロバート・T. オオエ ..... 96
- 明治学院大学教授  
豊田 利幸 ..... 97
- パロアルト(アメリカ)市長代理  
マイケル・H. シューマン ..... 98

## 86 パネルディスカッション

---

バンクーバー(カナダ)市長

マイケル・F. ハーコート ..... 99

オタワ(カナダ)市長

マリオン・デュロー ..... 99

司会（山田広島市市長室次長）

それではただ今からパネルディスカッションを開催いたしたいと思います。永井先生、引き続きよろしくお願いいたします。

コーディネーター（永井道雄）

それでは、引き続き私がコーディネーターをいたします。ディスカッションのテーマは「核軍縮へ都市は何をなし得るか」でございます。パネラーの方々を一人ずつご紹介いたします。

向かって一番右は明治学院大学の豊田利幸教授、先生は核戦略の問題に詳しい物理学者です。次は京都大学東南アジア研究センターの矢野暢教授です。

矢野先生は、アジアと南北問題に詳しい政治学者であり、また音楽にも造けいの深い方です。

次に海外参加都市の代表として、オーストラリア、シドニー市のサザーランド市長、シドニーでは、すでに8月6日はヒロシマ・デーになっております。そのシドニーのヒロシマ・デーを推進しておられるのが、サザーランド市長です。

次は西ドイツ、ハノーバーのヘルベルト・シュマルスティーク市長。ハノーバー市は広島市と姉妹都市であり、ヨーロッパにおける広島のメッセンジャー、平和のためのシスターであります。

では議事に入りますが、ディスカッションはパネラーの方に6分間、お話ししていただきます。その後でディスカッションを行います。今、ご紹介した順で豊田教授から願います。

## パネラー 1

明治学院大学教授

豊田利幸

最近、核超大国の指導者たちを含め多くの人が、核兵器は使われてはならないといっています。それはなぜでしょうか。よく、米ソ両国が持っている核弾頭の数は今や5万発以上で、それら全体の破壊・殺傷力はヒロシマ型1発の100万倍にも達しているから、もし米ソが全面的な核戦争を始めれば人類は破滅してしまうからだと言明されます。しかし、この考え方ですとヒロシマ・ナガサキ程度のことが数か所で起こったぐらいならよいことになります。実際、核保有国の戦争計画者の中には「限定核戦争」ならよく、それを行うにはどうしたらよいか、熱心に考えている人たちがいます。

彼はヒロシマ・ナガサキの意味を私たちとは全く逆にとっています。すなわちヒロシマ・ナガサキ程度なら、今日見られるように戦後の復興も実証されているから戦争目的の遂行に役立つと考えているようです。アメリカ政府はヒロシマ・ナガサキの原爆災害の調査を占領と同時に精力的に行い、1950年「原子兵器の効果」と題する本を出しましたが、その目的はヒロシマ・ナガサキ程度のことが起こった場合の対策をたてることにありました。このような考えは、核戦争の本質を正しくつかんでいないことからきています。

核戦争をこれまでのように殺される人間の数や破壊・炎上される建物の規模だけで考えるのは適当ではない、というより間違いです。この意味で、核兵器の威力を核爆発の際に放出されるエネルギーの総量で考え、それをTNTという高性能の化学爆薬のそれと比較し、換算した質量で表すのは間違いです。わかり易くいいますと、100Vの電流を10A1時間流しても、また10,000Vの電流を10A3.6秒流してもエネルギーとしてはともに1



KWHで同じなのです。しかし生物を含む多くの物質に及ぼす効果はまるでちがいます。

核爆発は核反応そのものであり、その際放出されるエネルギーの強さは火薬の爆発のような化学反応によるものの百万倍に達します。

それゆえ、ヒロシマ型の規模の核弾頭が1発だけ使われる限定核戦争でも、従来の戦争とは全く異なった地獄が起こります。1961年以来繰り返し出されてきた国連決議の中で「核兵器の使用は国連憲章の侵犯であり、人類に対する犯罪を構成する」と述べているのは、まさにこの点からであります。核兵器が化学兵器や生物兵器以上に非人道的であるといわれる所以もここにあります。

これを一口にいえば、核兵器はいかなる弁明も許されない「絶対悪」であります。核兵器を必要悪として、その保有を正当化するために出された核抑止の教義が虚偽であり非倫理的であるにもかかわらず、それをもとに核軍備競争を加速してきました。この歴史的事実は誰も否定できないであります。

核兵器は絶対に廃棄されなければなりません。しかし、残念ながら現在のところ、核保有国の指導者たちが進んで核廃絶に乗り出すことはほとんど望めません。なにしろ、核兵器の保有を国家の威信として鳴物入りで祝ってきた歴史的経緯があるからです。核廃絶は核戦争によって最大の被害を受ける市民の政党派をこえた広範な反核運動なしには実現しないでありましょう。ではそのような運動として市民は何をしたらよいのでしょうか。あるいは何ができるのでしょうか。

それは核保有国、核非保有国を問わず、市民が自分の住んでいるところに核基地、それには核戦略に不可欠の指揮・管理・通信基地も含まれますが、それらはもちろん、核弾頭を積んで核発射が可能である疑いのある一切の艦船、航空機が近づくことを拒否する明確な意思表示をすることです。すなわち、町や村、さらに市や県が非核の地域であると

いう宣言を自治体として出すことであります。

これは国際政治に直接的な影響を与えることはないでしょうが、一つの国の中で自治体の非核宣言が増えれば、その国の政府はやがてそれを無視するわけにはいかなくなるでしょう。一見遠回りなようですが、これこそが核廃絶への確かな道であると考えます。何もしないでいて国家の指導者のするままにまかせるとするのは民主主義にも反します。

## パネラー 2

京都大学東南アジア研究センター教授  
矢野 暢

まず最初に、このような画期的な会議を実現されました広島市の荒木市長、長崎の本島市長および市民の各位に心から敬意を表したいと思います。

簡単に3点だけ申し上げます。

第1は、国際政治学の有名な命題であります、「平和は分割不可能である」、Peace is indivisible. ということです。つまり平和は世界の一地域だけで築けないし、他の地域で戦争がひん発するという状況では、実は真の平和は語れません。平和はその意味で分割不可能であり、そしてグローバルでなければならぬのです。

戦後の歴史をみると奇妙なことに気が付きます。ヨーロッパでは一度も戦争が発生しておりませんが、アジアでは朝鮮戦争あるいはベトナム戦争、現在のカンボジア紛争など血生臭い紛争はあとを断ちません。中東においてもアフリカにおいても、またラテンアメリカにおいても戦争は発生しています。これは何故かということを私たちは考える必要があります。

その意味で、私たち人類は今なお、真の平

和実現に成功していない訳であります。先進国だけが平和であり、第三世界が絶えず戦争と紛争のしわ寄せを受けるという現実には許されてはならないであります。

第2点は、それとも関係しますが、私としては、未だここでどなたも出しておられない問題、すなわち南北問題の重要性について触れておきたいと思います。

平和を本当の意味で分割不可能にするためには、第三世界の貧困の問題、政治的不安定の問題、政治的不正義の問題等々、いわゆる貧しい南の国の問題が改善されなければなりません。北が発展を続け、南の国々が貧困な状態におかれるという限りにおいては、平和は常に局部にとどまります。

今回、この市長会議でも、やはり、出席者の過半数が先進国の都市の方々であり、そして第三世界からの参加が少ないのは、多少、残念に思われます。特に中国、ベトナム、スリランカからのご参加を貴重な例外として、アジアの諸国の参加が少ないということはアジアの民、日本人として、残念です。

都市間の連帯が、先進国の間だけではなくて、なるべく第三世界の町、村を結ぶ形で今後より発展することが期待されてなりません。なぜならば、都市間の連合、自治体間の連帯が、全世界的に素晴らしいネットワークを作って始めて、平和は分割不可能となるからであります。

最後、第3に、私たちは楽天的であるべきだと申し上げたい。人間の最後の良心の一片、良心あるいは善意の最後の一片を信ずること、これが平和を実現する上で非常に尊いことだと思えます。どのような好戦主義者の心の中にも善意は残っております。誠実さは残っていると思います。私は京都の市民であり、京都大学で教えておりますが、この広島および長崎が、あれほど悲惨な原爆を体験したのに、京都と奈良には爆弾1つ落ちませんでした。京都と奈良は非常に無気味な平和を保ち続けることができました。調べてみますと、京都や奈良を守ったのは、当時のアメリ

カ陸軍長官スチムソンであることが判明いたしました。すなわち、一方においては、広島・長崎に原爆を落としたアメリカの軍部が、私の言う良心および善意の最後の一片によって、京都と奈良を守ったということは奇蹟ですらあり、と同時に、私たちにとっての教訓でもあります。私たちは最後まで、超大国の指導者たちの最後の善意、最後の良心を信ずるべきでありましょうし、私たちが真に楽天主義的であることが、私たちを常に行動主義者として保ち続け、最後の理想社会の実現に向けて私たちを導き、励まし続けてくれるのであると思います。

楽天主義者は常に素晴らしい表情をしておられます。

その意味で、今回全世界から集まれた市長さんたちがすばらしいお顔をしておられることを知り、私は勇気づけられた訳であります。

## パネラー 3

シドニー(オーストラリア)市長  
ダグラス・W. サザランド

国連が満場一致で「完全にして全体的な軍縮が出来るかどうかという問題は、世界が今日直面している最も重大な問題である」という決議を通過させたのは、1959年のことでした。悲しいかな、26年を経た今でも、事態は全く変わっておりません。

しかし、この会議が開催されたことではっきり分かるように、ますます多くの人々が「人類の最大の脅威は人間が作り出しているのであり、人類が存続するためにはその脅威をなくさなければならない」と気付き始めています。

都市とその行政機関は、軍縮をめざす運動において特別な役割を担っています。政府が

抱える様々な制約を持たず、住民と最も近い位置にある地方自治体こそが、この目標に向けて働くに絶好の立場にあるのです。

シドニー市議会は、核軍縮促進の努力において数々のイニシアチブを取っています。

ご存じのように、この中で最も注目に値するものとして、市全体を非核武装地帯としたことが挙げられます。この行動そのものが、軍備増強と核戦争に対する反対を強く公に訴える声明なのです。

非核武装地帯であることを示す標識が市の境界線に沿って立てられており、その中で市民に対して、シドニーを非核武装地帯とする決定がなされた理由が説明されています。

非核武装地帯そのものは法的にはさほど顕著なものであるとは言えないとはいえ、象徴として、また意識を高める手段としての重要な役割を果たしています。結局、これは市民一人ひとりの「われわれは多国間における軍縮交渉を提唱するわが国政府に対して効果的なメッセージを送ることが出来る」という意見の結集、ということに尽きます。

またさらに大きな規模の全国非核武装地帯事務局も設立され、シドニー市庁舎内に本部が設けられました。

現在では、約100にのぼる地方自治体がこの事務局に加わっており、シドニー、メルボルン、ブリスベーンの三大都市を含みオーストラリアの全人口の半数近くをカバーするまでになっています。

これらの自治体は、事務局を通じてあらゆる政治上の障害を乗り越え、核軍縮という共通の願いのもとに団結して来ました。また事務局は、オーストラリア全土に散在する他の反核組織や世界中の非核武装地帯事務局との橋渡しの役目も果たしています。

さらに注目すべきことに、事務局は、地方自治体が固持する様々な問題に対する意見をオーストラリアのみならず海外諸国の政府に伝えることも出来ます。

今年の今頃、シドニー市議会は、広島への原爆投下39周年を記念して「市民の意識を高

める平和の日」(A Peace Day Act of Civil Awareness) 条例を制定しました。この条例は、市民に核戦争の恐ろしさと平和および軍縮のために活発に行動することの必要性を今一度思い起こさせるのに役立ちました。

先程永井先生の述べられたように、今年の8月6日、シドニー時間は、ほぼ日本時間と同じなのですが、「市民の意識を高める平和の日」条例に定められているとるべき行動として、シドニースクウェア（広場）にあるシドニー市公会堂において、原爆被爆追悼式典が、開催されました。

また本年は、市公会堂には、今週中、「広島1945年8月6日」と大きく記した、プラカードが掲げられております。

さらにその後、パームサンデー軍縮ラリーではシドニー市長と周辺地域の各自治体の長、そして各地区の議員並びに市民が揃って行進をして広くマスコミの注目を集めると共に、地域社会にわれわれが将来の核戦争廃絶のための使命に真剣に取り組んでいることを示しました。

前述の条例、軍縮ラリーは共に、シドニー市の年間行事に加えられています。

シドニー市議会は市民の意識向上という目的のために、核による大虐殺の実状を伝える展示会を数多く開催し、同時にコミュニティーセンターや教育機関に対し図書館の反核を訴える資料を提供し続けています。

シドニー市におけるこれらすべての活動の土台となっているのが一つの大前提で、これはどんな都市でも適用出来るものです。

その大前提とは――

「われわれは地方自治体当局として、市民が社会分離と無知に陥るのを全力を挙げて阻止しなければならない。この社会分離と無知こそが、市民の軍縮に対する無力感を誘発するものだからである。」  
というものです。

われわれがそれぞれの市民を、「自分たちの支持があってこそ、多国間軍縮が全世界の共通の、そして達成可能な目標となるのだ」

と納得させることが出来れば、軍縮は現実のものとなることは確かです。

かつて米国大統領を務めた故アイゼンハワー氏の夢はまだまだ実現可能です。

故人曰く、「人々はあんなに平和を望んでいるではないか。国々はいつの日か近いうちに今のやり方をやめて、彼らに平和を与えるべきなのだ。」

## パネラー 4

ハノーバー(ドイツ連邦共和国)市長  
ヘルベルト・シュマルスティーク

広島は姉妹都市でありますドイツのハノーバー市長としまして、パネリストの一人に加えて頂きましたことは光栄の至りでございます。

40年前に第二次世界大戦が終わりました時、誰もが今度こそ永遠の平和であるように、と願いました。

平和は、戦争の原因が人々の中から取り除かれた時に初めて普遍のものとなります。

5,000万人の人々が生命をなくしたこの戦争は、工業化時代の戦争の恐ろしさをまざまざと示しました。ドイツ人は、第二次世界大戦がナチが支配するドイツによって始められたことも決して忘れません。原爆の開発は、戦争の形を新たな次元へと導きました。

1945年8月6日に広島、8月9日に長崎に投下された2つの原爆は、第二次世界大戦がヨーロッパにもたらした破壊がどんなにすさまじいものであろうとも、将来に起こる戦争はさらにもっと恐ろしい結果をもたらす—ということを歴然と示しました。

と申しますのも、40年たった現在もお、初めての2つの核爆弾の犠牲者は増え続けているからです。そして残念なことに、着実に増え続けるこの危険な兵器の開発と製造を止

めさせたいという願いは、現在もお現実のものとはなっていません。

わがハノーバー市は、第二次世界大戦中の破壊と、その悲惨な結果に苦しめられたから、一ヨーロッパ人としてそして分割された国家の国民として、私たちは超大国の相克の恐らくは最初の犠牲者であるから—広島と長崎によって、原子爆弾はさらにずっとすさまじいものであることが示されたから…

以上の理由のために、われわれは核軍備の完全廃止を目指して闘っています。その闘いにおけるわれわれの目標は、まず軍拡競争を中止させること、続いて世界的な完全軍備撤廃を達成することにあります。

国連諸国が軍備に支出した総額が、10億ドルに達するのにもそう遠いことではありません。今、毎分当たり200万ドル近くもが支出されているのです。

一方、飢餓に苦しむアフリカ20カ国に対する援助の総額は、毎年わずか150万ドルに過ぎません。この数字は、その目標を達成するにはまだまだ足りないのです。4万人もの子供たちが餓死寸前という現状と、軍備に費される金額の大きさを考え合わせると、これはまさに耐えがたい現実です。世界中の核軍備の約1/3が、ヨーロッパに備蓄されています。8カ国に核兵器を配備しているアメリカは、その大部分に当たる3,369個の弾頭をドイツ連邦共和国に備蓄しています。

東ヨーロッパ諸国とても、核兵器の数はこれより少ないということは決してありません。つまり、ヨーロッパの各都市は火山の頂上にあるようなものなのです。ドイツ連邦共和国の国民は、近年、軍事上の展開に脅かされ続けてきました。ドイツ民主共和国を始めとする他のヨーロッパ諸国も皆、同じ状況に置かれています。憲法によって地域社会のあらゆる問題に対処する権限を与えられている都市や地方自治体は、この軍事上の展開に無関心でいることは出来ません。憲法により、また市民を守る義務により、われわれは憲法

で保障された健康的な生活を維持しなければならないのです。

市民は、自らの手で「外交」または「防衛」政策を作ることは出来ません。市民は、自らの手で軍縮を行うことは出来ません。しかし、市民は軍拡競争に関心を持つ必要があります。広島と長崎が経験したように、核戦争の勃発は、市民がそして自分たちの都市が死ぬということに他ならないのです。わが国の都市の中には、このような問題に関する決議を行わないということを取り決めているところもあります。しかし、わがハノーバー市はこのような取り決めに拒否して、何とか非核武装宣言を行いました。

世界の発展と国家間でますます密になる国際関係によって、国家レベルで軍縮対策を行うことは非常に難しくなってきました。それでは都市や地方自治体のレベルでそれを行うには、どうしたらよいのでしょうか。核軍縮が実現されるまでには、多くの手順を踏んで行かなければなりません。これらの手順は、市民も地方自治体も実行することが出来ます。誰もが、この目標達成のために貢献することが出来ます。私たちが人々をして、彼らもまたそのために貢献出来るのだと納得させることが出来たら、世界の平和的发展、相克と対立の緩和が可能になります。様々な国の人と人との出会いの場を提供し、そこから生まれる友好的関係を育む姉妹都市縁組こそはこれを可能にします。様々な国の様々な都市の人々が互いの関心が、そして互いに抱える問題がいかに似通っているか、そして皆でそれを分かち合えばそれらの問題を解決するのにいかに効果的かを知るでしょう。私がやってまいりましたハノーバー市は、これを第二次世界大戦以来ずっと行って来ました。

大戦後わずか2年の1947年にはすでに、イギリスのグラスゴー市と姉妹都市になりました。

これは、軍事上の対立を忘れて勝者と敗者が友好の手を差し伸べ合った素晴らしい例です。

1979年、ハノーバー市はポーランドのボズナニ市との姉妹縁組を結んで、社会体制や歴史的、政治的しがらみが異なっても、都市のレベルでも緊張緩和そして相互理解が出来るという好例を示しました。2年前に結ばれた広島市との姉妹縁組は、ハノーバー市が広島と長崎の惨事を繰り返してはならないという大目的のために都市として何が出来ると問いかける特別な意味を持つものでした。

私は、ドイツ連邦共和国に、そしてヨーロッパに持ち込まれた核軍備が、共産圏のわが姉妹都市に向けられていることを深く憂慮しており、またそのポーランドの友もその地域に配備されているミサイルがわれわれを標的としていることに反対していることも知っています。

われわれは、世界のこの現状に直面した今、われわれの態度を極めて明確に表明するため、そして無気力な諦観をしないために、核軍備完全廃止を目指す都市間連帯を推進しようという日本の2つの都市の呼び掛けに応じました。

広島、長崎両都市が行ったこのイニシアチブは非常に重要です。われわれの努力の最初の実りともいえるこの会議の実現は、実によろこばしい限りです。この試みには、ハノーバー市の他にもアーヘン、ビーレフェルト、ドルトムント、エルランゲン、フュルス、グラドベック、ハーゲン、カーメン、カッセル、キール、レムゴ、マインツ、マール、オッフエンブルグ、シュヴェルテ、バドヴィルベル、ヴィッテンの17都市が賛同しています。

この会議には、レムゴ市とハノーバー市が代表してやってまいりました。

私は、ドイツ連邦共和国のこれらの全都市を代表する発言者として選んで頂き、非常に光栄に思っております。この場をお借りしてこの会議に列席された方々に心よりのごあいさつを申し上げます。

都市は、出来る限りの努力をして幼稚園、ユースセンター、図書館で、そしてまた劇場



や展示会場で、平和教育を推進し育む必要があります。

今日では、人々に平和のための教育や訓練をすることが可能です。これこそが、あらゆる教育の主な目標であらねばなりません。また、この方法を経済そして経済促進の方面にも応用する努力も必要です。軍事産業のロビイストたちが軍事製品の輸出制限を減らして欲しいと願うなら、反対の声をあげることも出来ましょう。軍備製造工場の存在やその能力の拡大に反対する実質的な手段を取ることも必要です。そして、これらの工場が軍事製品をやめて民間製品の製造に切り替えるよう要求し、それが実現したら支援をすることも必要となるでしょう。

核軍縮と平和が危ぶまれている時に、一つの都市だけでは無力です。しかし、自分の国や外国の多数の都市と手を結べば、軍縮と平和を求める声明や要求に力が加わり、遂には前進することが出来るのです。政治に携わっている人は皆、それは長く苦しい道のりであることを知っており、自分たちの理想を現実のものとするためにはどんな苦労も惜しまないでしょう。しかし、われわれは勇気を失ってはなりません。1952年に、ドイツの作家ベルトウルト・ブレヒトは、ウィーンで開かれた国際平和集会で次のように述べています。「世界中の何をもってしても私をして、良識をその敵から守るために支持することは無駄な努力であると納得させることは出来ないだろう。今までに何千回となく繰り返し言われたことを、さらに、またさらに言おう。このもう一回を言わなかったためにすべてが無駄とならないように。私たちの警告が口の中ですでに灰のようになり果てていたとしても、さらにもう一度警告をしよう。というのも、人類は新たな戦争の脅威に脅かされているからだ——かつての戦争犠牲者は単なる実験台だったと言うことになるかもしれない戦争の脅威に…。」

皆様、この言葉は今でも真実です。

コーディネーター（永井道雄）

パネラー4人の方にお礼を申し上げます。フロアーの方にご発言をしていただく前に、パネラーの方どうし意見を交換したいと思われることがありましたら、まずご発言をいただきたいと思います。特になければ、フロアーの方から連絡のあった何人かの方にお問い合わせいたします。

## パネルディスカッション に対する質疑応答

ゲルニカ(スペイン)市長

フアン・L. Z. アロナテギ

ゲルニカ市民を代表して、またゲルニカ市役所の名においてごあいさつを申し上げます。

ゲルニカ市はスペインの北部に位置する町です。

私にとってこの会議に参加出来たことは良い経験でありました。私たちはこの会議での公的なコミュニケーションによって多くの教訓を得ることが出来ました。

この会議で取り扱われ、議論された全ての事項は、真に興味深いものであり、これらのことが単に議論されるだけではなく、人類の未来の生存のために真実となることを願います。

私たちはこれまで原爆の物理的威力や影響について議論してまいりましたが、私はもう一つ重大な暴力があると思います。道徳的暴力という観点から、原爆を考える必要があると思います。つまり、道徳的暴力とは、大国の小国に対する暴力であります。核兵器は暴力的兵器です。それ故、私たちは戦争や暴力に反対するよう世論を喚起しなければなりません。このことが、人類の文明を存続させ、また人類が生存する唯一の方法なのであります。



私は、都市は協力して、人類の感じ方や物の考え方を変えていくことができると思っております。

コーディネーター（永井道雄）

それではオーストラリア、カンタベリー市のモス市長。

カンタベリー（オーストラリア）市長

ケビン・J. モス

私は、オーストラリアのカンタベリー市を代表してまいりましたケビン・J・モスと申します。

「われわれには何が出来るか」という課題でお話するに当たって、まず昨日の本会議で大変印象的だった発言をここでもう一度言わせて頂きたいと思います。それは、「国家の政府の代表としてではなく、市民の代表として発言出来てうれしい」という発言です。そしてその言葉どおり、私たちは地方自治体の代表なのです。

シドニー市長が先ほど言われたように、地方自治体は国民に最も近い行政体です。核兵器の製造、特に核兵器の実験の停止を求める運動は、本来ならば国家の政府よりもむしろ国民の中から沸き上がり、推進されるべきなのです。そして地方自治体は、人々の地域社会との間に直接のつながりを持っています。

ですから、私たちは永遠の平和のためにまず市民に動機を与えそして教育して行くべきなのです。われわれ地方自治体には、これを行う能力も手段もあると、私は思います。その上、核軍備に反対する姿勢をはっきり表明することも出来ます。私たちは今この会議で、平和を話し合っていますが、この会議に出席された方々は全員、それぞれの地域ですでに平和のための何らかの行動を取られてきていることは何度か耳にしました。スローガンを掲げる行進や集会に参加された方もおられますし、広島と長崎の原爆写真展を開かれた方もおられます。「核軍拡競争の停止」というタイトルのちらしやパンフレットを作って、

住民に配布した方もおられました。しかし、これらの手段や行動は、すぐに忘れられる運命にあります。ですから、それを何度も、何度も繰り返さなければなりません。言い換えれば、もっと永続的な計画を確立する必要がありますと私は思うのです。ここで、2つの提案をさせていただきます。

何よりもまず、私たちは市長として、各図書館に、広島と長崎がどういうことになったか、そして現在ならどうなる可能性があるか、つまり、核戦争が勃発したら人々はどうなるかということを示す文献を備える必要があります。

次に、川崎市長殿が議会で可決して平和公園を作ったということを言われましたが、そのように地方自治体には、公園や庭園を作るという仕事があります。ですから、私は皆様方一人ひとりがそれぞれの市に平和公園を作ることを検討されるよう提案したいと思います。平和公園は1年に1度開かれる行事とは異なり、1年中市民に開放されます。従って、平和公園なり核軍備への反対を宣言する記念碑なりを議会が建設することは、われわれ市長が市長として行うことが出来る一つの方法だと思うのです。

私は、こういった活動こそ、地方自治体が達成出来る範囲内のものだと信じております。

コーディネーター（永井道雄）

次はアメリカ、ヒロ市のカーペンター市長。

ヒロ（アメリカ）市長

ダンテ・K. カーペンター

私は今日ここに、アメリカ50番目の州、ハワイ州でも火山の島、蘭の島と呼ばれるハワイ島のとても小さな町を代表してやってきました。私は、アジア、地中海沿岸、南アメリカ、中央アメリカ、ヨーロッパ、オーストラリア、日本など30カ国以上を何度かにわたって訪問した経験があります。

しかし、広島と長崎の人々が受けた肉体的、

個人的惨事を垣間見たこの二日間ほど鮮烈な印象を受けた経験は他にありません。「百聞は一見にしかず」とはよく言ったものです。この会議にご招待下さり、皆様とこの経験を共にする機会をお与え下さったことに、心よりの感謝をいたします。

私は昨日、広島の被爆者、ハラ・ヒロシ氏とお話いたしました。そして、広島の人々は、原爆が爆発してすぐ後から今日に至るまで、原爆の後遺症に苦しみ続けて来られたことを教えて頂きました。その時発見したのですが、私とハラ氏とはほとんど同い年で、同じ年齢の子供を持ち、同じような不安や悩みを持っていたのです。

一言で言えば、私たちの家庭はほとんど同じだったのです。

国連大学のスジャトモコ博士が昨日述べられた言葉を引用させていただきますと、「被爆者そして原爆投下の後に生まれた広島、長崎の市民でさえも、人類にふりかかった惨事を忘れていない。」のです。広島、長崎の両市長殿は、お二方の世界平和に対する主張を広く訴えられました。私個人は世界平和を訴える提唱活動に特にいそしんだという経験はないのですが、それでも核兵器の破壊力がすさまじいものであること、そしてそれがエネルギーと知力の全く無駄遣いであることは容易に理解出来ます。

人口11万人、いくつかの小都市を擁するだけの小さなハワイ郡の一市長として、私は郡内の各市長に、ここ平和都市広島における永遠の平和の推進に向けて世界的規模の教育的努力を結集するよう呼び掛ける所存です。これは容易なことではありませんし、早急に達成出来る目標でもありませんが、それでも急を要する仕事に違いないことを皆様に申し上げたいと思います。

今年ハワイでは、日本人官約移民がハワイに到着した100周年を祝うお祭を行います。日本人を祖先とする多くのアメリカ人は、教育者、技術者、兵士、その他の専門職業人として、また郡、州、連邦レベルでの政界、実

業界の指導者として際立った活躍をしてまいりました。

私は、多数の広島、長崎県人会のメンバー間のつながりを強化し、今年の終わりまでに100万人を対象とする教育システムをホノルルを中心として打ち立てることを提案します。さらに、姉妹都市の関係をさらに推進して、永遠の平和を目指すこの使命を遂行する上で役立てるのもよい考えだと思います。将来、広島と世界中の多くの都市の間で姉妹都市縁組が結ばれるようになるのは、決して遠い夢ではありません。しかも素晴らしい音楽をお持ちでいらっしゃる。国際青年の年に合わせて、「ウィーアーザワールド」のような音楽を作曲して使われると、平和教育も非常に効果的になるでしょう。

日本が体験された悲劇は、世界にとって貴重な教訓です。

これらの体験を、多数の政界、宗教界などの指導者たちが世界中の人々に教え、広める必要があります。今日昼近くになって、私たちは感動的な広島平和記念式典から戻ってまいりましたが、その時、テレビでアメリカ大統領が話しているのを見かけましたので耳を傾けますと、「アメリカは、人類史上最大の戦争を終わらせるために原爆を投下した」と言っていました。当時は私もそれを信じていました。歴史をひもといてみましても、灰と化した広島街が不死鳥のようによみがえったのには、心から驚嘆させられます。

紀元前500年頃の偉大なる軍事戦略家の一人スーン・ズーは「戦争の目的は人心をつかむことであり、都市を攻撃するのは最後の手段である。」と言っています。もし彼がずっと後に核兵器が存在することになると知っていたとしたら、「絶対に都市を攻撃するな」と言っていたことでしょう。

最後に荒木市長のお言葉をお借りして申し上げます。ノーモアヒロシマ。

## テラス区(カナダ)区議会議員

ジョージ・クラーク

私は、カナダのプリティッシュ・コロンビアにある小さな都市であり、また非核地帯でもあるテラス区の代表です。

核兵器を排除する決議は、国家政府によってのみ可能であります。私たち都市の役割は、国家政府に対して、こうした決議をさせることであります。

例えば、私たちはそれぞれ自国の政府に対してロビー運動することが出来ますし、また、同じメッセージを自国の政府に送ることも可能であります。

今こうして広島に集い、どういう方針をとれば最も短時間で世界の核軍縮を達成するために最良であるかを決定し、団結して国家政府に対して訴えなければならないと思います。

ところで、私が日本に来て一番強く感じた印象は、子供たちがとても美しいということです。私にも4歳と5歳の子供がいます。世界中の子供たちは違ったように見えるかも知れませんが、同じように行動し、同じように笑います。子供たちはある意味では真の国際市民なのです。彼らのように国家主義や民族主義、政治的違いを忘れ、一団となって行動しなければなりません。都市、つまり私たちは子供たちから学ぶことが多いと思います。

## マリナー(アメリカ)市議会議員

ロバート・T. オオエ

私の名前はオオエタケジと申しまして、日系三世でございます。実は今日の私は、いわゆる三足のワラジをはいております。

まずマリナー市の前市長であり、それから1975年から現在に至るまで市議員を務めております。また、日系市民連盟北カリフォルニア、西ネバダ、太平洋地区支部の副会長も務めております。しかし、今日の私は、アメリカという国の代表としてお話ししているわけではありません。日系市民連盟は、アメリカ50州にある日系市民を構成員とする113の

支部で構成されており、これには日本の東京支部も含まれているのです。

この同盟は、アメリカ全土の約21万人の日系市民を代表する団体です。

1967年以来、われわれは核実験禁止を支持してまいりました。

明日、アメリカは8月6日となります。われわれは、8月6日にアメリカの多くの都市で、被爆者の方々の痛みを分かち合い、同時に広島と長崎の核兵器の実験と製造を止めさせるための努力を支援する行事を数多く計画しております。ここで私は、1982年に開かれました日系市民連盟の第27回全国会議で採択されました短い決議文を読み上げさせていただきますと思います。1984年の大会の決議文はあいにく持ち合わせておりませんが、1982年と1984年の決議文は同じ内容で、日付が違うだけなのです。では、読み上げさせていただきます。核兵器協約

(1) 1982年8月11日現在、アメリカ合衆国とソビエト連邦は、文明と人類を破壊するに十分なほどの核兵器をすでに保有している。また、アメリカとソ連は、1980年に大量の核兵器を備蓄することを計画しており、アメリカだけでも何十億ドルもの予算で兵器庫に8万個の新世代兵器を備蓄した。

この核兵器の備蓄によって、核戦争の危険を急激に増大させ、かつ両国が核兵器の削減をめぐる合意に達する可能性がさらに減じられる結果となった。両国がこれらの兵器の備蓄をやめることこそは、核軍拡競争を停滞させ、ひいては核保有量の削減、撤廃を実現させるため、そして国家経済を発展させ、新しい雇用を作り、絶対不可欠な社会事業を復活させるための、何より重要な第一歩である。

アメリカ国務省によると、アメリカとソ連の全体的核軍事力は大体均等だということである。以上の事柄を理由として、日系市民連盟全国会議は、アメリカ合衆国大統領並びにソ連書記長に対し、あらゆる核弾頭、ミサイルおよび運搬システムの実験、製造、配備を

直ちに停止するよう要求することを決議し、さらに議会および大統領に対し、核兵器のために支出された資金を国民のために使用するよう要求することを決議し、さらにまたわれわれアメリカ日系市民連盟は、本決議文の写しをアメリカ合衆国大統領、合衆国上院議長並びに下院議長に一部ずつ直接送付することを決議する。

次に、もう一つ採択された決定事項を読み上げさせていただきます。それは決議No.32で、被爆者と核軍備凍結に関するものです。

(2) 日系市民連盟は、広島、長崎での原爆投下によって失われた多くの命を悼む。

また、もし全体的核戦争が起こるようなことがあり、最初にソ連がアメリカを攻撃して大打撃を与えたとしても、約60もの弾頭がモスクワ市民を襲うことになると思われる。

これによってモスクワが受ける衝撃は、1945年に広島と長崎に使用されたものの1,400倍のメガトン数に相当しよう。

アメリカとソ連の両核保有国は、すでに互いに何回も破壊し尽すほどの核兵器を保有している。

また、わが国の社会的および人的資源は、核兵器の維持および配備のために膨大な金額を支出する必要があるために、大きく減じられている。そして核兵器運搬システムは、何百万人ものアメリカ人のみならず、さらに何百万人もの世界中の人々に大きな苦難を与える結果となっている。われわれは、核兵器が人類の存続にとって極めて大きな脅威となっていることを認識しなければならない。

以上の事柄を理由として、日系市民連盟は直ちに軍備の凍結をすることを支持し、わが国の多数の人々、団体、地方自治体と共に平和運動を行い、無駄で危険な核兵器の備蓄に反対することを決議する。

この決議文は、1982年8月13日に可決されたものです。広島市長殿にお渡しいたしますので、恐れ入りますがコピーをして長崎市長殿にお渡し下さい。最後に、私はこの会議で

発言されたことのほとんどすべてに同感していること、そして私の団体の代表として平和推進のために行動する所存であることを申し上げて終わりとさせていただきます。

コーディネーター（永井道雄）

ここまでで、希望のあった方は発言された訳ですが、パネラーの方々で何か発言されることがありましたら、どうぞ。

明治学院大学教授 豊田利幸

この場をお借りして、私の核軍縮を目指す努力に与えて下さった励ましに心よりの感謝の意を表させていただきます。ここで打ち明けさせていただきますと、私は過去何回か核問題に関する国際会議に出席したことがございます。これらの会議の出席者のほとんどは、核戦略家や軍備管理者、時には政府に大きな影響力を持つ人々といったいわゆるエキスパートの方々でした。そこでは、私はただ高度な議論に耳を傾けるしかありません。その中で必ず指摘されるのが、核軍縮を達成するためのいくつかの手段を実行するには多くの難題があるということです。

そしてそういう人々が忘れがちなのが、「市民」という核心的問題です。私は、何人かの影響力のある人々が時として口にした言葉を忘れることが出来ません。彼らは、「われわれは超大国間でのこうこうという形の交渉を進めているが、合意が得られるまでは、無知で煽情主義的な意見にまどわされがちな市民にこの問題を明らかにするのは危険である。」と言うのでした。

私は実のところ、この言葉を聞いて悲しくなり、これ以上努力を続けても無駄ではないかとさえ思い始めていたのです。しかし昨日と今日、この会議に出席させて頂いて、私の気持ちは全く変わりました。この会議では、市民の真の声を聞くことが出来ます。矢野教授が言われたように、あまり悲観的になってはいけません。楽観主義を捨ててはいけません。そして、この会議が超大国の指導

者たちに寄せる小さな信頼を保ち続けるべきなのです。私は、本当に勇気づけられました。

コーディネーター（永井道雄）

フロアーで挙手された方、自己紹介をしてご発言下さい。

パロアルト(アメリカ)市長代理

マイケル・H. シューマン

カリフォルニア州パロアルト市からやってまいりましたマイケル・シューマンです。

パロアルトは人口5万5千人の小さな町ですが、非核武装地帯宣言の決議、地元の平和運動グループの活発な活動にかけてはアメリカでも草分け的な存在です。

私はここで、われわれが地方自治体としての行動を効果的な軍縮運動へと変えて行くにはどうしたらよいだろうか、という質問を提起したいと思います。と申しますのも、私はこれが非常に重要でかつ現実的な問題であると考えからです。

またさらに現実の問題として、この会議を今後も存続させるには、この会議を軍縮のために共に働く市長たちの常設の連合とするにはどうしたらよいかという問題もご一考願いたいと思います。

永遠の平和を達成するという目的を実現するためには、この組織に効果的な骨組を持たせる必要があります。また、その仕事を行うためにはある程度の財源も必要です。これは広島と長崎での滞在費などのためでもあります。われわれが今週参加した行事の費用は、膨大なものであるに違いありません。この点に関してかくも多大な市の予算をこの会議を支援する日本国内の諸団体から集められた資金をささげて下さった広島・長崎両市長殿に心よりの感謝の意を表します。広島・長崎両市にとって毎年このような額の資金を出していくのは、極めて困難であることは想像に難くありません。そこで、私を含む列席者全員の方々に、広島・長崎両市に資金援助をすることを提案致します。

昨日、私は一つの書類をお渡しいたしました。かなり長いので、勿論全部お読みになる必要はありません。ただ、私の言っていることの骨子をつかんで頂けたらと、お渡ししたのです。最初の3ページに、集められた資金をどのようにプールしたらよいか、そして国際的な圧力団体となるにはどういう方法があるか、について非常に具体的な提案を書いています。例えばその中の一つに、この会議の組織から永遠の平和を求める国際組織としてのニューズレターのようなものを発行してはどうか、という提案があります。そのためには、是非各人の住所のリストを作る必要があります。またそれをもとに、互いに継続的に連絡を取り合うことも必要です。

またさらに、私は広島・長崎の事務局の方々に、われわれが引き続き連絡を取り合い、それぞれが何を実行し何が達成されたかの情報が全員に流れるように是非とも便宜を図って頂くよう強くお願いいたします。もう一つ、今後はこの会議に列席されている全市長殿に、それぞれの市の人口一人当たり10セントのご寄付頂くよう提案いたします。ちなみに、私の市の場合、寄付の額は全部で5,000ドルになると思われます。また、ここにいる全員が何らかの助力をすること、あるいはこの努力をさらに推し進めることを約束する一種の誓約のようなものをするべきだとも考えます。私は、われわれが来年も、そしてその後も回を重ねてここ広島に集い、軍拡競争を止めさせ、永遠の平和を実現するための話し合いをすることが出来るよう切に願います。

また、年間1兆ドル近くにもものぼる軍事費の支出に反対する会議も数多く開かなければならないとも考えます。核軍縮を推進するためには、何年間もの努力と何億ドルもの資金が必要です。私は皆様方に、出来る限りの資金と時間を核軍縮と平和の推進のために投入されるよう提案いたします。

コーディネーター（永井道雄）

今の問題に関しては、この後4時半からお



語りする「広島アピール」の中で触れておりますが、このことについて発言したい方がございましたらどうぞ。

バンクーバー(カナダ)市長  
マイケル・F.ハーコート

私は、バンクーバー市長、マイケル・ハーコートです。

私は、この会議があらゆる姉妹都市関係を推進してゆくために機能する、そして地方自治体の相互活動の全体を包括するような役割を恒久的にはたすことを提案したいと思います。

また私は、世界における二大核超大国であるアメリカ合衆国とソビエト連邦における都市間の姉妹都市化を主張したいと思います。

実はその目的のために、私は、数カ月前にガンで亡くなった若いシアトルのフィルム製作者の父親から、その息子が製作したフィルムを荒木市長に手渡すように頼まれました。そのフィルム製作者の名前は、マロー・ボイヤーといい、「ピープル・トゥ・ピープル」という題名のドキュメンタリーです。

それはシアトル市と姉妹都市であるタシケント市の市民間の交流に関するものですが、この例にならって、アメリカ合衆国とソビエト連邦の市民間の交流を促進してゆくことを、提案いたします。

また、マロー・ボイヤー氏と、彼の父親になり代わり、このドキュメンタリーを異国間の市民が交流し、軍縮や平和について語り合うと何が生まれ得るかという一つの実例としてご紹介し、荒木市長にお渡ししたいと思っております。

コーディネーター(永井道雄)

バンクーバー市長の発言は極めて具体的なものです。

シアトルとタシケント市の「ピープル・トゥ・ピープル」の記録を引用して、このようなツイン関係をもっと作った方が良いという提案です。

パロアルトの方は、同市は人口5万人ですから、事務局の運営などのために5千ドルくらいのお金は作ることができるということです。

これらのお話は記録されております。一考に値する提案であると思います。

オタワ(カナダ)市長 マリオン・デュワー

私はカナダのオタワ市長、マリオン・デュワーです。

先ず、私を含み世界中の市民は、広島・長崎両市長に対し、非常に重要な提案をしていただいたことについて、深く感謝の念を示したいと存じます。この両市長によるご提案は、原爆被爆によって亡くなられた多くの人々の死が無駄ではなかったことを意味します。

また、私たちはこの会議の恒久制度化の方法について議論してきましたが、それぞれの国には、地方自治体を包括する連盟があると思います。もしそうであれば、一つの提案として、ここで決めたこの会議を恒久化させるという計画をそれぞれの国に持ち帰り、その組織を通して自国の全ての都市および市民に伝えることが出来れば、計画の実現がより容易になると思います。そして、もし世界中の地方自治体の連盟がこの会議に参加すれば、この会議の組織はより強力になり、より意義深く影響力の大きなものになることでしょう。さらに、この会議がより大きな財政援助を得ることにもつながると思います。

コーディネーター(永井道雄)

今の発言も非常に具体的なことです。市長の全国的な組織を通じて、このような都市連帯の輪をもっと広げることができるであろうし、組織を作っていく上でも確実なベースになるというご意見であろうと思います。

他に発言がなければ、休けいの後、4時半にまたお集り下さい。広島アピールのコピーを皆さんにお配りして、広島・長崎の市長がそれを発表する予定です。



司会（山田広島市市長室次長）

皆様には、この2日間、有意義なご意見並びに熱心なご討議をいただき、ありがとうございました。

このあと、4時半からこの会場で、広島アピールの発表を行います。

# 広島アピール発表

101

8月6日(午後4時30～4時40分)

広島グランドホテル(孔雀の間)

司会 広島市市長室次長

山田 康

コーディネーター 国連大学学長特別顧問 永井 道雄

## 1. 広島アピールの発表..... 103

広島市長

荒木 武

## 2. 広島アピール起草についてのコメント..... 103



コーディネーター（永井道雄）

起草委員会はこれまで昨晚と今朝の2回、  
会合をもちました。そこで、広島アピールを  
起草しましたが、真剣な討論が行われ、この  
草案をいろいろな角度から検討いたしました。  
その案は広島・長崎両市長に届けられ、

共に満足していただいております。これから  
広島市長にこのアピールを発表していただき  
ます。

広島市長 荒木 武

広島アピールを発表いたします。

## 広島アピール

われわれ、23か国98都市の代表は、広島に集い、核兵器のない真の平和の構築に寄与するた  
め「第1回世界平和連帯都市市長会議」を開催するに至った。

40年前のこの日、人間性を無視した原子爆弾が、歴史上初めて投下され、一瞬にして広島を  
壊滅させ、多数の尊い人命を奪ったばかりか、今なお多くの被爆者に後遺症の苦悩を強いてい  
る。この被爆の実相をつぶさに見聞した。その惨禍は、想像を絶するものであり二度と繰り返  
してはならないと痛感した。

われわれは、ヒロシマの体験をみずからの体験とし、これを過去の単なる一事実ではなく、  
人類の未来への限らない警鐘として受けとめ、核兵器廃絶と世界の恒久平和のために努力を傾  
注することを誓い合った。市民の生命と財産を守り、営々と築いてきた都市の歴史と文化を後  
世に遺すために、国境を越え、思想・信条の違いを超えて連帯し、堅い友好の絆によって、結  
び合うことを確認した。

今や、核兵器の廃絶こそ最優先の課題である。核実験の即時全面禁止が急務であり、非核武  
装地帯設定、非核都市宣言を支持するなどの諸行動の積極的な展開に努める。また、宇宙空間  
の軍事化を防ぎ、核兵器廃絶への国際世論の喚起に尽力する。さらに、協調と相互理解の精神  
に立って飢餓・貧困の絶滅に努める。われわれは、米ソの指導者が、核軍縮、核実験・核兵器  
の開発及び生産の停止のためにお互の指導力を尊重しあうことを訴える。われわれは、世界各  
国に対し適切な対処を求める。われわれは、国連に対して、第3回軍縮特別総会の早期開催  
を強く要請する。われわれは、来年の国際平和年を意義あるものとするための諸企画を積極的  
に実施する。

われわれは、ここに、世界平和連帯都市市長会議の名において訴える。何よりもまず世界の  
人びと、なかんずく各国の指導者は広島を訪れ被爆の実相を知るべきである。そして、平和と  
生命の尊さに改めて思いをいたし、再び過ちを繰り返さないために、不信と対立とを克服し、  
都市と都市、市民と市民との連帯によって、軍縮への前進的な努力を積み重ね、恒久平和のゆ  
るがぬ基盤を築き上げよう。

われわれは、この会議が恒久的のものであり、その事務局が広島市に置かれることを望み、今  
後も、より多くの都市が広島に集まり、“平和の灯火”をもやしつづけることと信じる。

昭和60年8月6日

第1回世界平和連帯都市市長会議

コーディネーター（永井道雄）

起草委員会では、英語を基本的なテキスト  
とすることで合意を得ております。ただ今、

英語をもとに日本語に翻訳したものを発表し  
ていただきました。

ほかにフランス語のテキストもあり、ドイ

ッ語も準備中ですから4ヵ国語のテキストがあることになります。もし、必要な修正があれば英語に基づいて行います。このことをご了解いただきましたら、ここで広島アピールの採択に移ります。反対のご意見を表明される方は挙手をお願いします。

反対意見なし

これは全会一致の同意であると言えます。  
ありがとうございました。

広島市長 荒木 武

この会議を主催いたしました広島市民並びに長崎市民を代表して、皆さんのご参加を得て、このように盛大な会議を開催することができ、また本日は、広島アピールを全会一致で採択されましたことに心からお礼申し上げます。

ありがとうございました。

長崎市長 本島 等

明後日から2日間、皆様には長崎においていただくわけでございます。長崎は1571年にポルトガルの宣教師によって開かれ、また日本で初めてヨーロッパに向けて4人の少年使節が船出した町です。その彼らはマカオ、マラッカ、ゴア、ケープタウン、セントヘレナ、そしてポルトガルリスボン、スペインのマドリッドを経てイタリアのローマに着き、全行程8年5カ月を費やして帰って参りました。しかし帰ってきた彼らを迎えたものは、キリシタン弾圧の嵐でした。

その後220年間、長崎は日本の唯一の開かれた町として日本で唯一つ外国貿易が許されていた町です。そして1945年、一発の原子爆弾が投下されたのです。

長崎市民はもろ手を挙げて皆様をお待ちしております。長崎は東洋のナポリといわれるほど景色のいい町です。

皆様方が長崎で、原爆とは何か、世界平和とは何か、われわれが都市の責任者として為

すべきことは何かということを、どうか一緒に考えてほしいと思います。

皆様方のおいでを心からお待ち申し上げます。ありがとうございます。

コーディネーター（永井道雄）

このアピールについて付け加えます。

オタワ、パロアルト、バンクーバー、アーバインの方々がこの会議を制度化したいと言われましたが、このことはアピールの最後の段落にあります。つまり、“われわれはこの会議が恒久的のものであり、その事務局が広島に置かれることを望み、今後もより多くの都市が広島の地に集まり、平和の灯火を燃やし続けることと信じる。”とあります。しかしこれは非常に抽象的な表現になっておりますので、具体的な提案に対しては、事務局から返答していただく方がよいと思います。

司会（山田広島市市長室次長）

この広島アピールで、恒常的な事務局が広島に置かれるよう望まれております。ご提案のありました件については、この事務局を中心に検討させていただき、後で、各都市にその結果をご報告させていただきたいと思っております。

コーディネーター（永井道雄）

時間が無いため、この段階で色々な提案をまとめることはできそうにありませんので、山田さんのお話のように、また提案は全て記録してありますので、検討の結果を書簡などの形で各都市に連絡していただくこととなります。そういう形で会議の恒常化を図りたいと思います。

司会（山田広島市市長室次長）

以上をもちまして、広島での会議の全てをとどこおりなく終了することができました。皆さんどうもありがとうございました。

# 全 体 会 議 Ⅲ

105

8 月 8 日 (午前 9 時～9 時20分)

長崎市平和会館

1. 司会あいさつ..... 107

長崎国際文化会館館長

松永 照正

2. 開会あいさつ..... 107

長崎市長

本 島 等

3. 来賓祝辞

長崎県知事

高 田 勇..... 108

長崎市議会議長

中島 公彦..... 109





司会（松永長崎国際文化会館館長）

私は、本日の司会進行を務めさせていただく長崎国際文化会館館長の松永でございます。皆様ようこそ長崎にいらっしゃいました。長崎市民はもとより長崎の海も、長崎の山も、長崎全体が皆様方を心から歓迎申し上げております。では、ただいまより第1回世界平和連帯都市市長会議の全体会議Ⅲを始めさせていただきます。大会に先立ちまして長崎市長本島 等がごあいさつ申し上げます。

## 開会あいさつ

長崎市長 本島 等

みなさん、ようこそ長崎にいらっしゃいました。

長崎市民を代表して、第1回世界平和連帯都市市長会議にご参加のみなさんに歓迎のごあいさつを申し上げる機会を得ましたことは大変光栄でございます。

長崎は1571年ヨーロッパからの宣教師によって開かれた町で封建幕府による鎖国300年間も日本で唯一の貿易港として栄えた町であります。外国の文化が、長崎を通じて日本に流入してきたのであります。年中行事にもまた毎日の生活の中でもヨーロッパと東洋と日本のものが混然と融合して一体となったのであります。国際的な物の見方と平和・協調を愛する心が長崎市民の心の中に育ったと思っています。

第二次大戦の末期にこの会場のすぐ近くで一発の原子爆弾が、炸裂いたしました。太陽の爆発と思われた青白い大閃光が走り、天と地がとどろきました。その瞬間、長崎の西北部は地上から姿を消しました。一発の爆弾で15万人の死傷者が出ました。市民は爆風で吹飛ばされ、熱線で焼かれた皮膚はたれ下がり、狂気の如く水を求めてはいずりまわりました。

た。かろうじて即死を免れた者には、忌まわしい放射線がしのびより、髪は抜け、歯ぐきから血を出し、身体は紫色になって死んでいました。

人の命とか人間の尊厳とかは考えられもしない状況でした。

しかも、戦後長い間原爆のために病魔と闘いそのあげくに亡くなった人、また、社会生活の中で被爆したという事実のために、思いがけない不自由な生活を強いられた人も多いのであります。

核兵器は、人類を滅亡させる可能性があることを体験した長崎市民は人類の戦争の時代は終わったことを認識しました。それ以来、人類の立場から、核兵器廃絶と、世界恒久平和を訴え続けているのであります。

今日、人類は人種、国籍、宗教、イデオロギーにかかわらず世界平和のために手をむすぶことが、どれほど大切なことであるかを長崎市民は訴え続けて参りました。人類が現在手をむすびそこなったら、人類は自らの作り出した核兵器で自滅すると私は思います。

平和を脅かす問題は核兵器だけではありません。現在世界全体で軍事面に投じられている費用は莫大な額——9,000億ドルに上ると言われております。この軍事支出は、どの国でも国家財政を圧迫し、経済に暗い影を投じております。

核兵器のみならず通常兵器の無制限の拡大にもわれわれは眼を向け、通常兵器の軍縮も訴えなくてはいけないと思うのであります。

次に現在地球上には飢餓問題をはじめ、たくさん問題があると思います。

私たちは、風習や伝統や文化は異なっていますが、人類としては同一であります。従って地球上の大きな問題には、人類の立場から取り組む必要があると思います。いろいろな交流を通じてまずお互いの理解を深め、次に手を合わせていろいろな問題の解決に進みたいと思います。この際大切なことは、お互いの差異を強調するのではなく、大きな寛容の精神で差異を包み込むことであり、人類はすべ

て同じであるという観点から進んでいかなければならないということでもあります。

私は、今こそ人類は、これまで歩いてきた道をふりかえり自らの襟を正し知性と理性を働かし、勇気をもって新しい道を歩まねばならないと思います。その第一歩として、この世界平和のための都市の連帯が強くむすばれ、世界に大きくひろがることを念じるものであります。

私はこの世界平和連帯都市に、この会議に参加する都市はもちろん、この会議の趣旨に賛同する都市にどんどん入って頂きたいと思います。全世界の都市が入ることを希望いたします。従ってこの会議が2回、3回と続けられることは必然であります。長崎市はこの会議の開催をいつまでも歓迎するものであります。

本日は全世界22カ国65都市と日本国内の市長さん方をおむかえして平和についてお話し合いできることは、まさに感激であります。私たちは21世紀へむけて新しいページ、平和のページをめくりたいものであります。本日の会議がみのり豊かなものであることを念願してごあいさつといたします。

どうもありがとうございました。

## 来賓祝辞

長崎県知事 高 田 勇

本日、ここに「第1回世界平和連帯都市市長会議」が世界22カ国65都市と国内16都市の参加を得て、盛大に開催されるにあたり、ごあいさつを申し上げる機会を得ましたことは、私の最も喜びとするところであります。

世界中からお集まりの皆さん、今でこそ、ここ長崎の町は、家も建ち並び車の往来も人の行き来も激しい都市となっておりますが、今から40年前、一発の原子爆弾により、一瞬

のうちに家も車も吹きとばされ、人は焼けただれ、まさに生き地獄と化してしまったのであります。一瞬の爆風、熱線により7万数千の生命が奪われ、同じく7万有余の人々が傷を負ったのであります。

こうして長崎市は、広島市とともに核兵器による人類史上、最初の惨禍を受けた被爆都市となったのであります。

そしてあれから40年たった今日、世界の現状を見ると、核兵器廃絶の訴えもむなしく、世界はいたるところ核兵器の脅威にさらされております。

しかしながら、いかなる理由があれ、世界のいずれの地においてであれ、戦争は絶対にさけなければならないのであります。それは、これからの戦争が核戦争時代に拡大していく危機をはらんでいるからであります。

今日、核兵器の恐ろしさは誰ひとり知らぬものはなく、核兵器の廃絶と軍縮は世界の超大国をはじめ、何人も異論はないはずであります。

しかし、残念ながら現実はそうっておりません。まさにこの問題は総論において賛成、各論において反対の典型となっているのであります。これは何故か、私は各国それぞれに、エゴと相互不信があるからにほかならないからであると考えております。

今こそ、人種、宗教、政治、イデオロギーの違いを乗り越え、国際的な都市間の交流により、世界の緊張を緩和し、核軍縮、世界平和を目指す時期であると思います。

あの日、あの時の十数万の死傷者、そして今日、なお後遺症に苦しむ人々は、まさにこれからの核時代に、この地球上に生き続ける人類の先駆者であり、われわれはこれらの尊い犠牲に従って世界の各国が核兵器廃絶に向けて、核軍縮を着実に推進し、全人類の願いである世界平和を一日も早く実現できるよう願ってやまないものであります。

この意味において、全世界の人々が手をつなぎ、心をひとつにして被爆地「長崎」で被害の実相に触れ、「平和構築への都市の役割」

について論議され、交流され、平和の障害となっているさまざまな問題を解決し、克服していくことは、世界恒久平和への道であると信じます。

わが長崎県は、日本の西の玄関に位置し、古くから諸外国との交流の窓口として、その役割を果たしてまいりました。交流の精神は、今もなお、県民の心に脈々と流れ、生きつづけております。私はこの特性を生かし、世界各国との交流を深めることによって友好関係の樹立を図り、長崎県民として、人類全体に対して有する国際平和のための責務を遂行していきたいと考えております。

決意も新たに、自由と平和を守り、明日の繁栄を築くため、戦争の根絶と世界平和の確立に努力を重ねてまいる所存であります。

第1回世界平和連帯都市市長会議長崎会議が、所期の成果を収められ、連帯の輪が全世界に波及し、一日も早い世界恒久平和が達成されますよう祈念いたします。

終わりに、本会議に参加されました各都市の御発展と、皆様方の今後ますますの御活躍と御健勝をお祈り申し上げまして、私のごあいさつといたします。

## 来賓祝辞

### 長崎市議会議長 中島公彦

長崎市議会議長の中島公彦でございます。

この炎暑の中、第1回世界平和連帯都市市長会議の長崎会議にご出席いただきました皆様に対し、長崎市議会を代表いたしまして心から感謝申し上げます。

とりわけ、世界22カ国65都市からご出席いただいた市長の皆様には、何彼とご苦労があったことと存じます。ここに改めて、連帯と歓迎の意を表するものでございます。

今を去る40年前、広島に続いて投下された

一発の原子爆弾は、この美しい長崎の街をこの世の地獄と化しました。その悲惨さ、残酷さはとうてい筆舌に尽くせるものではありません。しかも、辛うじて生命をとりとめた被爆者は、今もなお原爆後障害で苦しみ、死の恐怖におののいています。

身をもって原子爆弾の惨禍を体験した長崎市民は、再びこのような過ちを地球上に繰り返してはならないと決意し、「平和は長崎から」を合言葉に核兵器の廃絶と世界恒久平和の確立を全世界の人々に訴え続けてまいりました。

しかしながら、自国の防衛と安全を口実に核軍備拡大競争は激化の一途をたどり、いまや広島型原子爆弾の百万倍にも達する核兵器がこの地球上に蓄積されているといわれ、核戦争の危機が高まっています。

まさに、人類は、存亡の岐路にたっているといっても過言ではありません。

このような中で、思想、信条、体制の違いを越え、平和を希求する世界の都市の首長が一堂に会し、核兵器の廃絶と人類永遠の平和をめざして会議を行うことは、平和運動の歴史に新しい一頁を開くものであり、喜びに堪えません。

この会議が、有意義のうちに終了し、核兵器の廃絶と世界の恒久平和実現への展望を切り開くことを心から期待するものでございます。

終わりにりましたが、この会議を準備されました広島・長崎の関係者の皆様のご労苦に対し心から敬意と感謝の意を表し、あわせて、ご出席いただきました皆様方のご健勝と各都市のますますの繁栄を祈念いたしまして、私のごあいさつといたします。



## —平和構築への都市の役割—

8 月 8 日 (午前 9 時 20 分～正午)

長崎市平和会館

1. 司会あいさつおよび議長指名…………… 113  
長崎国際文化会館館長                      松永 照正
2. 議長指名受諾のあいさつ…………… 113  
長崎市長                                      本 島 等
3. コーディネーターあいさつ…………… 113  
名古屋大学学長                              飯島 宗一
4. 各都市の報告  
都市報告 1 アカプルコ(メキシコ)市長  
アルフォンソ・アルグディン・アルカラス…………… 114  
都市報告 2 アムステルダム(オランダ)市助役  
ティネケ・ヴァン・デン・クリンケンベルク…………… 115  
都市報告 3 アントワープ(ベルギー)市議会議員  
G. デコルテ…………… 116  
都市報告 4 コモ(イタリア)市議会議員  
ミノ・ノセダ…………… 117  
都市報告 5 コベントリー(イギリス)市長  
ウイリアム・マッケーナン…………… 118  
都市報告 6 ジュネーブ(スイス)市長  
ロジャー・ダフロン…………… 119  
都市報告 7 アーバイン(アメリカ)市議会議員  
ラリー・A. アグラン…………… 121  
都市報告 8 レムゴー(ドイツ連邦共和国)市長  
ラインハルト・ヴィルムブーセ …… 122  
都市報告 9 リスモア(オーストラリア)市長  
ロバート・W. スキューリン…………… 123  
都市報告 10 エジンバラ(イギリス)市長  
ジョン・H. マッケイ…………… 125



|             |                                              |     |
|-------------|----------------------------------------------|-----|
| 都市報告11      | ルサカ(ザンビア)市長<br>M. C. サタ .....                | 126 |
| 都市報告12      | マグデブルグ(ドイツ民主共和国)市長<br>ヴェルナー・ヘルツィッヒ .....     | 127 |
| 都市報告13      | ミデルブルフ(オランダ)市助役<br>M. ビンケ .....              | 128 |
| 都市報告14      | オタワ(カナダ)市長<br>マリオン・デュワー .....                | 129 |
| 都市報告15      | レッジョ・エミーリア(イタリア)市議会議員<br>ジョルダノー・ガスパリーニ ..... | 131 |
| 都市報告16      | サラトガ(アメリカ)市長<br>バージニア・L. ファネリー .....         | 132 |
| 都市報告17      | ザンクトウルリヒ(オーストリア)村長<br>タドオイス・シュタインマイヤー .....  | 134 |
| 都市報告18      | サンシャイン(オーストラリア)市長<br>イアン・M. ミル .....         | 135 |
| 都市報告19      | トリノ(イタリア)市助役<br>ジュゼッペ・ロディ .....              | 136 |
| 都市報告(追加発言1) | 那覇市長<br>親泊 康晴 .....                          | 138 |
| 都市報告(追加発言2) | ピストイア(イタリア)市長代理<br>ルチアーノ・パリーニ .....          | 138 |
| 都市報告(追加発言3) | ニューポート(イギリス)市長<br>シリル・サマーズ .....             | 139 |
| 都市報告(追加発言4) | 北九州市長<br>谷 伍 平 .....                         | 140 |

|                  |     |
|------------------|-----|
| 5. 被爆体験の報告 ..... | 142 |
|------------------|-----|

司会（松永長崎国際文化会館館長）

これより全体会議Ⅲ「平和構築への都市の役割」の会議を始めさせていただきたいと存じます。この会議の進行にあたりまして議長に長崎市長の本島等を指名させていただきたいと思います。それでは本島市長お願いいたします。

長崎市長 本島 等

長崎での会議を通じて議長を務めさせていただきますので、よろしくお願いいたします。

この会議では世界平和を実現するために、都市が取り組まなければならない問題点とその対応策について19都市から発表をしていただき、その後、意見交換を行います。

午後は、原爆映画の上映、被爆者との懇談、原爆資料センターの視察を行う予定にしております。

明日はこの会議の総まとめといたしまして、「長崎アピール」を採択し、つづいて「第3回国連軍縮特別総会への対応方針の確認」を行いまして、長崎での会議を終わりたいと存じます。

なお、長崎アピールの起草委員に本日の意見発表都市の中からオランダ王国のアムステルダム市・スイス連邦のジュネーブ市・アメリカ合衆国のアーバイン市・ドイツ連邦共和国のレムゴー市・イギリスのエジンバラ市・ドイツ民主共和国のマグデブルグ市・カナダのオタワ市・オーストラリアのサンシャイン市・イタリアのトリノ市・中華人民共和国の福州市の10都市の市長さん方を指名させていただきたいと思いますのでよろしくご承諾をお願いいたします。

それでは、これより会議に入りたいと思いますが、コーディネーターを名古屋大学学長の飯島宗一先生をお願いいたします。

飯島先生よろしくお願いいたします。

コーディネーター（飯島宗一）

ただいまご紹介にあずかりました飯島でございます。この会議のコーディネーターを務めさせていただきますのでどうぞみなさんのご協力をお願いいたします。先程議長からお話がありましたように、今日の午前中の会議では19の都市の代表の方にそれぞれご意見を発表していただきます。時間は非常に限られておりますので、たいへん残念でございますけれどもだいたいお1人5分間くらいの時間の範囲でご意見を述べていただきたいと思います。またもし時間があまりありましたら、その他の方々からご発言を頂きたいと思っております。それでコーヒープレイクの前に9都市、コーヒープレイクの後に10都市からご発表をいただきます。そしてこれも今議長からお話がありましたように、この長崎の会議でのご意見をとりまとめて長崎アピールを9日の閉会の会議でご採択いただきたいと思います。

その起草委員会には、今日の午後、さきほど議長からご指名がありました起草委員の都市の方々にお集まりいただいて検討いたしたいと思っております。どうぞ会議の進行についてご協力をお願いします。

それでは前半にご発言をいただく9つの都市の代表の方々には壇上にお上りをいただきます。メキシコのアカプルコ、オランダのアムステルダム、ベルギーのアントワープ、イタリアのコモ、イギリスのコベントリー、スイスのジュネーブ、アメリカのアーバイン、西ドイツのレムゴー、オーストラリアのリスマア、どうぞ壇上をお願いいたします。

## 都市報告 1

アカプルコ(メキシコ)市長  
アルフォンソ・アルグディン・アルカラス

私はメキシコのアカプルコ市長のアルフォンソ・アルグディン・アルカラスでございます。私は荒木武・本島等両市長の呼び掛けに応じ、宣言を承認するためにここにやってきました。

広島と長崎の上空で核爆弾が炸裂した時、人類は人類全体を破滅させうのだと悟ったのであります。また、その直後世界平和を維持する助けとなるように国連が創設されたことも知っております。しかし、今日ますます増大する核の力によって、私共は自分自身の運命の行方をコントロールすることができなくなっているのであります。私共の生死が見知らぬ他者の手に委ねられているのであります。核保有超大国の少数の人々と兵器が、そして恐らくは近い将来には少数のテロリストたちが世界の終わりを決定するようなことになりましょう。最も不条理なことは、平和を愛する国々であっても戦争に資源を費やさなかったり、費やせなかったりする国々は、核保有国によってこのような事態に直面させられているのであります。なぜならば核保有国が新しい強力な兵器の出現で、無用かつ無意味なものとなってしまう古くさい戦争の理論を押しつけるからであります。地球全体やその住民を何千回も殺せるような核戦争の時代に『軍事的優越』とか『核のバランス』などというのは一体何であるのかと尋ねる人もいるでありましょう。しかし私共が協力して私共の各都市に住む人々の声を集め、私共の生きる権利を守るための統一された叫びとすれば、危険は避けられるのです。

さて、ここで歴史を引用することをお許し頂きたいのであります。かつての封建的な支配者や貴族は、世界のほとんどの国から姿を消しました。一般の市民が彼らに打ち勝った

からであります。つい最近まで子供も女も男も健康に適当でない工場で、労働時間も年齢も健康状態も休暇も考慮されることなく、低賃金で働いていたのであります。工場主たちは裕福で強力で権力的で、誰もがこれ以上の現実はありませんと思っておりました。組織労働者や労働組合などが、それをすっかり変えてしまったのであります。昔は戦いが絶望的に見えたこともありました。今日、多くの人々が核兵器の禁止に成功するなんてありえないと考えております。しかし私は尋ねたいのです。「世界の大人口を擁する都市の連帯を通じて、この戦いに勝利を収めることができるだろうか」と。答えは「できる!」という声の大合唱であると私は確信しております。

戦争とは暴力の形をとった政治の延長であり、政治家たちが戦争を遂行し、使用できる戦略や武器を裁量するのであります。彼らは世論を気にします。特に広範な支持を受けているかどうかを気にするのです。第一次世界大戦で毒ガスが使われたことを覚えておられますでしょうか。第二次世界大戦では使われなかったのであります。何故でありましょうか。おそらく報復を恐れてということもありましょう。しかし世界の世論がそれに反対だったからでもあります。従って全く同じことが核兵器の場合に起こっても不思議ではないでしょう。われわれは世界平和を守り、われわれが生き続けるために努力を続けなければならぬと思うのであります。

この点に関して、国際政治の分野においてわがメキシコ国は、常に平和・独立・人権を優先してまいりました。われわれは諸国の政府と国民の間に、正義ののっとった平和な関係を目指して努力するものであります。われわれは何者であれ、またどのように強い国であれ、小国が自決権を求めて苦しい戦いをしたり、国家間の問題に平和的な解決策を見い出そうとするような国内問題について干渉することのないように戦います。

このような考え方に従って、メキシコはほ

は2大陸にわたる地域で、核兵器を禁止する世界最初の地域条約成立の促進に寄与いたしました。その条約の正式名は『ラテンアメリカにおける核兵器の禁止に関する条約』と言いますが、1967年2月14日に首都のメキシコ市のトラテロルコにある外務省の建物の中で調印されたので『トラテロルコ条約』とも呼ばれるものであります。この条約は核兵器の拡散を防ぎ、平等と尊敬と良き隣人関係に基づく世界平和を強固なものにすることを主たる目的としており、核兵器、大量殺りく兵器の使用や製造を禁じ、全面的軍縮を実現させる手段として、軍事的非核地域を創設することをねらいとしたものであります。それはわれわれに義務を課すものであります。すなわち調印国は、現在の核（エネルギー）施設を平和目的に利用することに同意し、自国内における核兵器の製造、設備据付けおよび実験を自分たち自身であれ、代理人を通じてであれ禁止することに同意するという義務を負うのであります。

現在までのところ、ラテンアメリカの唯一の未調印国はキューバであります。アメリカがグワタナモにキューバ国の意向を無視して基地を保有していることを理由にしております。

さらに長年にわたる努力がノーベル平和賞をメキシコのアルフォンソ・ガルシア・ロブレス大使にもたらしたのですが、数日前、同大使の演説を皆様は広島でお聞きになったのであります。

終わりに各都市の市長の皆様が平和を守るためにここに集まっていられいますので、アカプルコ市は、平和を愛し、メキシコ人の伝統である手厚い歓迎をいたしまして、トラテロルコ条約やその他のいかなる核の危険を永久的に排除する外交的手段を熱心に支持するものであることを宣言いたします。アカプルコ市は、地理的位置、気候、自然の美しさとそして何にもまして世界中からの訪問者へのもてなしの温かさによって友好を促進し、肌の色、人種、信条、宗教による差別な

しに平和と愛の環を創っているのであります。私とその代表者であります市当局の決定により平和実現の手段として、各都市の間の友好関係を育ててまいりました。

その証しのひとつは、当会議終了後、私はこの美しい国の都市、御宿と仙台へ1975年と1978年にそれぞれアカプルコで調印された友好協定を批准するために赴くことになっております。その後、中華人民共和国へ参りまして青島市と文化経済観光交流協定を結ぶことになっているのであります。これらの都市に参りました折には、われわれがここで討議したようなことを実行する機会もありましょうし、さらにその後には、姉妹都市であるスペインのマラガ市、カナダのケベック市、イスラエルのナタニヤ市、アメリカのビバリーヒルズ市、フィリピンのマニラ市の各市とただ今申し上げました日本の御宿と仙台とにお知らせすることでもできるであります。

日本に進歩と繁栄と平和への取り組みの成功と、さらに何よりもまず、日本の方々に平和で実り多い未来があらんことを心より希望するものであります。

## 都市報告 2

アムステルダム(オランダ)市助役  
ティネケ・ヴァン・デン・クリンケンベルク

平和のために取り組んで闘っておられる、ほとんど全世界からとも言えるべき多くの皆様方とこうして交わる機会を得まして、この会議に出席できますことを、私は幸いに存じております。

平和構築への都市の役割について意見を交換しあうのは大変重要なことだと私は考えております。秋月氏がそのスピーチ“知り合うことが平和への門”の中で述べられたように、思想体系の異なる人々が互いを理解し友情の

きずなをはぐくむことは大切です。それがわれわれの動機でもありますし、こうしてこの会議に出席したり、英国のマンチェスターやニカラグアのマナグアと友好都市のきずなを結んだのもそのためであります。

オランダでは、核巡航ミサイルの配備に関して中央政府は大変重要な決定を目前に控えております。政府は現在に至るまでこの決定を引き延ばしております。理由をあげますと、教会、婦人団体、労働組合、政治団体などが参加して集団デモがありましたし、オランダの世論調査では大多数がこの配備に反対しているということが明らかになったからであります。政府は決定を遅らせることによって国民がこの問題を忘れてしまうと予測したに違いありません。ところがこの夏、平和運動はいわゆる平和請願作成へ向けて動き出しました。これはオランダ議会へ提出するようできるだけ多くの配備反対署名を集めるためなのであります。これは明らかに第二次世界大戦の残虐さ、ナチズムと民族主義の結託、2つの原爆投下、狂気的な軍拡競争を経験して、ついに人々はこれらが無くなることを願い、反対するようになったことを示しているのであります。

オランダは小国ではありますが、巡航ミサイル反対の声は世界の平和運動にとってはとてつもなく大きな機動力にもなり得るのであります。

アムステルダム市は、平和請願の作成をあらゆる方法で支持しています。これがわれわれの市の重要な役割なのです。その上、アムステルダム市によって公立学校委員会が設立され、そこで市は教育計画に影響を及ぼしています。戦争と平和の問題、例えば一方にわれわれの植民地主義の歴史があり、また他方にナチの占領に対する勇敢な抵抗があったことを生徒たちに教えています。若者たちは何が世界の大問題であるか、どのような運動が起こり、また続いているか、これらの問題を解決するのにどのような変革が

必要とされているかをわきまえなければなりません。

権利をはく奪された人々に変革を差しのべ、解放の機会を与えるわれわれの努力はそれと強く結びついています。

平和のためには、知識者や確信のある人々が自由に自分たちの意見を確立することは大切なことであります。

従って、市政はこれらのことを支援しなければなりません。

## 都市報告 3

アントワープ(ベルギー)市議会議員  
G. デコルテ

平和教育と申しますと、私たちはそれを知る以前からかかわりをもってきました。実際のところすべてのすばらしい教育というものは平和教育をいうのであります。子供たちは運動場でけんかしたり、教室で他人をねたんだり、偏見をもったりします。同様に互いに協力してみんなで決めたことに従ったりします。学校の先生はこういった問題に毎日直面しているのです。こういうわけで生徒には、直接に幅広く接することが望ましいのです。

この普遍的教育に到達するため幅広い指導力を身につけるには、日頃の現状と自分の経験に注目することから始めねばなりません。平和教育というのは、実際のところ教室でけんかがあった時、それについて話し合いをするだけではないのであります。平和教育には知識も姿勢も大事なのであります。つまり知識を得て必ず何かを実現しようとする態度を養うことが必要なのであります。この点において、結果ではなく過程が重要であるということが明確になるのであります。そしてこのことは社会の多くの仕事にも教訓として適用することができます。

平和教育は学校の問題に対するつけたしで

あってはならないのであります。平和教育は本来、教えることの主要な部分を形成しており、前にも申しましたとおり物事の仕組みや構造を洞察する力とか、行儀作法を習得するための手段を学ぶためにあるのであります。

平和教育は、数時間でできるものではありません。教えている最中にたまたま出てきた問題のすべてに対応しなければなりません。平和教育は、学校の雰囲気、環境、生徒と先生の交流とに密接な関係があります。これらのことが子供の行動面や精神面に、そして考え方とか価値観の発達に影響を及ぼすのであります。要するに、子供の「人格形成」に影響を及ぼすのです。

平和教育は、議論的になることから逃げることはできません。その目的が幅広い分野の問題を取り上げる場合は特に、そうであります。そして平和や戦争の問題は客観的視野でもって慎重に取り上げられねばなりませんし、また科学的な根拠も必要となってきます。若者たちには対処できないような責任を負わせることはできません。子供たちに必要な心の安定をかき乱す恐怖を起こさせてもいけません。

私たちは、子供の教育水準に応じて子供たちに接し、そして指導をしなければなりません。それは取り組む価値のあることであります。子供たちに平和について教えることこそわれわれの義務ではないでしょうか。それは高望みといえるでしょうか。しかし物事は少しずつ成就するものであります。

## 都市報告 4

コモ(イタリア)市議会議員  
ミノ・ノセダ

私たちは核兵器による大虐殺を被ったこの国で行われる、このような重要な会議に参加

できましたことを光栄に存じます。また、私たちは罪もない無防備の生命を全滅させるような恐怖を、人類が二度と再び経験することのないようにしなければならないと決意するものであります。

人類の歴史は、新たな経済的、社会的、文化的発展のため、また人類と自然との新しい関係を築くために闘い続けてきたのであります。

もし人類が今日の諸問題を理性をもって解決する意思があり、敵は隣人ではなく無知や飢餓、貧困、そして不正であることに気付くのであれば、破滅は回避できると私たちは考えます。

もし人類が団結し、重要な資源の無意味な浪費の原因である戦争や軍国主義、暴力に対する自決権を獲得するために闘うのであれば、そして自分の人生は自分で決定できるという自己決定 (self-determination) の精神に基づいて闘い、その精神を世界中の人々に広めれば、無知により人類を犠牲にする悲劇は二度と繰り返されることはないでしょう。

私たち自身の運命を決定する自由を認めることは、すなわち搾取、暴力から解放されること、考え方や行動の自由、仕事における自由、自然との関係、男女間、世代と国家、東西間における自由などを意味するものであります。

もし私たちが一致団結して、暴力による恐怖の輪、すなわちミサイルによる恐怖、人類終えんへの恐れ、私たちの心と体に潜む暴力への恐れなどを断ち切れれば、私たちはこれ以上の破滅は経験しないのであります。

1985年3月8日、ヨーロッパにおいて東西から集まった女性たちによって書かれた文書があります。それによると、どのような形であっても戦争の準備には関与したくないし、抑圧的な平和も破壊的な戦争も望まない、とあります。

アウシュヴィッツと広島40年後、東西ブロックの対立が始まってから40年後にして、国境のみならずたびたび思想や感情をも分断



している壁の反対側に立って、私たちはやっとお互いを理解し合いたいと思うようになったのであります。

そして平和と相互理解を求める象徴として、コモ市はヨーロッパレジスタンスの記念碑を建立しました。記念碑の全体的なイメージは、ナチの収容所で処刑された人々が私たちに残した考えやことばから成っております。この碑はヨーロッパ中の強制収容所から持ち寄られた石によってつくられています。

コモ市は核兵器による惨禍への警鐘と、平和への希求を象徴するため、野蛮なナチ、ファシズムを思い起こさせる遺構とともに、1945年8月6日の原爆によるすさまじい炎熱で黒く変色した広島原爆ドームからの石を安置しております。

このようにして、私たちの市議会は核軍備の廃絶を目指す都市連帯推進計画に参加することを決定したわけであります。ところでこの計画を成功させるために、地方自治体として私たちが貢献できることは何でありましょうか。

私たちの地域を非核地帯と宣言すること、そしてミサイル発射台の建設を許可しないこと、いかなる兵器工場をも建設することを禁止すること、また既存の兵器工場を他の目的のために転用することなどで十分でしょうか。

私たちは若い世代に平和教育を実施しなければならぬと思います。私たちは生徒たちに平和を愛し、築き上げるとともに、暴力と戦争を否定し世界の人々が理解し決定できるような新たな平和文化を創造する正しい教育をすることができるのです。これが私たちの訴えたいことであります。

## 都市報告 5

コベントリー(イギリス)市長  
ウィリアム・マッケナナン

このたびの会議に意見を申し上げる機会を得ましたことを光榮に存じますと共に、コベントリー市民からの心からのごあいさつをお伝えします。

このごあいさつは市民、すなわちコベントリーの一般市民からのものであることを強調いたします。何故ならば世界滅亡の脅威の除去は、互いに話し合い、相互に理解し合い愛し合う世界の一般市民によってのみ実現できるからです。また、そのことが世界平和推進への私たちの取り組みの基盤であります。

私は、コベントリー市が今回のこの意義ある世界会議への参加のご招待をいただいたことを大変うれしく思いました。私たちコベントリー市民は、1940年の空襲を経験しており、世界中が被害をうけた戦争の恐ろしさを理解することができます。広島・長崎の市民も被害を被りましたが、それは通常兵器によるものではなかったのです。彼らの被爆は核時代の始まりの先ぶれとなりました。

被害をうけたのは、政府ではなく一般の市民でした。私たちは、恐怖が実際どんなものであるか分かりすぎるほど分かっています。

平和は、分割できないものであり、平和だけあらゆる種類の対立と紛争に終止符を打つ手段をもたらすことができます。これには寛容一時には好まないことを受け入れる寛容—を必要とします。

自由は分割できないものです。自由とは、単に物理的拘束のないことだけではありません。自由は平和に、そして家族、隣人との調和を保って働き、生活する権利を意味します。この種の自由を否定することは、紛争を招くことであり、ひいては戦争につながる可能性があります。

この会議のテーマは、「平和構築への都市

の役割」であります。私はこのテーマについて、まず政治レベルと重要な日常の実際行動レベルの二つにわけてお話したいと思います。

コベントリー市議会は、英国諸島での核兵器の製造と配備に反対することを宣言しました。また、市議会は、わが国が核保有国である間は、核戦争の恐ろしい影響から国民を守ることはできないことを認識しています。広島・長崎の人々のご存じのように、核兵器から守ることはできません。従って、私たちの市議会は、双子都市のグラスゴーと同じ様にわが国の新民間防衛要綱に反対しています。核戦争の破壊的影響から市民を守る唯一の方法は、戦争を起こさないということが私共の信念であります。

私がこうやって日本を訪問している間、市民は黙とうと、核兵器の製造、貯蔵に反対する静かな抗議を続けています。

1940年のナチスによるコベントリー市の破壊のあと、私どもの市は、平和と国際和解への誓いをたてました。そして、世界の26都市と友好関係を結びました。これらの都市の多くは一ボルゴグラード、ドレスデン、ワルシャワ、キール、カーン—戦争によって被災しました。

コベントリー市は、世界平和への道は、市の高官だけでなく青年の交流によるものであるとの意見をもっています。青年交流のための教育制度によって市の若者が世界を旅行し、生活し、働いています。

私はこの会議で、皆様からお聞きした話をもって帰り、市議会に報告するつもりです。

毎年11月、平和フェスティバルが開かれます。いろいろの催しがありますが、世界の著名人によるコベントリー寺院での講演がそのハイライトとなるでしょう。

長崎が広島の市長さんが、11月にコベントリーにおいてになるならば、私共は心から歓迎いたします。

私共の市議会は、他の地方自治体との討議

と行動の場として機能する非核地帯宣言小委員会を設置しました。

世界をより良く変えるのは、政治家でないことは歴史が示しています。それは、一般の市民から起こっています。ドイツと日本は、何百万の人に筆舌に尽くしがたい被害をもたらした攻撃的、帝国主義的国家としての考えを変えなければなりませんでした。

両国は、一般市民の懸命の努力によってこの変化を成し遂げることができました。

私は、世界の一般の市民が戦争（核戦争と通常戦争）の脅威の除去を要求するものと、大きな期待を抱いています。この大衆の力が発揮されたごく最近の例として、青年や音楽家によるエチオピアの飢餓民へ大きな支援が寄せられました。

人類の唯一の希望となるのは、お年寄りの政治家の姿勢ではなく、相互のコミュニケーションであります。

皆様、この会議に関することで、このことだけは帰国して市民に伝えて下さい。

一般市民間のコミュニケーションこそが、平和への道をつくる相互理解につながるのです。私たちコベントリー市民は、この方向に進むため全力を尽くします。

私たちは、会議開催のイニシアチブをとられた、広島・長崎市民の方々に敬意を表し、心から支援するものです。

## 都市報告 6

ジュネーブ(スイス)市長  
ロジャー・ダフロン

まず第一に、広島と長崎における第一回世界平和連帯都市市長会議を組織された方々と考えを分かち合いたいと思います。この会議にジュネーブの代表として参加させていただくことは大変光栄であります。

一都市のイメージは、そこに住む人々の性格によって形成されるのであります。ジュネーブ人を定義する歴史的特色は、独立、自由、平和への願望であります。

何世紀にもわたってジュネーブは、常に他人に対する思いやりの心をはぐくんできました。

1863年、アンリ・デュナンは他の4人のジュネーブ人と共に国際赤十字連盟（ICRC）を創設しました。このスイスの民間機関は（スイス民法により管理されている）完全にスイスから成っています。ICRCは“赤十字信条の守護神”であります。ICRCの目的は紛争や大惨事を被った民間人および軍人犠牲者に保護と援助を差し出すことであります。

1919年9月7日、ジュネーブに国際連盟が設立されました。第二次世界大戦直後、1946年8月1日に国際連合欧州本部がジュネーブに創設され、その主な目的は世界中の平和を維持することにありました。この機関は当時31ヵ国により設立されたのですが、今日では158ヵ国の加盟するところとなりました。国連欧州本部は、世界で最も活発に会議が開かれる所であり、毎年7,500以上の会合が人道的、社会的、経済的分野にわたってもたれています。

1985年、ジュネーブで国連は3つの重要な会議を開催しました。

2月4日から3月15日まで、第41回人権委員会の会議

3月26日から4月6日まで、第28会期の国連貿易開発会議（UNCTAD）

2月5日から12週間、軍縮会議

事実、このジュネーブで軍縮会議が開かれたのです。このことに関して、過去に記録された具体的成果としては、SALT I（戦略兵器削減交渉）と核兵器廃絶条約に関する交渉があげられます。これらの協定は、特にジュネーブで開かれた忍耐的な交渉のたまものであります。

1985年1月から2超大国の、つまりアメリカとソ連の交渉が再開されました。現在、ジュ

ネーブではこの2国の代表が、軍縮会議の枠内で12週間の会議を開いているのです。

世界中の注目がジュネーブに集っています。

従って過去にジュネーブが一連の国際間の決議や協定に名前を貸したことは当然のことです。これらの協定などは目標として、数々の行事により人類の境遇の改善を挙げていました。特に国家間の安全のための協定や2国間の合意は紛争を未然に防ぎ、また悪化しそうな危険のあった反目をやわらげました。

更に、ジュネーブの国連欧州本部の存在が種々の『特別機関』の創設と発展につながりました。たとえば世界知的所有権機関（WOIP）、国際電気通信連合（ITU）、世界保健機関（WHO）などがあります。これら各種機構のすべてが人間相互の理解と進进行を目的としています。

このように、ジュネーブの人々は世界が再び戦争の惨禍を被ることのないよう、相互理解に到達したいと願う雰囲気文字通り浸っております。

ジュネーブの歴史はまさに平和への願いに満ちたものです。それはジュネーブ市の平和への願いであり、ジュネーブはその独立を再び勝ち取り、維持するために闘わなければなりません。更には他の国民の特に民間人の平和への願いもあり、ジュネーブは戦争の脅威や紛争による影響から逃げだしてきた人々を受け入れてきました。

結論として、ジュネーブ人にとってこの市における国際機関の存在は重要なものと断言してもよろしいでしょう。このことは平和への闘いが、あらゆる国の政府が努力を傾けるべき基本的目的であることを知っているジュネーブ市民の深い願望と一致しております。

何世紀にもわたり、ジュネーブはその名声のもととなった道徳の質を高め確立したのです。その道徳の質とは、開かれた精神、利他主義それと連帯であります。

この精神をもってジュネーブが赤十字の発祥の地としてあり続け、かつては国際連盟本部、現在は国連欧州本部のある都市であり、また今日では人類の未来のための重要な話し合いの場であることはこの精神によるものです。

ジュネーブの気風はまさに独立と自由と平和の理想であると私は確信を持っております。

## 都市報告 7

アーバイン(アメリカ)市議会議員  
ラリー・A. アグラン

今世紀の特徴を取り上げるとするならば、それは人類の宇宙への旅立ちではなく、一般市民の意に反した計画的で悔いることを知らない近代戦争の追及ということにつきますのであります。

1937年、ゲルニカのバスクという町がドイツ人によって爆撃された時、画家のパブロ・ピカソは世界への新たな恐怖を絵に描きました。後に起きた出来事と照し合わせてみますと、ゲルニカの被爆は広島、長崎そして全人類を覆う核戦争の原子雲を予言していたと思うのであります。残念なことです、ゲルニカ、広島、長崎が歴史上もたらした意味というのは次のようなことであります。すなわち、われわれの時代には政治的決着のためならば、都市の破壊、罪のない住民の殺害といったありとあらゆる手段が正当化されてしまうということでもあります。

アメリカ合衆国にあるわが町アーバイン、日本の広島、長崎といった都市は人間社会の基本的単位または建築物の基礎のようなものであります。都市は工業、商業を興したり、若者を教育したり、文化的伝統を築き上げるために必要な人間組織の場を提供しています。

しかしながら、同時に都市は軍事行動のための資金を供給するような富を生み出し、産業面、科学技術面、社会面において近代戦争を支えているのであります。

アイゼンハワー大統領は、その職を退任する時アメリカに深く根づいた軍産複合体のことをわが国民に警告していました。今日、アメリカにある全都市の市民は核兵器を含む兵器の生産のため国家に税金を払っているのです。私の町の市民には、核兵器の設計と製造に直接携わっている人がいます。この仕事で収入を得て、衣・食・住の生計を維持しているのであります。多くの市民にとっては他に適当な雇用先がないため、そのような仕事をせざるをえないのです。人々は仕事を変えたとしても、軍備競争への個別の反対は経済的な代償が高くつくことを知っています。何故ならそのような反対が国の政策に与える影響はこれまでのところ、残念ながら小さいものだったからです。

際限のない世界の軍拡競争に終止符を打つための都市の可能性を試すのは、今しかありません。都市や都市が設立した機関が脅しや暴力の手段を使わずに地方における人間対立を和解させ、解決してきたことを思い出してみてください。この極めて困難かつ崇高な任務を都市において達成することができるならば、私たちは政治的な力や影響力を核戦争の脅威をなくすために協力して行使することができるはずであります。

広島、長崎の原爆の被爆は、核戦争という悪夢の幕開けでありました。それはこの長崎においてもさらに恐ろしい現実となって表れました。私たちが国家指導者に全面戦争を遂行する権力をいったん与えてしまえば、彼らは原子爆弾の使用が不必要で不当な場合でさえも、権力を振り回して必然的にそれを使用するようになるでしょう。広島、長崎の被爆が長崎での罪なき人々の犠牲の歯止めとはならなかったのと同じように、長崎での犠牲は水素爆弾の開発競争を制止することはできませんでした。その犠牲によって大陸間ミサイルの開発

と配備を防ぐことはできませんでしたし、ソビエトやアメリカ双方が5万発の原子爆弾を蓄積することを止められませんでした。そしてさらに悪いことに韓国、キューバ、ベトナム、ヨーロッパにおいて何度も原子爆弾を実際に使用しようとした危険が後で明みにされたことがあります、そのような危険さえ防ぐこともできなかったのです。

残念なことでありますが、軍拡競争を転換させるだけの国家的、国際的な指導力が存在しないのは明白な事実であります。私たち世界中の都市の市長は、新しい希望をもたらす指導力を発揮するべきであります。まず都市は、大量破壊兵器を製造して直接的あるいは間接的に利益を得ている会社に、公的資金を投資すべきではありません。さらに毎年8月6日から9日までを核兵器禁止日とすべきであります。市長や都市の指導者は、各地の指導者や世界中の政治、経済の指導者に少なくともその期間だけでも核兵器の研究、実験、製造、配備をやめるように訴えるべきであります。毎年数時間でも狂気の核軍拡競争を止めさせようではありませんか。私たちの間でその核兵器禁止期間にこのような狂気を反省する機会をもとうではありませんか。そしてその期間に優秀な市民のみなさんに戦争の準備ではなく、平和の準備のために経済を転換する方法、手段を考案していただくようにいたしましょう。

この国に苦難の平和をもたらしたあの出来事から40年が経ちました。今日ここに私たちは集まり、広島、長崎の警告の声は全人類に広がっています。8月6日と8月9日に起きた事件を償う方法は、私たちにはわかりません。私たち人類がこれから生存できるか否かは、死んでいった者の苦痛の叫びを聞くか否かにかかっています。あの恐ろしい日々から私たちが救われるためにも、私たちは常にその叫びに耳を傾けなければならないのであります。

## 都市報告 8

レムゴー(ドイツ連邦共和国)市長  
ラインハルト・ヴィルムブーセ

広島原爆投下40周年に、西ドイツ・レムゴーの市民は、そのとき命を落とした人々、またその後無残な一生をしいられた人々のことを考えています。

特に長崎に思いを寄せています。というのは、1691年にレムゴーで生まれた医師であり探検家でもあるケンペルが長崎の出島を訪れ、その当時、外国人がしめ出されていた日本を研究したからです。このことに関する報告書により、彼はレムゴー、ヨーロッパおよび日本において、高い評価を受けてきました。そこでレムゴーは、長崎および日本に親近感を持っているのです。

レムゴーは、隣接した大都市とは違い、第二次世界大戦中に破壊されずに済みました。古い世代の人々はほとんどがあの忌まわしい戦争を覚えています。誰しもまた、どの都市もその当時絶望していました。が、レムゴーは破壊されずに済みました。というのは、その当時の市長であったウィルヘルム・グラファーが勇敢にもアメリカ軍と交渉し、市をひき渡したからです。彼の勇気が町を救いました。しかし彼は、ドイツ軍を撤退させたとのことで、死刑に処せられました。彼の行為は、われわれに望みを与え、不可能と思えることを成し遂げるよう力づけてくれます。

このためには、宣言と小さな実行が、大変重要なものになります。

重要なことは、異なる国家の人々が互いに理解しあうよう努め、自分たちが皆平和に暮らすことを欲していること、また平和に暮らす権利があることを自覚することです。こういうわけで、レムゴーは、戦争時ドイツの宿敵であったフランスとイギリスの都市と姉妹都市提携を結んでいるのです。新しく結ばれたこの友好関係が、将来の憎悪や誤解を防ぐ



のに役立つでしょう。

世界を分ける大国に属する市町村間での、こうした姉妹都市提携は、より一層重要なものであると思います。東西の人々が相互に信頼し合うために、また平和を確保するために、レムゴーは、東ヨーロッパの都市と姉妹提携を結びたいと願っています。こうした姉妹都市提携を結ぶことが、われわれ都市連帯の一つの目的です。

平和は、豊かな工業国と貧しい発展途上国との隔たり、また富裕と極貧との差異の広がりにより、脅かされています。この不公平は苦しみを生み、ひいては戦争を引き起こしていくのです。

公式の政府援助は、しばしば打ち切られ、貧しい人々には行きわたしません。こういうわけで、フランスの姉妹都市と提携し、レムゴーは、アフリカカインドに援助するつもりです。主に若人により実行されるこの計画は、発展途上国の問題を克服する助けとなり、また一つの前例ともなるでしょう。

戦争を体験していない若い世代に、戦争の原因・不正、恐ろしさを伝えるという大きな使命を都市は持っています。われわれはこの目的のためのすべての努力に賛同いたします。

一個人、一都市だけでは無力かもしれませんが、一緒に行動することで、平和に貢献することができます。われわれの平和宣言を国家が無視できるはずはありません。

レムゴーはこの都市連帯の設立を歓迎し、全力をあげて支持していく所存であります。

## 都市報告 9

リスモア(オーストラリア)市長  
ロバート・W. スキューリン

リスモアの市民に代わり、平和獲得のための都市の役割について次の提案を述べたいと思います。

世界の各都市が、平和獲得のための役割を果たす方法はいろいろあります。もちろん、その地理的条件、政治機構、地方自治体の規模および影響力により程度は異なります。

この短い時間内で、すべてをお話することは不可能ですので、一点だけにしぼりたいと思います。非武装でも核兵器禁止でもなければ、戦争の脅威についての教育の促進を求めるものでもありません。代わりに、友好・理解を通じて、平和がより確実に得られるという考えについて述べていきたいと思います。

最も確かな手段は姉妹都市関係設立であると信じています。文化・信条・人種の違いを越えて理解し尊重し合うことにより平和は達成できるのです。

都市の多くは姉妹都市提携を結んでいますが、その中のいくつかは、有効に機能しているか問いたいです。

次の点を進めていくことで、人々が互いに理解し合うことができるものと思います。

—市民リーダーの相互訪問—

これは互いの政治機構を尊重し理解し合うことになり、意見交換や他の都市を援助するための機会を与えてくれます。

—都市間の交換学生—

平和を得るために最も確かな方法は、全世界の若人が、異った文化・信条の人々を理解し尊重するよう教育することです。都市間の交換学生制度は、学生が平和について学ぶ多くの機会を与えることとなります。交換学生は姉妹都市の家庭で生活し、日常生活に親しむべきです。若者が平和運動を進めていくのは、このような友好的体験によるのです。



## —ビジネスおよび文化交流—

都市が姉妹都市とジョイント・ヴエンチャーやパートナーシップなどを結ぶこととあわせて、都市間の貿易関係を樹立することは、経済関係をより密接にすることでしょう。経済的結びつきは都市間の強い連帯を生み出します。

文化交流もスポーツから演劇に到るまで、いろいろありますが、文化交流は、平和のために必要な相互理解をもたらすことでしょう。

## —姉妹都市間の観光—

今日の様な交通手段の発達により、世界はずっと小さくなり、観光客が姉妹都市を訪れることで、相互理解および平和促進に大きく貢献してくれることとなるでしょう。観光客が姉妹都市を訪れる際に家庭で宿泊することができれば相互理解や平和推進はより一層進むものと思います。

## —書籍および映画—

姉妹都市間で交換される書籍や映画は、その文化・信条・生活様式を紹介してくれます。これらは、学校・大学を含めたすべての社会組織に受け渡されるべきです。

これら種々の交流を通じて、相互理解・尊重・経済協力、そして最も大切な友情を深めることができます。

1 都市との姉妹都市提携に限ることはなく、多くの都市と提携を結ぶのもよいでしょう。世界のそれぞれの都市が、例えば3つの姉妹都市提携を結べば、それによって全世界のすべての都市が互いに連帯されるにちがひありません。

姉妹都市提携が、結束・友好・理解を深めるのは疑いの余地がありません。

この会議に2つの意見を提案したいと思います。まず第一に、姉妹都市提携がいかなるものであろうと、ここに出席していない都市との姉妹都市提携を結んでいただきたいのです。このような姉妹都市提携が、平和と相互理解のもとに確立されることを明らか

にし、このことで会議の成果をより確実なものにすることができるのです。

第二にこの会議により、事務局が設立されるなら、事務局が、姉妹都市提携の登録を行い、その登録が、提携を結びたいと考えている都市の参考になるようにしたいと考えております。そうすれば都市間の有機的な結びつきが全世界を通じて確立されるでしょう。

平和への容易な道も、また平和を短期間で達成する方法もありますが、平和な社会を築いていくのに、友好・相互理解の他に、どのような方法がありましょうか。

## コーディネーター（飯島宗一）

どうもありがとうございました。以上で前半のセッションを終了いたします。後半は10時半ないしは35分から開催いたしたいと思いますのでご協力をお願いいたします。

## —コーヒープレイク—

## コーディネーター（飯島宗一）

それではこの会議の後半のセッションを始めます。ご発表いただくのはイギリスのエジンバラ、ザンビアのルサカ、ドイツ民主共和国のマグデブルグ、オランダのミデルブルフ、カナダのオタワ、イタリアのレッジョ・エミーリア、アメリカのサラトガ、オーストリアのザンクトウルリヒ、オーストラリアのサンシャイン、イタリアのトリノの各都市の代表の方でございます。

それではイギリス、エジンバラのジョン・H・マッケイ氏からお願いします。

## 都市報告10

エジンバラ(イギリス)市長  
ジョン・H. マッケイ

この会議に出席し世界平和への意義ある契機となるこの催しに参加できましたことを大きな名誉に思います。

エジンバラ市は、スコットランドの首都です。スコットランドは人口500万の小さな国ですのでその大きさと地球的状况から、スコットランドはいわば避難所のようなものであると皆様は想像されるかもしれませんが。しかしこれほど事実と違うものはありません。いかなる核戦争においてもスコットランドは最前線になるでありましょう。スコットランドはその面積と人口の割には、地球上のどの国よりも多くの核兵器と（核戦争になった場合は）核攻撃目標をもっていることがこれまで言われてきました。

私たちはかつてないほどの危険な時代に生きています。人類はこの地球を破壊してしまう力をもっているのです。この地球全体が不毛の地となり、汚染され、死の惑星となることなど考えることはできないでしょう。世界中からこうやって集まったのは、まさにこの可能性の故であります。そしてまた、このような惨事を考えるにふさわしい所が広島・長崎をおいてあるでしょうか。広島・長崎は核攻撃を受けた世界でただ2つの都市であります。広島・長崎は20世紀の最も恐るべき教訓を私たちに残しました。

世界平和の達成は核兵器の削減または廃絶より多くのことを必要とします。もし紛争の基本的な原因をとり除くことができれば戦争の可能性は遠のきます。本来これは地球上の人々が競争ではなく、協調の精神をもって共に生活していくことを必要とします。人間の本質を考えれば、そのような完全な状況の達成はなかなか困難でありましょう。しかしながらそのような状況に向かって努力する行動

は、それ自体意義ある成果をもたらすに十分であります。

今必要とされているのは個人としての人間と人間の、団体と団体の、政府と政府の（国および地方の）間の関係における重要性の変化であります。あらゆる段階での紛争が人々と国家間の不平等の産物であり、お互いのまた異なる問題についての理解の欠如の産物であると認識するならば—私はそう認識すべきであると思うのですが—世界平和の推進における都市の役割は、その都市の中での緊張を少なくすること、更に国家間の緊張の除去に寄与することにも及ばなければならないと思います。

私共のエジンバラ市においては、世界の他の都市と同じように、都市の主な機能は、清掃、保健、レクリエーション、住宅などの公益業務の提供に向けられています。これらは、生活水準の不平等の影響を減らす効果をもっています。

市民は所得水準にかかわらず、これらの重要な生活分野における一定水準の公益を享受することができます。私の考えでは、文化的生活水準に必要な公益事業を維持することは都市の任務であります。このようにして、生活水準の不平等によってもたらされる緊張を減らし、なくすことができます。

都市におけるそのような状況の達成が、世界平和への価値ある貢献をするための前提条件であります。エジンバラにおいては、市議会は最近、生活の向上にかかわるいくつかの分野での実質的改善を実現するための提案を行いました。

これらの提案は市民の大きな支持を得ました。中央政府の行動によって少しは挫折するかもしれませんが。しかしながら、市議会としてはこれらの改善が是非必要であることを、中央政府に説得するために最大の努力をする決意であります。

また、都市は国家間および国民間の友好関係を促進していくうえで重要な役割をもっています。この顕著な例が国際間の観光の推進

であります。これは都市に関係のあることはもちろんですが、国と国の理解の増進にもつながることです。

たくさんの人々が他の国の都市を訪問することは、異なる国の歴史とその国が直面した、また現在直面している問題の理解を促進するうえで有効なことです。エジンバラは、英国でも有数の観光地の一つであり、市議会は出来るだけたくさんの観光客を誘致し、彼らにエジンバラとスコットランドの遺産を知ってもらうつもりです。

しかしながら、これらの商業活動とは別に都市は特定の都市とより公式的な関係によって交流を促進することができます。エジンバラは、世界の7都市と姉妹都市関係を結びました。ミュンヘン（西ドイツ）、ニース（フランス）、フローレンス（イタリア）、サンディエゴ（アメリカ）、バンクーバー（カナダ）、ダニーデン（ニュージーランド）、西安（中国）と姉妹関係を結んでいます。

これらの関係は、市役所はもちろん市民団体、学校間の交流の基盤形成に役立ちます。この分野におけるエジンバラの交流事業は、ヨーロッパ評議会から表彰を受けました。これらの関係は、他の国のことについて良く知らねばならない子供や青年の場合に特に重要です。他の都市の青年との交流により生活様式の違いについて互いに学ぶことができるよう努めなければなりません。

しかしながら、国家間の関係の長期的促進への努力をする際に、市民がいかに都市に依存しているか、また核攻撃があればたとえ生き延びても市民生活にどのような影響があるかを、市民および周辺の住民に対して説明することが都市の役目であることを忘れてはなりません。

市役所は、広島・長崎で40年前に起こったことを参考にして核攻撃の結果を説明し、このようなことが決して起こってはならないことを訴えなければなりません。核戦争のすさまじい結果を市民に訴える場合には、恐怖と嫌悪の感情を都市間の平和的関係の樹立と維

持に向けるよう努めなければなりません。

このようにして世界中の都市の市民が、「広島・長崎を繰り返してはならない」ということを政府に主張することができます。

核戦争が起これば、世界の都市の住民が最大の被害者になるのであります。従って、彼らは、核戦争に対して、「ノー」と言うべきであります。

## 都市報告11

ルサカ（ザンビア）市長  
M. C. サタ

私たちはアフリカから参加いたしました。が、私たちは血で汚れていない、潔白な手で参加しています。

私たちは世界の数多くの国々においてよりも、平和を尊重しております。なぜならば、150年以上もの間アフリカには平和はなかったのであります。アフリカは奴隷貿易に何十年も苦しみました。奴隷貿易の後、わが国では70年の間、植民地の状況にありました。現在では難民一人ひとりが、次々と死ぬようなことがアフリカには存在するのです。日本国民がこの会議を主催するために、広島・長崎以上のところはありえません。

広島に原爆が投下された時、私はちょうど8歳と1カ月でした。本日私は48歳と1カ月になっております。当時私に実感はありませんでしたし、何が起きたのかも思い出せません。しかし、その時私と同じように8歳だった人々が、どのように感じたであろうか想像しています。

各市長の皆様、私たちは政府を助ける試みをするためにここに集まりました。私はルサカ知事、ルサカ市長、国会議員としてここに立っております。ここにお集まりの各市長の皆様は、国の政府よりも国民により近い立場

にあり、皆様の影響力が平和の大義を世界中に推進することでありましょう。そこで私は次のような提案をしたいと思うのであります。広島と長崎に集まった後、この平和への努力を継続して行わないのであれば、私たちは時間とお金を無駄使いしたことになります。そこで私は広島がこの会議の恒久的な開催地となること、国連が軍縮部門をニューヨークやワシントンから広島へ移転すること、市長の連帯組織が広島に置かれることを提案いたします。

日本政府に提案したいのでありますが、実は日本へまいりましてから、あるたばこの会社が、「ピース」という銘柄の紙巻たばこを販売しているのを見かけました。日本政府に「ピース」という銘柄のたばこに課せられる税の一部を、広島と長崎に交付してこの重要な会議を続けていくのに役立てていただきたいのであります。

皆様、私はさらに毎年8月6日から9日の期間を、世界中の市長が広島と長崎に、もしくはどこか他の場所で集まるべき日として宣言することを提案いたします。これらの時期をずらすことは、私たちが討議しておりますことの重大な意義を失わせることになるでしょう。

私はこの会議に出席していない何人かのアフリカの市長に代わっておわびしたいのですが、彼らが平和を愛していないというわけではありません。彼らは自国に影響を及ぼしている経済的困難のために参加できなかったのです。この次には彼らは参加するでしょう。この会議がどのような役目を果たすのかについては、彼らもよく分からないでしょう。しかし、先程話しましたように、アフリカの各市長に回覧状を送り、将来の会議に彼らが参加することが重要であると知らせたいと思います。

本市ルサカはザンビアの首都であり、面積363平方マイル、人口わずか80万人であります。アンゴラの独立はザンビアからルサカからやってきたのであります。モザンビークの

独立も、本市からやってきたのです。ジンバブエの独立も同じようにもたらされたのであります。この歴史から、皆様に本市が平和の象徴であり、首都であると理解していただければと思います。

## 都市報告12

マグデブルグ(ドイツ民主共和国)市長  
ヴェルナー・ヘルツィヒ

まず私はわが国の代表団、即ちベルリン、ドレスデンの市長と私自身の名において、荒木、本島両市長のこの会議を企画されたイニシアチブと私たちへのおもてなしに対してお礼を申し上げます。

私は、平和と軍縮について話すことが地方政治に携さわる私共の責任であると確信し、この重要な会議に参加したわけであります。私の市では、あのような惨事を繰り返さないために全力を捧げるとの決意を新たにすため記念行事が今日開かれておりますが、私はそこに集まった市民を代表して原爆犠牲者の前に敬けんに頭を垂れるために長崎にやってきました。

私たちは原爆の惨事と第二次世界大戦の原因と罪を記憶にとどめており、その教訓を若い世代に語り伝えていきます。これは私たち地方政治家が責任の一つとして考えなければならない平和教育の一部であると思います。

40年前の原爆の地獄から時が経つにつれ、その意義と警告は益々重要になっています。

今日、核戦争が起これば、侵略者も侵略の犠牲となった者も共に抹殺され、全人類の滅亡の危機を引き起こすでしょう。今や選択肢は一つしかありません。それは戦争を政治の手段として使うことを絶対にやめることです。そのような惨事を避ける闘いは、何千もの広島、長崎の出現を避けることです。

平和の考え、第二次世界大戦の経験からくる教訓と結論は、私たちの心の中に永遠に刻みこまれています。

平和、すべての国との友好、国際連帯の促進を基調とした教育は、原則として保育所、幼稚園、学校、児童青年団体で早期に教え込まなければなりません。国際児童の日を記念してすべての学校で平和の集会が開かれました。子供たちは太陽の光がいつまでも無くならないように、原爆が太陽の光を遮り、両親、祖父母の命を脅かさないようにとの願いを込めて折り鶴を作りました。

先日、子供たちが市役所に来ました。そして平和と連帯の心のしるしとして描いた木の絵と折り鶴を長崎の子供たちに届けて欲しいと私に言いました。また平和集会では大人や青年たちが自分たちの都市と国を破壊する戦争が再び起るのを許さないという固い決意を表明しました。

今年の聖霊降臨祭の青年集会には、5万人以上の若者が集まりました。ピース・ラン(平和マラソン)には2万人ものスポーツ愛好家に参加しました。またマグデブルグ戦災40周年を記念して平和協議会が主催した平和集会には、8万人もの人が参加しました。

原爆展『ヒロシマ・ナガサキー警告と義務』は長崎市の本島市長をマグデブルグ市に迎えて1983年9月1日世界平和デーに開会式を行い、展示期間中6万人の入場者を集め、強い衝撃と感銘を与えました。原爆展を見た人は皆、都市や人類の幸福を破壊する戦争を未然に防ぐためにあらゆる努力をするという決意を改めて強くしたのであります。

わが国では、すべての市民が安全と物質的安定の中に生活することができるように数世代にわたって努力と奉仕を続けてきました。わが国の市民は、兵器が多いほど安全が増すのではなく、むしろ国際情勢を不安定にするだけだということに十分気付いています。

このため市民は『労働者と農民の国』であるわが国の平和維持に向けられた政策を心から支持しており、核軍備競争を中止し、宇宙

の軍事化を防ぐためのソ連とわが国を含む社会主義国が行った提案を認めているのです。彼らは国際情勢の真の安定をもたらすような改革的な提案に常に注目しています。ジュネーブでのソ連とアメリカの新しい交渉は大きな希望を引き起こしました。

皆さん。私共の都市間の絆を利用して、広く世界中で良識を動員して、平和と軍縮の基本的問題について政治的対話を続けようではありませんか。そうすることによって都市と街が、たとえその社会体制は違っていても、世界の政治情勢に良い影響を与え、全人類の平和を守るために貢献できると思います。

私たちは、人類のため平和を守らなければならないと決意しています。そのために私共の都市が関係している280もの姉妹都市関係を活用しなければならないと決意しています。

## 都市報告13

ミデルブルフ(オランダ)市助役  
M. ビンケ

世界の人口のほとんどが都市および都市部周辺に集中しています。都市は文化と経済の中心であり文明の発達に寄与してきました。今日のそしてこれからの都市の役割は人類の将来への責任をおびています。私たち市議会議員は、未来を築き上げるという意味で、責任と使命があるのです。

都市はこれまでに衰退によってまた大惨事や戦争によってその存在を脅やかされてきました。第二次世界大戦(1940年-1945年)はヨーロッパや至る所で大きな被害をもたらし、ミデルブルフ市も例外ではありませんでした。(1940年の爆撃により、市の中心部のほとんどの部分が破壊されたが、幸いにして、人的被害は少なかった。)中でも広島・長崎



の原爆被爆は、人類がさらされる破壊の危機を私たちに示しました。

1985年の今日においても—ミデルブルフ市の場合、1960年代中頃までに、復興が完成しましたが—ここ長崎や日本の他の場所でも傷跡は、完全にはなくなっていない。平和公園の記念碑のほかに、平和の始まりと言われたものが実際には人類の全滅をもたらす可能性のあることを私たちに思いおこさせる人間の悲しみがあります。

1945年8月日本で起こったことを繰り返してはならないという私たちの信念が、広島・長崎の市民と共に全人類に訴えようという動機を、世界中から集まった都市の代表に与えたのです。平和の維持と核軍備競争の中止に向けた世界規模の連帯のための運動こそが破壊を防ぐことができるのです。このためにはこの会議で表明される目的以上のことが必要とされるでしょう。わが国の責任ある政治家や国際機関に対する共同アピールはもちろん、国民やとくに青年に対して働きかけなければなりません。世界の指導者へのアピールは広範な人々の支持を得なければなりません。またこうすることによってこそ成功の可能性があります。

ゼーランドの州都であるミデルブルフ市は姉妹都市である長崎市との歴史的、経済的、文化的関係を深めるために微力ながら努力しています。この会議が開催されている間もミデルブルフ市では、「ナガサキ1945～1985—被爆者は訴える」と題して平和の行事が行われています。このテーマに添って1985年8月9日から22日まで、原爆展が開催され、また講演も行われることになっています。この展示会は、長崎市との姉妹都市関係を通じて寄贈された資料をもとにしたもので、ミデルブルフ市議会やオランダ各地の市、州当局の協力を得て開かれています。

原爆展の最終日8月22日には、映画「ヒロシマ、ナガサキ—核戦争のもたらすもの」が上映され、この長崎の市長会議に出席した私共がその報告をすることになっています。

現在ミデルブルフ市は平和教育を学校の教科に組み入れる可能性について検討中であり、ます。長崎との関係により、私たちは1945年に長崎で起こったことを市民に正確に伝えることができると思います。平和と安全の維持のために不可欠な連帯のための努力がその回答であります。これこそが今日の世代が未来への展望をもつことの出来る、唯一の道であります。

問題は、全人類が生き残ることができるかどうかであります。世界的脅威によって今、全世界での意識の高揚と行動が必要となってきました。

このことが今回の会議の最終的な成果となるよう希望し、祈念するものであります。

## 都市報告14

オタワ(カナダ)市長  
マリオン・デュワー

オタワ市民およびカナダからの参加者を代表してごあいさつを申し上げます。

この会議は私たちにとりまして大変貴重な経験であるとともに、私はこの会議の開催を決意されました皆様の勇気をたたえたいと存じます。私は参加者の皆様によりまして当初の目的を達成し、この会議が継続して開かれますことを希望します。

私はまずこの会議が、平和を目指す都市の役割の、すばらしい例を示すシンポジウムであると明言しなければなりません。私は戦争のない世界の追求のための会議を組織されました方々をたたえたいと存じます。

私は世界的視野で考え、地域において行動することを強く信じていますので、私の街で平和が地域的な問題となっても決して驚くことはありません。

政府は軍備競争に反対する人々を完全に封



じ込め、さらに国の政策に対する大衆の反対を妨害しております。このような妨害に直面し、住民はもっと責任ある政府、すなわち地方自治体に目を向け始めました。

オタワでは、1982年に行われた市議会選挙の際に住民投票が行われました。その結果は、均衡のとれた軍縮に対する圧倒的な支持でありました。私たちの呼び掛けにより、100以上のカナダの都市が同様の住民投票を1982年から1983年にかけて行いましたが、同じ結果が出ております。

1982年の選挙に引き続いて、ある地方の団体は、オタワ市が非核地帯宣言をするよう求めました。このような宣言は概して象徴的なものでありますが、市議会はこのような宣言をすることが連邦政府の交渉力を弱めることにつながるとしてこの要求を却下しました。私は個人的には議会の決定に賛成ではなかったのですが、民主主義を守るべく、私は市議会の決定を受け入れざるを得なかったのであります。

この敗北に対して、オタワの中心街にある地方都市の連盟が、市の中心部を核兵器の製造、研究、輸送を禁止する区域にするよう要請いたしました。この要請は、象徴的なものとはまったく異質のものであります。つまり、特にこの地域内には、連邦政府の大部分の建物が含まれており、カナダにおける代表的な軍需産業のメーカーのオタワ事務所もあるからなのです。

この要請が採択されても、既存の企業の活動はそのまま継続できますが、将来これら企業の業務拡張はできなくなります。この要請はまだ採択されていませんが、これは象徴的な意味を持つとともに、地方自治体がとれる大変有効な手段であります。

冒頭に申しましたように、私は平和構築のためにこの会議が果たす重要性を認めるわけですが、私は国際的な範囲にしろ、国内の、あるいは地方のことだけにしろ、平和運動の計画に私たちの都市が参加するよう、私たち各人が導くことが必要だと信じます。

都市がそのようにして参加していくことにより、市民をも巻き込み、市民は目覚め、関心を持ち、ついには行動を起こすのであります。おそらく私たちは、世界の人々が政府を導き、そして政府が責任を持って意思決定できるようにするための先鞭をつけることができると思います。

オタワには100を越える平和団体があります。世界平和という共通の目標によって、すべての障害を乗り越えて、あらゆる階層の人々の力を結集することができるのであります。平和を訴える形は多種多様であります。例えば家庭内の話し合いからちょっとした平和討論会、またデモを行うといったことあります。

しかし、人々の意思表示は真実のものであり、維持されるとともに結局は立法者の注意を引くことになるのであります。

私の最後の提言はおそらく最も重大なことと思いますが、それはここ日本において達成されるものと希望いたします。

それは簡潔に申し上げれば、「理解」であります。今日、世界各都市から来た市長として、私たちは平和について議論しておりますが、来週になりますと自国へ戻り、出発前に残してきた共通する都市の問題に取り組まねばなりません。私たちカナダの市長は下水道、託児所、住宅、輸送、税金などの問題について話し合います。

そういう訳で、世界の都市の集合体である私たちは、相違点を見つけることよりも私たちの共通点を見い出さねばなりません。私たちは互いに訪問し合い、特に次代を担う世代の交流を図らねばなりません。私たちの子供たちは国の宝であります。姉妹都市関係を結ぶことや会議の開催は、都市の国際化や相互理解にとりましてすばらしい機会となるものであり、これらは地方自治体の手によって推進され発展されなければならないのであります。

私たちは軍備のためにお金を使うという狂気を止め、飢餓を救うために使われるように

しなければなりません。それが私たちが共存していく方法なのであります。理解を通じ市民一人ひとりへの尊敬の念によってのみ、私たちは恒久的な世界の平和構築に必要な連帯を達成できると私は信じているのであります。神を理解し神に祈りたいと思います。そして都市の仲間としてともに努力してまいりたいと思います。

## 都市報告15

レッジョ・エミーリア(イタリア)市議会議員  
ジョルダノ・ガスパリーニ

私はレッジョ・エミーリアの代表ですが、この地の近年の歴史は平和のための闘いという点で伝統があります。1911～18年には、すでにレッジョ・エミーリアの市民が男女を問わず、リビアの植民地化に反対する抗議集会に参加しました。女性たちは兵隊が戦場に出かけることになっていた南部の港町へ向かう軍事列車の出発を阻止するために、鉄道軌道の上に横たわったりしました。第一次世界大戦中、イタリアが介入する前夜には、レッジョ・エミーリアの地方と都市から出た三人の労働者が人民平和宣言に加わったことで殺害されました。

1935～36年のエチオピア戦争中、そして特に第二次世界大戦中には、反ファシズム運動の数人の代表者が、平和政策を進めたことで逮捕されて投獄され、処刑されました。

レッジョ・エミーリアの人々は、反ファシズムの抵抗運動に積極的に加わりました。また、あの輝かしい歴史の一時代には、闘いの勇敢さをたたえて金のメダルを授与されました。死者の数は700を数え、多くの村は焼かれ、破壊され、多勢が収容所で死んでいきました。このようにわれわれの市は各国の国民の平和と協力のために犠牲を捧げたのです。

戦後40年間、レッジョ・エミーリアは市民のイニシアチブと平和のための貢献によってこの伝統を守ってきました。この貢献とは核軍備反対の闘いへの貢献であり、不正と血の侵略の犠牲となり、また一部は現在もそうであるベトナム、中東、南アフリカ、アフガニスタンのたくさんの人々との連帯への貢献でもあります。

われわれはいくつかの大陸の町や地域と協力し合って、共同して闘おうとしています。国際紛争の解決として武力を行使したり、再軍備という狂った政策をとることに反対し、その直接の結果生じている世界の飢餓に反対する闘いをしています。

最近、われわれの市長であるウゴ・ベナシィは、恐るべき原爆の最初の犠牲となった都市、広島、荒木武市長と幸いにも会うことができました。われわれの温室では、日本生まれの夾竹桃の若い苗を育てています。それは原爆で被爆しましたが、生きながらえています。そしてこの国の気高い人々を活気づかせて、平和の再建を願わせる生きた証としてそれを育てているのです。

去る五月のわれわれの議会で、レッジョ・エミーリアの地域の核武装を排除することを宣言する動議が満場一致で可決されました。こうした意思表示は、学校、職場、市民生活など社会のあらゆるレベルでの絶えざる活動がなければ、平和な文化を肯定して拡大していけず、単に象徴的な意思表示に終わってしまうかもしれないということをわれわれは十分承知しています。若い世代はこの必要性をたいへんよく自覚しているのです。平和のための闘いにおいては、すべての世代の貢献が常に必要とされるものですが、しかし若い人々からはある特有の推進力が得られるものなのです。なぜなら、彼らは戦争を肌身で知らないけれども、他の世代よりずっとイデオロギー的な条件づけに陥りにくいからなのです。この条件づけというのは、平和の理性と価値の普遍性を無視したり、危険にさらしたりして平和を二つかそれ以上の断片に分けて

しまうのです。

大国を誘導して平和的な和解にこぎつけるためには、人々は核兵器の使用を誘発する傾向とは逆の文化的傾向に従って行動しなければなりません。平和の不可分性、政治的問題とか特別の問題について異なる意見（これは自由主義体制に特有のものである。）があっても、平和と核軍縮問題に関する意見の統一を阻害してはなりません。なぜなら平和と軍縮は自由主義体制発展の主な条件だからであります。

今は以前にも増して、各国の国民間の新しい関係を確立するために、地方自治体の積極的な参加が必要なのです。ただ権力の上に立つ者だけが国際関係の内容とあり方を決定づけ、規制したりすることができたようなこれまでの歴史的傾向をくつがえすことが必要なのです。

われわれが要求しているのは、異なった国々や大陸の諸都市間の文化的、経済的かつ社会的協力のできる新しい関係が有効に、そして恒久的に機能するべきだということなのです。こういう関係は市民外交にとって基本的な組織となりえるでしょう。

われわれの町で何年も成し遂げられてきた諸活動とか、われわれの都市と国家的、文化的、経済的の制度が似ていようと異なっていようと推進してきた協力関係とか、飢餓に見舞われた人々との物質的、精神的連帯行動等は、先に申しました平和構想や核軍備反対の闘いという一貫した運動の中に含まれるべきだと私は確信しております。

地方自治体は、今日の国家間の対立をやめさせるという重要な課題を委託されているのであり、それは力を合わせて集中的に闘っていくことによって達成されるものなのであります。このようなことから、レジャ・エミールリアの町と自治体行政当局を代表して、私は広島と長崎の被爆都市が悲惨な原爆の大量殺人の40回目の記念に、このような偉大な会議を可能にいただいたこと、および世界の諸都市を救済のための活動の主役になっていた

だいたこと、そして人類が調和の中に住むことができるようにしていただいたことに対し感謝の意を表明いたします。

## 都市報告16

サラトガ(アメリカ)市長  
バージニア・L. ファネリー

全世界の人々のために核戦争による全滅、テロ行為の脅威をなくし、思想と言論の自由を抑圧から解放することは、結局は全人類が挑戦すべきことであり、究極的な目標でなければなりません。一人ひとりが将来、子供たちと同じように恐れや抑圧のない生活を送ることは、われわれが国家間の平和を達成した時にのみ現実となり得るのであります。

人類の歴史は紛争の歴史であり、その紛争はますます破壊的なものになってきています。私たちは核戦争の恐るべき破壊も知りました。世界で暴力やテロが増えていくのを目のあたりにして、私たちはさらに高性能の武器がこの暴力やテロの道具となるかもしれないという恐怖を抱いて生活しているのです。

人類の歴史で紛争や戦争が避けられないのであれば、平和とは実現できるものなのでしょうか？ 私はできると信じています。平和とは戦争がない状態でも軍縮協定があるということでもありません。平和とは心の変化であります。

それでは、この心の変化はどこから始まるのでしょうか？ 私たちがここに世界各地から集まって平和を語り合い、実際に核戦争の途方もない破壊を見た時に、私たちは静かに己れに問いかけました。「私は世界平和に対して個人的に何か影響を及ぼすことができるのでしょうか？ 私の市の住民たちは、世界平和の障害が何かを見つけ出せるのでしょうか？

私たちは心の変化を成し遂げることができるでしょうか?」「できる!」と私は思います。

人間にはそれぞれ相違があることを私たちは知っていますし、この相違を是認して受け入れる一方で、過去にはこれらの相違に固執して戦争の手段に訴えていましたが、それは今日では文明世界の破壊を意味することを知らねばなりません。私たちは相互関係、相互依存的な生活援助制度を共有するようにして、個人としても市としても戦争によらずに生活と自由の権利を守るための手段を探索しなければなりません。

教育は心の変化をもたらすための礎石でなければなりません。つまり国民性、思想や文化などをより理解するための教育や、考えや技術知識や資源を合せて行われる教育、世界各地の人々との人間関係の促進を通じて行われる教育などがあります。アメリカの建国の父の一人であるトーマス・ジェファースンが言いました。「社会の力の源は究極的には人でしかない。人々が十分に教育されていないならば、その改善策は彼らから力を取り出すことではなく彼らを教育によって啓蒙することである。」

われわれの市は異国家間の人々の教育に積極的な役割を果たしてきています。1974年には何年かの共同作業の後、日本の向日市と姉妹都市縁組を正式に確立いたしました。この関係が始まったのは何年も前にわれわれの市がアメリカで最も本格的な日本庭園を建設したからです。この庭園が特別な財宝であることが分かって以来、われわれはこの姉妹都市と共同で公園の整備と将来の開発計画をつくりました。われわれは各国の芸術家が滞在して自国の芸術を教える芸術センターの建設や、神社、竹の栽培の国際研究所などの建設を計画中であります。私たちが望んでいるのはただわれわれの相互関係が発展していくのみでなく、ここで生まれた技術や知識が全世界の人々に分かちあわれることであります。

この姉妹都市縁組は市の職員と市民との距離を近付けましたし、言葉や伝統の違いを越

えて泣いたり、笑ったり、踊ったりしているうちに友情を築きあげたのです。

われわれの若者たちは、国内外における交換留学制度に参加し、市民たちは毎年外国の若者たちを家庭に受け入れています。

われわれはまた、われわれの地方で起きた『戦争を越えて』と呼ばれる平和運動にとっても関心を持っております。これは今、盛んに活動している市民グループで、彼らは世界の天才的科学技術者たちが戦争を、問題解決の手段としては役立たないものにしたと信じているのです。一都市としてわれわれは喜んでこの平和団体の活動にも参加いたしましたし、今年の5月に「平和教育週間」を宣言して世界平和のために活動している他の団体とも行動を共にしました。われわれの図書館や学校、教会や他の地域団体は数々の活動や展示などを催し、平和な社会にするにはたいへんな努力が必要であることを市民に認識させようとしてしました。

原爆投下後40年が経ってこの長崎に来てみますと、かつては遠く離れた所の名も知らない敵であった人々が、今は国としても個人的にも友人であるということがわかり誠に感動いたしました。心の変化は現実になり得ることを知ってなお感動いたしました。全世界の人々のお互いの努力を通して、友情と理解の同じような進展は国から国へ、市から市へ、人から人へと広がっていています。

理解や尊重、信頼が世界の人々の間で大きなものになるように平和と個人の自由の実現も育っていくのです。

## 都市報告17

ザンクトウルリヒ(オーストリア)村長  
タドオイス・シュタインマイヤー

人類がいかに危険にさらされているかを口で繰り返しても、この恐ろしい事実を真剣に心にうけとめそれを率直に信じないならば何の結果ももたらさないでしょう。

原爆はまさに私たちのこの世界に存在しています。原爆はいくら願っても、話し合っても、消えるものではありません。まして抗議をしてもなくなるわけではありません。原爆の製造に関する技術はなくすることができないのです。私たちは、原爆と共に生きていかねばなりません。しかしながら、危険があまりにも増大し原爆と永遠に共存することができないような状況です。

原爆前の状況を改めてつくることはできません。もし出来たとしても原爆そのものによるか、すべての知恵と知識を壊すことによってしか可能ではありません。これらのことはまぎれもない事実です。しかしながら私たちがこれらの問題に単に感情だけでなく知性の力を手段として対処しようとするれば、これらのことは私たちに出発点を与えてくれます。

私は全体主義ではなく統合を目的とした世界平和秩序を目指した対話の中に、この不満足な状態から抜け出す希望の道を見い出すことができます。

東欧圏の軍縮と平和に関するモスクワ宣言によると、いかなる世界の問題も軍事手段の使用によって解決することはできないし、同様に今日の主な矛盾をもたらしている資本主義と社会主義の対立も解決することはできません。このように対話と交渉が唯一の解決策です。対話をイニシアチブの中心にすえるならば、対話が二大社会体制の間にあり、世界を一つに統一すること即ち平和に向かう方向にあれば、平和運動は成功するでしょう。

世界の情勢の中心に力の対立関係が存在しています。しかし誰が歴史を作っているのでしょうか？ それはアメリカの大統領でしょうか、はたまたソ連の指導者でありましょうか？ 答は「ノー」であります。ローマ法王がいうように、対話という手段によって、伝え残すことのできる倫理的価値、人間の思考方法があります。そしてこれらが結局は歴史を決定しているのです。

客観的自由のようなものはありません。自由は、責任と結びついています。自由は、孤立している個人ではなく、社会の一員としての人間に特有のものであります。

対話は人と人の基本的なコミュニケーションであり、顔と顔を合わせて行われるべきものです。報道媒体を通じての対話は極めて限定された方法でしか成果を得ることができません。政治指導者の直接の話し合いが高く評価されているのは、まさにこの理由からです。世界は東西ブロックの指導者の直接の会談に平和交渉での進展を期待しています。

力の関係がたえず変化していることは歴史が教えています。また、対立ではなく対話という手段によって促進される内部の改革があることも教えています。両陣営—東と西—は変化するでしょう。世界社会について語る時、私たちは両体制とも信頼と相互理解という過程を経たあとで、お互いを必要とするようになることを認識しなければなりません。

「私たちは何ができるか？」を問う前に、人類のより高い理想に関するくだらない流言を防ぐために、「何故考えなければならないか？」という質問に答えなければなりません。

これらは現在あらゆる政党の綱領でいわれています。ただ、これらはわれわれの経済的、政治的、文化的生活の現実から離れた発言であってはなりません。

われわれ自身の要求を十分に見極めたあとで、(平和の心が)人間の精神の中から沸き出て成長している最近の状態から益々明らかになっていることを、西の資本主義と東の共産主義の原則が受け入れているかどうかを良



く考えて見ましょう。それは具体的な自己責任、即ち秩序と服従、権力と特権といった関係に依存しないことを求める人間の意思に見ることができます。

私たち一人ひとは、平和を確保するためそれほど多くのことをすることができないのです。私たち一人ひとは、しかしながら少しでも貢献でき、また、たくさんの人が何かをやり遂げようと努力すれば多くのことができるのです。

もし平和を主張するならば、私たちは平和を思うままに扱うことができないことを認識すべきです。

しかしながら、私たちは、自分が住んでいる所、即ち自分の家庭に、地域に、平和を植えることができます。本日の平和会議に集まった都市でこのことを始めようではありませんか。

平和のうちに生きることは、人間の真剣かつ強い願望であり、平和のために活動することは、価値ある義務であります。

## 都市報告18

サンシャイン(オーストラリア)市長  
イアン・M. ミル

私はまず、この素晴らしい会議を準備し開催された広島、長崎の市長さんの意義あるイニシアチブに対して敬意を表するものであります。この会議で到達する結論が、広島でもそうであったように、統一と未来への願いという重要な意味を世界に伝える基盤をつくりだせるものと確信しております。

すべての善意の人々が世界平和の樹立と維持へのわれわれの願いと考えを同じくしていることは疑う余地のないことであります。都市の市長は大きな影響力をもっており、地域

社会の考えを調整しこれを政府に伝えることができます。

平和の継続という問題は、今日の時代の基本的問題であります。その他の事柄は二次的なものです。市民の生活水準、社会福祉、病気や飢餓の存在に関する事柄は、すべて重要なことではありますが、この地球が生き残れるかどうかという問題に比べれば小さなことであります。50年前であれば単に領土や国の生存といった問題であったことが、今日では全く違った歴史的意味をもつ問題になっているのです。

20世紀中頃の前爆の製造と広島、長崎への投下以来、どこに住んでいようと誰も安全ではなくなっているのです。第二次世界大戦中、皆様がオーストラリアにいたとすれば、また戦争が例えばソ連で行われていたとすれば、皆様は比較的安全であったかもしれません。いずれにしろ、どちらの側が勝っても、征服された国は、最悪でも占領という形で生き残ることができたかもしれません。

核兵器の到来に伴い、戦争当事国はもちろん第三国も数日も生き残ることはできません。北半球での核戦争の影響は、気流や温度の変化などにより南半球の滅亡をもたらすことは火を見るより明らかです。

限定核戦争はあり得ないと私は思います。全人類を100回も殺す「過剰殺りく」に至るほど核兵器が拡大したことは、かりに兵器の初期の開発を支持したとしても、莫大な経済的浪費に他なりません。

何千万ドルもの金を核開発やスターウォーズ(戦略防衛構想)のようなものに使わないならば、病気や貧困の解消に貢献できるであります。このことについてはすでに何人かの人がこの会議で言及されました。

核軍備はいかなる立場をとろうとも、狂気であります。西側においては、恐ろしいほどの軍拡計画は、ソ連が本来攻撃的で、民主主義への脅威であるという誤った考えに立脚していると私は信じています。第二次世界大戦で2千万の人命を失い、将来また攻撃される



ことを極度に恐れているソ連の人たちについて私はそう思いません。ソ連の軍拡は、常に他国の軍備計画への反応であり、世界の他のすべての国に先がけた、十分計算しつくされた計画ではないと私は考えます。

核兵器を最初に使用する国にはならないという最近のソ連の宣言を心から歓迎します。私はこれを誠意ある宣言と受け取っています。その影響で、他の国も同じ立場に立って努力するようになるべきであると考えます。

この会議で平和教育の重要性に言及された方々に称賛の言葉を送りたいと思います。私と家内は共に元教師であります。これまで平和教育の考え方を支持してきました。娘はキャンベラ市で平和教育の特別な事業を推進しています。

結局のところ平和のためには、また偶発的あるいは狂人がボタンを押すことによる核戦争の可能性をなくそうと思うならば、世界の人々の決意と団結が最も大切な要素であります。特にこれからの10年間、国会議員を選ぶ新しい基準すなわち彼らが軍備競争に反対か賛成かという基準を確立しなければならないと思います。口先だけの世論操作術ではなく平和と安全のための世界の取り組みにおける考えと行動に基づいて選ばなければなりません。

私は1939年から1945年に兵役に従事し、太平洋で日本との戦争を経験しました。それにもかかわらず、私は恐ろしい核の破壊を経験した日本人の未来を考える、平和を愛する心に敬意を表します。

太平洋圏内において、日本、オーストラリア、ニュージーランドと東南アジア諸国は、相互に特別の関心と、この地域を平和志向の核のない地域として守る責任をもっています。

ビクトリア州サンシャイン市からここにおいでの方すべての都市に友情の手をさしのべると共に、私は、最近「非核州」の宣言をしたビクトリア州において平和運動の発展と核兵器の完全廃絶のために努力することを皆様に

お約束いたします。

## 都市報告19

トリノ(イタリア)市助役  
ジュゼッペ・ロディ

世界の人口の15億以上が都市居住者で、その数は常に増え続けています。1960年には人口の30%が都市に住んでいました。2000年までにはその数は50%を越え、100万以上の人口をかかえる都市は300以上になることでしょう。このような統計数字が第1回世界平和連帯都市市長会議の重要性を表わしています。われわれの時代の諸問題の解決のために、各国民間の新しい対話のために、そして国際協力のために、都市間の連帯は決定的なものとなることでしょう。

そこで、もしもわれわれの都市生活の質が妥協されるべきものでなく、またもしも経済的、社会的費用が支えきれないものにならないかぎり、われわれはわれわれの都市の生活と発達を計画化していかなければなりません。なぜならば、そのような状態において人間はもはや自由と民主主義にとって不可欠な道徳的、社会的状況を見出せないからです。平和と民主主義の間、自由と平和主義の表明との間には実に直接的な結びつきがあるのです。

これがこの市長会議の全体会議の主題であり、これとともに核兵器の禁止、人類の大きな社会問題に対する平和的な解決策、国連憲章に示された諸原則に照らしてわれわれの都市がなすことのできる貢献、そして学校や情報伝達を通しての平和教育などについての国際的連帯の議題があります。

都市は常に戦争の最初の犠牲者であり、従って都市は生き延びる自由を求めています。

平和のための教育は、軍縮と平和共存の文化を推進していくための市議会の努力の基本的な側面なのです。トリノ市はこれまで長いこと、あらゆる可能な機会に諸国民間の出会いを進めていくことに参加していました。その出会いは知識をもたらし、知識は友情およびわれわれの地球から多かれ少なかれ最後の惨劇の亡霊を追放するのに有効な方法となり得るような文化的、行政的、かつ、商業的な関係につながっていくのです。

トリノ市は平和と国際協力に関心を払っており、長いこと世界の大都市による共通の行動を進めるべく働いてきました。そのような行動によって、飢餓、未開発および平和の諸問題の解決に役立つ新しい経済的秩序を創り出すための、世界の人的、物的資源の計画的再配分を行うことができるでしょう。

1982年にトリノ市議会は、全世界の市民およびトリノ市民の平和への希求を認識して、種々の平和組織や団体と協議した後で、市の全政党の支持により、平和と国際協力を主導するための公共委員会を設立しました。この委員会はそれ自身の基金を持ち、戦争や未開発に苦しむ国々との連帯や協調の具体的表明を促進し、世論を高める目的をもつ率先した計画を推進しているものです。

そのような行事のうちの一つで、広範囲の支持を得たものは、『広島への訴え—1983年展示会』で、これは今もなお映画会と合わせてわれわれの学校やコミュニティー・センターなどを巡回中です。

またいくつかの市議会の選挙区は最近、自分たちの地域を非核地帯として宣言しました。市議会はそのような提唱の持つ深い倫理的な価値を承認して、1985年3月27日の議会で、満場一致の支持を得て次のような議事録を採択しました。すなわち、「核の力に関する国際会議」が出来るだけ早く開かれるようにトリノ市の政治的な力をふり向けようというものであります。われわれはまたこの議事録の中身を公表して、トリノ市自身を非核地

帯とする提案を審議する公開の市議会を召集することに同意しました。

トリノ市の名において、私はこの市長会議に意義深い貢献をすることができてうれしく思っています。われわれ地方の自治体こそが、われわれの社会が直面しなければならない最大の挑戦に具体的反応を与えるものであると私は思います。

どうかこの会議が、国家間の実りある対話のために、また、政治的、文化的多元性が共存する平和な社会への民主的な参加のために、試みと刺激となる新しい効果的な場をつくりだすことに役立つよう希望します。

#### コーディネーター（飯島宗一）

以上で後半に予定いたしました10都市からのご意見の発表を終わります。各都市がそれぞれたいへん貴重なご意見を発表していただいたことに対して厚くお礼を申し上げます。どうぞ壇上の発表都市の方々は自席へお帰りいただきとうございます。

#### コーディネーター（飯島宗一）

それでは、この機会に発言を希望しておられる都市が若干ございます。この機会になるべく多くの参加都市の方からのご意見をうかがうほうがいいと思いますから、みなさんのご了解をいただいてあと若干の都市にご発言をお願いしようと思います。

ただ時間が限られておりますから、恐縮ですが3分内外の短い時間でご意見を頂きたいと思います。ご発言は自席からお願いしたいと思います。それでは沖縄県的那覇市長の親泊康晴さん、お願いいたします。

## 都市報告(追加発言 1)

那覇市長 親泊康晴

私は、わが国最南端に位置する沖縄県的那覇市長の親泊康晴でございます。

国内外からご参加された市長の皆さんには、長い期間に亘る会議であります、充実した会議でありますので、お疲れもないと確信をしております。

私もまた、このように各国の市長さんや参会者の皆さんに対して、本市の平和への取り組みを報告できることを光栄に思い喜びとしております。

さて、私の平和都市建設への基本姿勢であります、私は、わが国の平和憲法を遵守し、戦争につながる一切の施策を拒否することを市政運営の第一の柱としております。

その第一の理由というのは、私たち沖縄県民が受けた悲惨な戦争体験に由来しているからであります。即ち沖縄は去る第二次大戦で、広島、長崎同様大きな犠牲を受け、とりわけ、日本国内で唯一の地上戦の戦場となり、沖縄に住む12万の住民を含めて20余万人の尊い生命と数多い文化遺産を失ってしまいました。

その悲惨な戦争体験を繰り返さないための唯一の道が戦争につながる一切の施策を拒否することから始まると考えるからであります。

理由の第二には、地方自治体の長は、住民の生命、財産の安全と福祉の向上を図る第一義的責務を有すると考えるのでありますが、その目的を達成するためには、平和こそが必須条件だと考えるからであります。

私は健全な都市建設のため、本市内にある一切の軍事基地の撤去を求めており、一方、米ソ両大国をはじめとした核保有国に対し、核兵器の廃絶を求めた書簡を送りましたが、今後とも各国、各都市の取り組みを学びつつ

平和への努力を重ねて参りたいと思っております。

## 都市報告(追加発言 2)

ピストイア(イタリア)市長代理  
ルチアーノ・パリーニ

私はこの会議の精神と目的を心から支持するピストイア市を代表して広島、長崎にやってきました。

1982年ピストイア市議会は市の区域内に核兵器の持ち込みを禁止することを宣言しました。それは人類滅亡の危機の前には道徳も政治も独立しては存続し得ないという自覚から生まれた決定でありました。

今回の会議は、政党、国籍の違いを越えてさらに多くの都市が市の区域内の核兵器を禁止する宣言を行えるような契機をもたらすことができると思います。この他にも都市は平和の条件である出会いと対話の場を拡げるため積極的に働きかけねばなりません。

とくに若者のための交流、会合、情報交換といった計画は実行に移されるべきであり、そうすれば平時の文化が単に平和への願いに終わることなく人間の人生経験において具体的な形で実現するでありましょう。

マドリッド市長のドン・ティエルノ・ガルヴァン氏はモンテリオールで開かれた世界都市連合(UTO)の会議において次のように述べられました。「都市は国家の論理と力の政治に基づいた国際間の関係を変様させ、道徳に基づく国際関係を築き上げるよう努力しなければならない。」

私たちはまた次のことを心にとめておかねばならないと思います。即ち核兵器廃絶を目指すことは兵器産業の転換の問題、さらには工業国の政治に大きなウエートを占めている軍事産業との衝突といった問題を引き起こすことになります。

このことは核兵器の分野における科学の進歩をどう方向づけるか、そしてスターウォーズ（戦略防衛構想）の将来の進展との関係をどうするかについても検討しなければならないということも意味しています。

平和の政策は「北」の先進国と飢餓に苦しむ「南」の後進国との不均衡をなくすような新しい発展のための資源の配分とか新しい世界秩序というような問題も提起していることは事実であります。

8月9日、ローマで行われる集会のためにイタリアの市長が提出した声明文には次のように書かれています。「1945年8月の核兵器の惨事を記憶にとどめておく最良の方法は、今年行われる予定の『生命と平和のための国際的行動』を実現し、核の惨事と飢餓の廃絶に貢献することである。」

都市が歴史の流を変えられることができるかという疑問を抱く人々には、私は、1950年代のはじめ各国民間の対話のために多くの都市が果たした役割を思いおこしていただきたいと思います。

私自身、そうした役割を果たした都市のあるイタリアの一地方トスカーナ州の出身であることを誇りに思います。フィレンツェの当時の市長ジョルジオ・ラピラ氏はフィレンツェを世界各国の人々の出会いの場とし、平和共存の政策を推進するなど、平和のために強い情熱をもって努力されたのです。

このような例からも、私たちは自分のもつ力をもっと信じるべきです。そして広島、長崎の悲劇が二度と繰り返されないように共に努力しようではありませんか。

## 都市報告(追加発言3)

ニューポート(イギリス)市長  
シリル・サマーズ

平和を求めて集まった皆様とご一緒できまことをうれしく思います。

私はこの会議の参加者に向けてお話するのでありますが、私が申し上げることはこの会議に出席しない方々に対しても大切な内容であると信じます。

私たちが知っている世界というのは、私たちが望んでいない世界であります。私たちは銃や爆弾により不正を正そうとする、また世界を全滅させようとするような暴力に満ちた社会は必要としていません。私たちは罪もない人々が卑しく生きるよう運命づけられ、また飢えや病気のため幼くして死ぬといった不幸に遭うようなことは望みません。

人間の尊厳が否定され、常に虐待され搾取されるような世界は誰も求めないのであります。対立する2つの陣営が、地球全体を不毛の地とするような核兵器の工場をさらに増やそうとするようなことは、誰も求めないのであります。誰もそのような世界は望まないのですが、私たちが住んでいる世界がそのようになっているのであります。なぜ私たちが望まない世界が現実として今あるのでしょうか。そのような世界にしたのは私たち自身なのであります。私たちがそのような怪物を誕生させ、造り上げたのです。それはなぜ？過失は私たちにあるのです。私たちは忌み嫌うものを造り上げたのであります。そして自らがつくり出したものに私たちはおののき、茫然としているのです。

外の世界は人の内なる心を反映したものであるという事実にも同様にがく然としているのです。暴力や同胞を殺し合う戦争が起きる以前に、人間の心の中で憎しみとか苦しみ、貪欲さなどが生じているわけであります。40年前ここ長崎の地に原爆が落とされる以前

に、人の心の中にはすでに落とされていたのであります。暴力のことを考えている間は、暴力のことしか分かりません。平和を思う時、私たちは平和を築き上げ、保てるのではないのでしょうか。

平和は人の心の中から始まります。このことは私たちの平和構築への努力が主観的であるとか、政治的方向性がないということの意味するものではありません。それとは反対に、明確な政治的計画は不可欠であります。しかし政治のやり方は個人の経験とかけ離れたものではなく、その経験から見い出されるべきであります。平和は正しい態度や価値、そして関係から発展するものです。平和は本質から生じるのです。平和は分割できないのであり、総合的なものであり消えてなくなりやすいものです。

平和への道があるということではなく、平和そのものが道であります。平和を保ちながら、不正、貧困、飢餓などの人類の尊厳を損う状態を見過すことはまちがったことであります。経済戦争を引き起こす一方で、つまり、自国の繁栄を図り、他の国々は貧困にあえぐといった経済政策をとるようでは平和は保てないのであります。

憎しみや苦しむことがなく、全ての人々の生活水準を向上させることが平和につながるのであります。

戦争、あるいは戦争の準備、そして戦争を防ぐための抑止さえも平和をもたらすことはありません。平和とは信頼であり、友好であり、社会正義であります。世界の資源の建設的な使用が平和をもたらすのであります。

今回私たちが集まっている間でさえも、原爆投下は正しかったと言う人が西洋にはいるのです。広島、長崎の出来事が人類の悲劇というよりは、たいへん効果的な戦争のための兵器であると考えることが軍事的考え方なのであります。この軍事的考え方こそが悪いといえるのです。私たちはこの戦争の精神を建設的である平和構築の精神に転換したいのであります。

核の時代においては、人類は1つの選択肢を失いました。それはすなわち戦争という選択です。

私たちは兵器の取引や軍拡競争に対して異議を唱え、人類に共通な友好と団結の基礎を追求する新たな道を探し出さなければなりません。自国と自由を守る闘いは、人類の最高の勇気と献身であることを示しています。そして人類の闘いの中に英雄的な信じ難い犠牲があったのであります。すべての危険を冒しても平和を構築することが最も勇気のあることであります。そしてこの意味で、私たちはグリーンナム・コモンの女性たちに対して大きな尊敬の念を払いたいと思います。彼女たちの勇気と犠牲が私たちへの手本となるのであります。

この会議において、すべての政府が市民の意見に耳を傾けるよう私たちは求めています。

## 都市報告(追加発言4)

北九州市長 谷 伍平

40年前の8月9日、原爆を搭載した米軍機が北九州市に飛来しました。天候不良のため原爆の投下をあきらめて、一転して長崎市へ目標をかえ原爆を投下したことは広く知られております。九州大学の森教授のシュミレーション調査によりますと、もし北九州市に原爆が投下されていたら、5万7千人の市民が死亡し、北九州工業地帯の3分の1が壊滅していたであろうと推計されております。北九州市民は長崎市民に対して、このようなことから深い同情の念を持ち続けております。

北九州市民は自らを“準被爆都市”という位置づけをいたしております。

毎年8月6日の広島、9日の長崎の原爆投下記念日には、被爆者の冥福と世界の恒久平



和への誓いを新たにするために、広島市長並びに長崎市長とメッセージの交換を行っております。1973年には北九州市内に居住する被爆者団体の皆さんと一緒に、原爆記念碑を市庁舎近くの公園に建設いたしまして、毎年8月9日にはこの碑の前で、原爆犠牲者のご冥福をお祈りし、平和祈念式典を行っております。

1976年には、長崎市からアンゼラスの鐘のレプリカをいただきまして、これを平和を目指す市民の心の糧として毎年式典の時にこの鐘を打ち鳴らしております。

市といたしましては、平和を大切にすることを育て、原爆被害の悲惨さを市民に知ってもらうため、被爆写真展をはじめいろいろな催物を機会あるたびに開催いたしております。また、特に青少年に対する平和教育に力を入れ、市民運動に対しては積極的に今後も支援をしていく考えであります。

## あいさつ

コーディネーター（飯島宗一）

それでは以上で今日のご発言を終了いたします。皆さんお聞きになりましたように、今日の午前中は各都市の代表者の方々から、極めて内容のあるお話を承りました。そのお話しは、世界の平和、人類の未来に関する基本的な問題から、この課題に関して各都市がいかなることを行わなければならないか、という問題に関する経験とご提案が、それぞれに語られました。私は深く感銘いたしました。そして今日、この長崎の地でこのような会議をもったことを大変幸せに存じます。今から40年前われわれがいま会議を行っている場所の光景は、おそらく惨たんたる地獄の様相であったと思われます。

われわれが今話しをしているこの場所で、多くの人々がその命を失っていったと思われます。もしそれらの人びとがいま天にあってこの場所で、今日このような会議が開かれたことを見て下さるならば、そのひとは無限に慰められると同時に、彼らの子孫、人類の将来に対して再び明るい希望を取り戻して下さるであろうと思われます。たいへん感銘の深い会議でありました。再度皆様のご協力に対してお礼申し上げます。

どうもありがとうございました。

司会（松永長崎国際文化会館館長）

飯島先生どうもありがとうございました。それから貴重なご意見を発表していただきました市長さん方どうもありがとうございました。

これをもちまして全体会議Ⅲを終了いたします。



## 被爆体験の報告

出席者

被爆者体験報告 下平作江，下谷富太郎，谷口稜嘩

学識経験者 秋月辰一郎（聖フランシスコ病院院長）

西森一正（長崎大学医学部教授）

被爆後40年たった今でも苦しんでいる被爆者を代表して3名の被爆者が、被爆当時の惨状、その後の肉体的、精神的苦しみそして核兵器廃絶への願いを切々と訴えました。

また医師であり、自らも被爆者である秋月辰一郎氏と西森一正氏が医学的立場から助言するため同席されました。

体験報告のあとの質疑応答では、特に放射

能の影響、被爆者への医療・救護活動に関する多くの質問が寄せられました。

最後に参加都市のある市長さんが「日本だけでなく核兵器の配備してある国の人にも被爆体験を語って欲しい。大切なことは今日見たこと、聞いたことを忘れないことである。」と述べ、被爆体験の継承の重要性を強調しました。

## —SSD Ⅲへの対応方針の確認—

8月9日(午後3時～3時20分)  
長崎市平和会館

1. 司会あいさつ..... 145  
長崎国際文化会館館長                      松永 照正
2. 長崎アピール起草委員会の経過報告..... 145  
コーディネーター                      飯島 宗一
3. 長崎アピール発表(日本語)..... 146  
長崎市長                      本 島 等
4. SSD Ⅲへの対応方針起草委員会の経過報告..... 146  
コーディネーター                      飯島 宗一
5. SSD Ⅲへの対応方針の発表..... 147  
広島市長                      荒 木 武
6. 緊急提案..... 148  
ヴェルダン(フランス)市長  
ジャック・バラ-デュポン
7. 追加提案..... 148  
パロアルト(アメリカ)市長代理  
マイケル・H. シューマン



司会（松永長崎国際文化会館館長）

第1回世界平和連帯都市市長会議の全体会議Ⅲで貴重なご意見をいただきまして大変ありがとうございます。また長崎アピールの起草委員会では熱心な討議が行われました。そういったことを踏まえましてただ今より長崎アピールの発表をいたしたいと思いますが、それに先立ちましてコーディネーターとしての大役を務めていただきました飯島先生から経過のご報告をお願いいたしたいと思います。

飯島先生よろしく願いいたします。

## 長崎アピール起草委員会 の経過報告について

コーディネーター（飯島宗一）

昨日の全体会議におきましては「平和構築への都市の役割」を主題に23の都市からそれぞれの都市の平和・反核への取り組みについて報告がありました。

それを通じて私どもは世界の恒久平和を築いていく上で、都市の持つ役割、影響力そして責任が今や極めて大きいことを確認し得たと思います。そして、その役割を果たしていくためには、姉妹都市の輪を拡げることなどを含めて都市の国際的連帯と協力が重要であることが指摘されました。また、都市は人々が日常生活を営み社会的活動を行う基本的な共同の場であり、その場において平和の精神が貫かれ、自由と信頼と友愛がはぐくまれることこそ人類の平和の基礎であることが明らかにされました。そしてこの理想を未来へつなげるべく平和教育に力を注がなければならないことが共通に認識されたのであります。

長崎アピール起草委員会は以上のような全体会議の成果を踏まえ、昨日午後約2時間に

わたって討議を重ねました結果、後ほど長崎市長からご発表いただくようなアピールを起草いたしました。私ども起草委員会はこのアピールがご参加の全員の熱烈なご支持を得て内外に宣言されることを心から期待をいたします。なお、起草委員会においてアピールの中には直接表現されませんでしたが、いくつかの基本的な問題について委員から切実なご発言・ご提言があったことを申し添えたいと思います。

その1つは、イタリアの代表から明日の地球への希望のための基本的な事柄は「self determination」すなわち個々の人間が自由に自ら決定を下しうることこそもっとも重要であるという主張がありました。また、第2にカナダの代表その他からこの会議を終結するにあたって今後われわれは具体的に何を為すべきかについての取りまとめが必要ではないかという発言がありました。すなわち、この世界平和連帯都市市長会議を永続的な組織とすること、少なくとも次回の開催について、その方針および開催地について何らかの取り決めを行うこと、およびこのたびの会議を終わって各都市はそれぞれ何を為すべきかなどについて何らかの合意に達しておくことが望ましいのではないかというご意見であります。これに対して出席されていた荒木広島市長より、広島・長崎両市はこの会議終了後このたびの会議の成果を整理した上、それを報告書の形で参加各都市に配布し改めてこの会議の恒久化、組織の在り方、運営の仕方などについてご意見を伺い、なるべく早い機会に具体的な方策を得たい旨のご発言がありました。そして、開催地その他についても広島市・長崎市が以上のような仕事を遂行する上で幹事的な取りまとめの労をとりたい旨の発言がありました。

起草委員会といたしましては、このことが速やかに達成されることを期待いたします。

以上が、長崎アピール起草委員会での審議の経過の概要でございます。

司会（松永長崎国際文化会館館長）

どうもありがとうございます。引き続きまして長崎アピールを議長であります本島等長崎市長とマリオン・デュワー、オタワ市長から発表させていただきたいと思います。本島市長の方から日本語で、マリオン・デュワー市長の方から英語で行いたいと思います。

す。どうぞよろしくお願いいたします。

長崎アピールの発表（日本語）

長崎市長 本島 等

長崎アピールの発表（英語）

オタワ市長 マリオン・デュワー

## 長崎アピール

われわれは、40年前、ヒロシマ・ナガサキで使用された核兵器によって、両市が約21万人の人々とともに完全に死滅し、その後両市は奇跡の復興をとげたが、通常兵器と決定的に異なる放射能障害が今なお多くのヒバクシャを苦しめていることを確認した。

現在の核兵器は、ヒロシマ・ナガサキで使用された核兵器の数千倍の威力を持つといわれている。人口と中枢の機能が集中しているわれわれの都市にもし核攻撃が行われたら、ヒロシマ・ナガサキの数千倍のダメージを受けることになる。しかも、報復が報復を生み、やがて全世界を放射性物質が覆いつくし、気象までも変化し、人類滅亡に至ることは間違いない。

以上の認識を基調に、われわれ23カ国81都市の市長は今世紀最大の危機である核戦争の脅威を取り除き、人類の英知と努力によって築き上げたわれわれの都市の発展と人々の生活を守り、これからの世代に明日への希望を持てる地球を遺産として残すために、長崎に集い、熱心に討議を行った。

その結果、この会議の総意に基づき、全世界の都市と市民に訴える。

- 1 われわれは、核兵器に対する認識をさらに深め、まず核戦争の防止と核兵器の即時削減、そして最終的核兵器廃絶に向けて努力し、宇宙までも軍備競争が広がらないようにしなければならない。同時に、無制限に拡大する通常兵器の軍縮を訴えるとともに、軍備競争がもたらす経済負担の除去に務め、飢餓問題その他地球上の諸問題にもできるだけ関心を払わなければならない。
- 2 われわれは、そのために民族、国情、文化、政治、社会、経済条件の相違を越え、さらに各種の都市間交流を促進し、相互理解を深め、必要があれば共通の課題のもとに連帯しなければならない。同時に、国際機関が行う平和維持と貧困絶滅のための施策を支持し、協力しなければならない。

1985年8月9日

第1回世界平和連帯都市市長会議

司会（松永長崎国際文化会館館長）

ありがとうございます。それでは長崎アピールにご賛同いただきましたらもう一度盛大な拍手をいただきたいと思います。（拍手）  
どうもありがとうございます。

では引き続きまして SSD Ⅲ への対応方針の確認に移りたいと思います。

ここでコーディネーターの飯島先生から再び経過を報告していただきたいと思います。

コーディネーター（飯島宗一）

この会議の一つの重要な具体的な成果として第3回国連軍縮特別総会を早期に開催するように働きかけるということが8月6日の広

島アピールで確認されました。そこでこの第3回国連軍縮特別総会の早期開催を求めることをめぐって具体的な対応方針について検討するために広島アピールの起草にあたられた各市長を主な起草委員とし、会期中に2回にわたって熱心な検討、議論が行われました。その結果後ほど荒木市長からご発表をいただけるような形のSSDⅢへの対応方針がとりまとめられました。起草委員会の議論は極めて熱心にこれにかかわる諸問題について徹底的な議論が交わされました。しかし多くのメンバーの積極的な協力によってSSDⅢを早期に少なくとも1986年中に開催すること、またそのSSDⅢの機会に広島・長崎両市並びに他の都市が発言をする機会を与えられること、さらに各都市がこの会議の成果を持ち帰って政府や関係機関にSSDⅢの早期開催を働きかけること、あるいは国際平和年として予定されている1986年に世界的な平和キャンペーンを企画し、これに合わせて各都市も平和キャンペーンを企画、実施することなどを主な内容とするものであります。

そしてこの対応方針は、国連事務総長に向けてこの会議が要請をするという形に取りまとめられております。

長崎アピールと同じくこの原案が参加全都市のご支持、ご賛成を得られることを起草委員会としては、心から希望しています。

司会（松永長崎国際文化会館館長）

どうもありがとうございます。それでは発表は広島・長崎両市長を代表いたしまして、荒木武広島市長から行います。

### 第3回国連軍縮特別総会 への対応方針について

人類史上最初の核兵器が40年前に、広島・長崎両市へ投下され、言語に絶する大惨禍を現出させた。それ以来、われわれは、核戦争による人類破滅の脅威にさらされてきた。広島・長崎の悲劇が再び繰り返されないため

に、われわれは、都市と都市が国境を越え、思想・信条の違いを乗り越えて連帯し、今後、平和の推進に積極的に取り組み、市民の平和意識の高揚に最善の努力を傾注することを確認しあった。

世界恒久平和を確立するために、世界の中で最も主要な平和維持機構である国際連合は、極めて重要な役割を果たさなければならない。第1回世界平和連帯都市市長会議は、各国政府や関係機関に対して、第3回国連軍縮特別総会の早期開催を働きかけることを1985年8月6日の広島アピールで確認した。

われわれは、国連事務総長が、次の点を受け入れるよう特に要請する。

#### 記

- 1 第3回国連軍縮特別総会を1986年中に開催し、核兵器廃絶と世界恒久世界を求める国際世論に応えること。また、すべての国家、とりわけ核兵器保有国に対し、核実験並びに核兵器開発の即時全面禁止と核兵器廃絶を訴えること。
- 2 第3回国連軍縮特別総会において、すべての国家に対し、核拡散防止条約（NPT）を批准するよう働きかけること。また、核兵器によるテロ行為と偶発的核戦争の危機を排除できる恒久的な条約にすること。
- 3 国連事務総長は、核超大国である米ソ両国の首脳に対し、今秋開かれるジュネーブでの首脳会談の一環として、被爆の実相にふれるため、広島・長崎を訪れるよう働きかけること。
- 4 平和の推進に自治体の果たす役割の重要性と戦争による最大の犠牲は都市であり、市民であることにかんがみ、広島・長崎の両市と他の都市が、国連軍縮特別総会に参加し、発言できる機会を与えること。
- 5 被爆の実相を多くの人々に知らせるため、世界の各国連広報センターに被爆資料を常設展示すること。
- 6 1986年の国際平和年を平和な国際社会を築くための転換の年とし、世界的な平和キャンペーンを企画するとともに、国連加



盟国の積極的な参加とキャンペーンの実施を求めること。

昭和60年 8月9日

第1回世界平和連帯都市市長会議

## 緊急提案

ヴェルダン(フランス)市長  
ジャック・バラ-デュボン

ここで一つ提案させていただきたいと思います。40年来、まだヨーロッパでは平和条約に調印されておらず、第二次大戦の関係国はいまだに休戦状態にあります。

私はこの場をお借りして、すべての第二次大戦に関係した国々に、平和条約に調印するようにこの場で提案したいと思います。

コーディネーター(飯島宗一)

ただいまご提案がありましたが、このご意見についてご参加の皆様からご意見がありましたら承ります。

ヴェルダン市長 ジャック・バラ-デュボン

私の発言の中ではこの点についてお話ししましたが、最終的な結論の中では休戦条約について何も語られていないことを大変残念に思います。

コーディネーター(飯島宗一)

ご意見はよくわかります。今ご提案されたことは重要な問題であると思いますが、この外にもまだわれわれがこれから世界の恒久的な平和を確立していくために、討議をし、検討をしなければならない具体的な事柄はたくさんあります。

ただ今のご提案に限らず先程は時間的な関係で説明を簡略にいたしました、起草委員会におきましてもたくさんのご意見がありま

した。また昨日23都市の市長さんからさまざまなご提案がありました。この会議でさきほどこのご提案の結論を出すことは、時間的な関係からもむずかしいと思われますから、今のご提案に限らず、今回の会議で各都市の市長から発表された様々な問題点は、今後の課題としてわれわれがさらに将来それを具体化していくということを、この際コーディネーターとしては確認したいということをご提案申し上げます。

それでご了解いただければ大変ありがたいと思います。

## 追加提案

バロアルト(アメリカ)市長代理  
マイケル・H. シューマン

私は、長崎アピールに反対するわけでも、またその変更をしたいわけでもありません。私たちは、この長崎アピールの決議書作成にこぎつけるまでのたいへんな努力を認め、感謝するものであります。私が申し上げたいのは、次の会議をどういうふうに開くのかということであり、この将来生じる問題について話し合う機会をもちたいと思います。

昨日、私と24名の代表で作成したこの提案は、まだ皆様の同意を得ていません。しかしながら、この提案は次回の会議をどういうふうに開催するかについて、ここに出席されている皆さんの皆様方のご意見を反映していると思います。この提案やこれらの意見は、先ほどの経過報告には反映されていないように思えるわけであり、

少し時間をいただきまして、この提案を読む機会がなかった方やこれを記録に残したいと思っていらっしゃる方々のために朗読したいと思います。

この提案は次のとおりであります。

われわれの声をより広め、参加都市の数を

増やし、さらには核兵器と核戦争の廃絶によって人類の存続を保障するために努力している世界の各都市のより力強い世界的な運動を推進することを目的として、われわれは次の目的を遂行する恒久的な事務局を広島に設置することによって第1回会議の先駆的役割を支持することを決議する。

1. 1986年8月5日、広島・長崎あるいは事務局が適当と認める都市で第2回世界平和連帯都市市長会議を開催すること。
2. 参加都市および民間、国内、国際の団体から寄付金を募り、事務局の活動を推進するための資金を集めること。
3. 機関紙や印刷物を発刊することによって参加都市の連絡推進を図ること。
4. 最後に最も重要なことであるが、参加都市の地域協議会を設置し、運営し、定期的に会合を開くこと。これらの協議会の代表は事務局に所属するものとする。

この提案作成を共に手がけてきた人たちを代表しまして、私は今後何年にもわたってこれらの希望を実現できるよう皆様と共に努力していきたいと願っておりますことを皆様にお知らせいたします。

#### コーディネーター（飯島宗一）

ただいまのご発言は、たいへん貴重なご意見ですからこの全体会議の最後にそういうご発言があったということを記録いたします。それから私が先程起草委員会の経過の中で申しましたように、ぜひこの会議を継続し、なるべく近い機会に次回開催地も決め、またその組織などについてもご相談をするということは、起草委員会の議論の中でも強くでたということを私はあえてここで明確にご報告を申し上げました。そしてそれに言葉を加えてこのことが早く実現されることを委員会としても強く望むということも強く申し上げておきました。これはここに広島・長崎両市の市長もご在席でありますしまた広島アピールの中の末尾にも広島を事務局としてこのことを継続するということがうたわれております

から今のご発言を踏まえて広島・長崎両市を中心に、またここにお集まりの全世界の市長さん方のご協力を得て今のようなご提案が1日も早く実現するようにわれわれも希望いたしますし、広島・長崎両市にも努力をしてみたいと思っております。ただご提案の内容をこまかくこの場で詰めますには、またいろいろな議論を重ねなければなりません。従ってこの処理、後からの行動については、広島・長崎両市に全員でご努力をお願いするということにしたいと思います。ご発言どうもありがとうございました。

#### 司会（松永長崎国際文化会館館長）

どうもありがとうございました。それでは10分間の休けいの後、閉会式を開催したいと思います。



# 閉 会 式

151

8 月 9 日 (午後 3 時 20 分～ 3 時 35 分)

長崎市平和会館

1. 司会あいさつ…………… 153

長崎国際文化会館館長

松永 照正

2. 閉会あいさつ

広島市長

荒 木 武 …… 153

長崎市長

本 島 等 …… 153

3. 参加者代表謝辞

ロッテルダム(オランダ)市助役

ヘンク・ファンデルポルス…………… 154

ドレスデン(ドイツ民主共和国)市長

ゲルハルト・シル…………… 155

4. 閉会宣言…………… 155

長崎市助役

宮川 雅一



司会（松永長崎国際文化会館館長）

ただ今より第1回世界平和連帯都市市長会議の閉会式を行わせていただきます。まず最初に荒木武広島市長がごあいさつを申し上げます。

## 閉会あいさつ

広島市長 荒木 武

第1回の世界平和連帯都市市長会議、これに私共広島市並びに長崎市両者によりまして、世界に賛同されるかどうかを呼びかけましたところ、33カ国110余りの都市から賛同とメッセージが寄せられました。しかし都合によって参加できない都市もありましたが、このたびこの第1回の会議に世界の各地から、外国の方では22カ国67の都市、それから日本の都市から31の都市、合計23カ国98の都市が世界各地から参加され、滞りなく終了することができましたのは、皆様方のご協力の賜であり心から厚くお礼を申し上げます。

日本の季節の中で最も暑い真夏に開催し、しかも広島から長崎へと会場を移しての会議であり、皆様方にはさぞかしお疲れのこととお察し申し上げます。こうした悪条件にもかかわらず、海外から多数の皆様をお迎えでき、各市長さんからは大変意義深いご意見とご報告を頂き誠にありがとうございました。そして平和への決意を結集した広島アピール、長崎アピールが採択され、さらに第3回国連軍縮特別総会への対応方針を踏まえた国連事務総長への提言が合意をみたことは、まさに都市の連帯を象徴する最大の成果であり、大きな喜びとするものであります。

この5日間にわたる会議を終えまして、私は世界の各都市が社会体制や文化の違いを越えて、様々な意見を交換し相互に理解を深めることが、世界の平和を確立するうえで最も重要であるとの確信をさらに強くいたしました。

た。お互いが理解し合えば友愛と協調の精神が生まれ、世界平和のために連帯することができるのであります。

私はこの会議を決して1回だけのものにしたくはありません。私は第1回世界平和連帯都市市長会議を広島・長崎両市が開催したことを踏まえて、今後恒久的に発展させるため、長崎市長さんとも十分協議しながら今後のありかたについて検討していきたいと存じますが、これについての具体的なご意見を皆様から頂ければ幸いです。

どうかこれを機会に、ノーモアヒロシマ、ノーモアナガサキの声が世界により拡がり、核兵器のない恒久平和が一日も早く達成できますようにご尽力いただけますとともに、広島・長崎の願いである核実験の全面禁止と核兵器の廃絶が実現することを願うものであります。今後広島・長崎と皆様の都市との交流がこれを契機にますます深まり、都市および市民の連帯がより広く強いきずなで結ばれることを願うとともに、皆様のご健康とそれぞれの都市のご発展をお祈りいたします。

最後になりましたが、この会議を通じて広島・長崎両市民並びに関係機関のご協力を頂き、とりわけ被爆者やボランティア通訳の皆さんのご協力のもとに無事終了いたしましたことに深く感謝いたしまして閉会のごあいさつといたします。大変ありがとうございました。

## 閉会あいさつ

長崎市長 本 島 等

私は、この会議のずっと前から眠られぬ夜が続きました。それは会議を開催しても東の陣営、西の陣営、発展途上の国々、先進の国々、言い換えれば日本とヨーロッパの都市との間にも大きな違いがあることを私は十分知っておりまして。たとえば核兵器廃絶といえど恒



久平和とわれわれはすぐ続けて申しませんが、核兵器廃絶ということは昔の核兵器のなかった時代に帰るだけのことです。局地戦争は現に行われております。また、戦争がないから平和だということもありません。その都市の中に失業があり、病気があり、あるいは飢餓がある時には、その都市は平和だということにはなりません。また、平和があってもずっと続く恒久平和との間には大変な違いがあります。戦争の問題を一つとらえてみても、日本の私たちは戦争というものを頭の中に無意識的に描かずして平和というものを論じているように思います。しかし皆様方は戦争の行われている地域から直接ここにおいでいただいた方もあるのではないかと心配していました。そういうことで私はこの会議が、ある意味において結論がでないのではないかと心配していました。

しかし会議を開いてみますと、誠に熱心に和気あいあいのうちに会議が進みました。そして考えていることは大体一致しているということでもあります。言い換えれば、もはや時を期せず都市に責任を持つ市長は教育や福祉や生活環境の改善が市長の第一の任務ではなく、平和を子孫に残すことがたった一つのわれわれの将来に残す遺産であるということが分かったのであります。先程広島市長からお話しがあったことですが、この会議にご出席の皆様方ははじめ33カ国111の都市からわれわれの会議に賛同を表明していただいているわけです。私たちはこれらの都市も仲間として未来への理想、核兵器のない社会を目指して交流を深め連絡をとりあいながら、第2回の私共の会議に向けてここに集まった皆様方のすべての人たちの力を結集して進まなければならないと思います。

長崎はこれからも皆様と共に未来に向けて、何がわれわれに一番大切かということを見失うことなく進んでまいりたいと思います。特に、コーディネーターの永井先生、飯島先生にお礼を申し上げ、またこの会議を支えていただいたたくさんの人たちに感謝申し

上げ、特に私個人は長崎市議会の中島議長、池本副議長以下の市議会の方々の大きな支えによって、この会議に臨むことができたことについてもお礼を申し上げたいと思います。

また、再び皆様方とこういう席でお目にかかれることを楽しみにしながら、私のごあいさつとお別れのことばといたします。

ありがとうございました。

## 参加者代表謝辞

ロッテルダム(オランダ)市助役  
ヘンク・ファンデルポルス

ご参加の皆様、オランダからの参加都市アムステルダム・アルンヘム・ミデルブルフ・ロッテルダムおよびその他の参加者全員を代表いたしまして、私は第1回世界平和連帯都市市長会議を組織されました、極めて重要なイニシアチブに対しまして、広島・長崎両市長および両市の皆様に対しお礼を申し上げます。

私はこの会議開催にあたり、時間と莫大なお金が投じられたことは十分認識しております。このことに関しましても感謝申し上げます。

各国の多くの都市から来られた市長さん方が自らの目で、40年前の出来事を見、体験し、何十万という原爆犠牲者の慰霊平和祈念式典に出席できたことが最も重要なことと思います。事実は決して忘れられるものではありません。

軍拡競争の停止と核兵器の廃絶を行うべきだと強く信じ、それぞれの国へ戻ることと私は信じております。いわゆる完全なモラトリアムというものが、ジュネーブ会談の緊急な課題であります。しかし、各国各都市の市民に核兵器禁止が人類の、世界の全市民にとっ

て、生死にかかわる問題であることを納得させることが私たちの義務であると思います。市民を代表する地方自治体が、この闘いでリーダーシップをとらなければならないと思います。人類は生存したいということに基づいて、政府にその義務を確信させるという大きな仕事が待っています。第2回世界平和連帯都市市長会議に向けて、広島の皆様ありがとうございました。長崎の皆様ありがとうございました。

### 参加者代表謝辞

ドレスデン(ドイツ民主共和国)市長  
ゲルハルト・シル

本島市長、荒木市長、ここにお集まり下さいました皆様、まず主催者の方々に心からお礼申し上げます。

私たちは長崎でそして広島で、ほんとうに心よい日々を過ごすことができました。

第1回世界平和連帯都市市長会議開催に当たり、これ以上ない条件を整えて下さいましたことに対し、心から感謝申し上げます。世界各国からお集まりになった皆様と、この機会をもちまして、より一層相互理解を深めることができましたと思います。

私たちは今回の来日で、広島そして長崎で実際に体験したことにより、核軍縮に向けてわれわれの声を今後一層大にしていく決意を新たにいたしました。

私たちは広島アピール・長崎アピールについて、母国の都市の議員そして市民に理解を求めます。大勢の市民の理解を得ることにより、より多くの人々を平和への闘い、つまり二度とわれわれの住む地球が原爆に覆われることのないように仕向けていくことができると思います。

最後に広島・長崎の皆様方に平和とご多幸を心からお祈りいたしまして、私のお礼のことばに代えさせていただきます。

司会(松永長崎国際文化会館館長)

ありがとうございました。

それでは、第1回世界平和連帯都市市長会議の閉会宣言を長崎市助役宮川雅一が行います。

### 閉会宣言

ヒロシマ・ナガサキ平和アピール  
推進委員会副委員長

長崎市助役 宮川 雅一

5日間にわたる熱心な会議大変お疲れさまでございました。皆様方のご協力に対し心から感謝申し上げます。これをもちまして第1回世界平和連帯都市市長会議の閉会を宣言いたします。



# 資 料 編

157

|                               |     |
|-------------------------------|-----|
| 〔資料Ⅰ〕 新聞報道.....               | 159 |
| 〔資料Ⅱ〕 会議実行委員会.....            | 169 |
| 〔資料Ⅲ〕 核兵器廃絶に向けての都市連帯推進計画..... | 172 |



## 〔資料Ⅱ〕 会議実行委員会

## 広島会議実行委員会

| 委員会の役職名 | 職 名           | 氏 名     |
|---------|---------------|---------|
| 委 員 長   | 広 島 市 長       | 荒 木 武   |
| 副 委 員 長 | 広 島 市 助 役     | 松 井 齊   |
| 委 員     | 広 島 市 助 役     | 岩 井 彦二  |
| 〃       | 広 島 市 収 入 役   | 西 田 展 康 |
| 〃       | 広 島 市 市 長 室 長 | 池 田 正 彦 |
| 〃       | 広島市企画調整局長     | 石 橋 正 行 |
| 〃       | 広島市総務局長       | 福 島 隆 義 |
| 〃       | 広島市財政局長       | 佐々木 真 二 |
| 〃       | 広島市衛生局長       | 本 條 喜 紀 |
| 〃       | 広島市経済局長       | 網 井 信 昭 |
| 〃       | 広島市民病院長       | 佐々木 甲子郎 |
| 〃       | 広島平和文化センター理事長 | 河 村 盛 明 |

## 顧 問

| 委員会の役職名 | 職 名           | 氏 名     |
|---------|---------------|---------|
| 顧 問     | 広 島 県 知 事     | 竹 下 虎之助 |
| 〃       | 広 島 県 議 会 議 長 | 木 山 徳 郎 |
| 〃       | 広島商工会議所会頭     | 中 野 重 美 |
| 〃       | 広 島 市 議 会 議 長 | 明 星 正 明 |

## 幹事会

| 幹事会の役職名 | 職 名            | 氏 名     |
|---------|----------------|---------|
| 幹 事 長   | 広島市市長室次長       | 山 田 康   |
| 幹 事     | 広島市企画調整局次長     | 伊 藤 利 彦 |
| 〃       | 広島市総務局次長       | 佐 伯 邦 昭 |
| 〃       | 広島市財政局次長       | 石 川 伯 廣 |
| 〃       | 広島市衛生局原爆被害対策部長 | 下 村 重 圓 |
| 〃       | 広島市経済局商工・消費部長  | 塩 谷 恭 人 |
| 〃       | 広島市民病院事務局次長    | 池 田 勝 茂 |
| 〃       | 広島平和文化センター事務局長 | 三 宅 利 明 |



## 事務局

| 事務局の役職名     | 職 名            | 氏 名     |
|-------------|----------------|---------|
| 事 務 局 長     | 広島市市長室次長       | 山 田 康   |
| 事 務 局 次 長   | 広島平和文化センター事務局長 | 三 宅 利 明 |
| 〃           | 広島市秘書課長        | 黒 瀬 隆   |
| 総 務 部 長     | 広島市平和記念館長      | 米 田 勁 草 |
| 事 業 部 長(兼)  | 広島平和文化センター事務局長 | 三 宅 利 明 |
| 事 業 部 副 部 長 | 〃 事業部長         | 高 橋 昭 博 |
| 主 査         | 広島平和記念館主査      | 増 村 博 敏 |
| 主事(総務担当)    | 〃 主事           | 中 野 豊 三 |
| 主事(事業担当)    | 〃 主事           | 大 谷 和 夫 |

## 長崎会議実行委員会

| 委員会の役職名 | 職 名            | 氏 名     |
|---------|----------------|---------|
| 委 員 長   | 長 崎 市 長        | 本 島 等   |
| 副 委 員 長 | 長 崎 市 助 役      | 宮 川 雅 一 |
| 委 員     | 長 崎 市 助 役      | 橋 本 敏 春 |
| 委 員     | 長 崎 市 収 入 役    | 古 井 一 喜 |
| 委 員     | 長 崎 市 教 育 長    | 黒 岩 竹 二 |
| 委 員     | 長 崎 市 総 務 部 長  | 三 浦 圓   |
| 委 員     | 長 崎 市 財 政 部 長  | 湯 川 司 郎 |
| 委 員     | 長崎市原爆被爆対策部長    | 大 保 輝 昭 |
| 委 員     | 長崎市商工観光部長      | 入 江 定 男 |
| 委 員     | 長 崎 市 衛 生 部 長  | 宿 輪 啓 祐 |
| 委 員     | 長崎市議会事務局長      | 才 津 隆 司 |
| 委 員     | 長崎市選挙管理委員会事務局長 | 村 上 要   |
| 委 員     | 長崎国際文化会館館長     | 松 永 照 正 |

## 顧 問

| 委員会の役職名 | 職 名           | 氏 名     |
|---------|---------------|---------|
| 顧 問     | 長 崎 県 知 事     | 高 田 勇   |
| 顧 問     | 長 崎 県 議 会 議 長 | 古 藤 恒 彦 |
| 顧 問     | 長崎商工会議所会頭     | 清 島 省 三 |
| 顧 問     | 長 崎 市 議 会 議 長 | 中 島 公 彦 |
| 顧 問     | 長崎平和推進協会理事長   | 秋 月 辰一郎 |

## 事務局

| 事務局の役職名 | 職 名            | 氏 名     |
|---------|----------------|---------|
| 事 務 局 長 | 長崎国際文化会館館長     | 松 永 照 正 |
| 総 務 担 当 | 長崎国際文化会館次長     | 白 石 邦 忠 |
|         | 秘 書 課 長        | 片 岡 正 則 |
| 総 務 班   | 長崎国際文化会館次長     | 白 石 邦 忠 |
| 会 議 班   | 長崎国際文化会館参事     | 坂 本 弘   |
| 広 報 班   | 広 報 課 長        | 本 田 敏 雄 |
| 事 業 担 当 | 原爆被爆対策部調査課参事   | 木 下 泰 伯 |
|         | 原爆被爆対策部調査課主査   | 本 田 勝 典 |
| 催 事 班   | 観 光 課 長        | 内 田 進 博 |
| 接 遇 班   | 商 工 課 長        | 清 野 晃   |
|         | 国 際 課 長        | 中 島 吉 盛 |
|         | 議会事務局庶務課長      | 伊達木 秀 人 |
| 警 備 班   | 選挙管理委員会事務局     |         |
|         | 次長兼総務課長        | 川 口 満二郎 |
| 輸 送 班   | 選挙管理委員会事務局選挙課長 | 渡 部 二 夫 |
| 救急医療班   | 衛 生 部 管 理 課 長  | 森 川 狷 介 |
| 事 務 局 員 | 長崎国際文化会館主査     | 田 崎 昇   |
|         | 長崎国際文化会館       | 小 川 泉   |

## 〔資料Ⅲ〕核兵器廃絶に向けての都市連帯推進計画

### 目 的

原爆被爆都市、広島・長崎がその被爆体験に基づいて長年にわたり一貫して訴え続けている核兵器の廃絶は、今や世界の多くの都市で唱えられ、その輪が大きく拡がりつつあります。

こうした都市と都市との緊密な連帯を図ることによって、核兵器廃絶の市民意識を国際的な規模で喚起し、もって世界恒久平和の実現に寄与しようとするものであります。

### 主な事業内容

1. 平和・軍縮に関する宣言文、決議文、メッセージ、図書その他資料を交換する。
2. 広島・長崎の原爆による被害の実相を伝える「原爆写真展」などを開催する。  
広島・長崎両市は、開催に必要な資料の提供などの協力を行う。
3. 連帯都市市長会議を開催し、会議結果を国連の場などに反映させる。

### 経 緯

昭和57年6月24日

ニューヨークの国連本部で開催された第2回国連軍縮特別総会において、荒木広島市長が、世界の都市が国境を越えて連帯し共に核兵器廃絶への道を切り開くよう呼びかける。

昭和57年8月6日

平和記念式典において、全世界に向けて発する平和宣言の中で、再度、都市による連帯を訴える。

昭和58年1月20日

世界23カ国72都市に対し、広島・長崎両市長の連名により、呼びかけの文書を発送する。(以降、広島・長崎両市の共同事業とする。)

昭和58年7月27日

賛同都市に対し、原爆記録映画「ヒロシマ・ナガサキー核戦争のもたらすもの」、「原爆被災写真ポスター」等、原爆被災資料の送付を開始する。

昭和59年5月8日

世界24カ国76都市に対し、第1回世界平和連帯都市市長会議への招請を行う。

昭和59年8月4日

世界30カ国81都市に対し、新たに連帯の呼びかけ及び市長会議への招請を行う。(以降、随時実施)

昭和60年3月1日

国内49自治体に対し、市長会議への案内状を送付する。

昭和60年3月4日

国外35カ国94都市に対し、市長会議への案内状を送付する。

昭和60年8月5日～9日

国外22カ国67都市、国内33自治体から首長等の参加を得て、第1回世界平和連帯都市市長会議を開催し、熱心な討議を行い「広島アピール」・「長崎アピール」・「第3回国連軍縮特別総会への対応方針について」が採択される。

また、この会議を恒久のものとするため、事務局を広島市に設置することが確認される。

## 第1回世界平和連帯都市市長会議報告書

昭和61年7月発行

編 集 第1回世界平和連帯都市市長会議事務局  
発 行 〒730 広島市中区中島町1-2  
(財)広島平和文化センター内  
電 話 (082) 241-5246









